

コチニールの飼養

角 山 幸 洋

一 目 次

1. は じ め に
2. 紫鉀とコチニール
3. 新大陸におけるコチニール飼養
4. コチニール飼養の拡大
5. わが国へのコチニール輸入
6. 明治初期のコチニール飼養
7. お わ り に

1. は じ め に

コチニールは動物染料の一つであるが、その鮮明な色調から室内装飾品・家具調度品などの塗料、食品（とくにチーズ）・歯磨などの着色材、あるいは透明薬品の目安材として、古くから商業取引の上で重要な役割を果たしてきた¹⁾。このことは江戸時代から輸入されてきたわが国においても同様であり、江戸初期から明治中期にかけて、オランダ、そしてイギリス、ドイツなどからコチニールの輸入がみられたが、主として日本画材・染料（とくに紅型、加賀友禅、モスリン紅入有禅染など）として珍重されたのである²⁾。

このコチニールは、中央アメリカ、とくにメキシコ原産と伝えられるが、この地方における需要が盛んになると野生のものを採集することと、サボテンを栽培しコチニールの飼養していたのであるが、スペイン人の征服によって旧大陸との貿易が盛んになると、その独占輸出により、多額の外貨を獲得することになり、さらにはスペイン南部、カナリア諸島などに移植された。このような染料は、いままで旧大陸で使用されてきた紫鉀にとって代わることになった。

コチニール雌虫から染料をとるには、シャボテンに野生の状態で寄生しているものを、シャボテンの葉を箒（刷毛・ブラシなど）で払うなどの方法で布切れの上に落とし、これを集めて乾燥させて色材として使用する。ところが、乾期・雨期のある地方においては、雨期には、コチニールがシャボテンの葉から流れ落ち、収穫量が減少するので、これを囲い込みのなかで人工飼育するようになった。このためには、シャボテン、とくに「ウチデ・シャボテン」の栽培

が必要であった。

本稿では、新大陸においてコチニールの飼養が、どのように行われていたのか、それがどのような状況のもとで、旧大陸へ輸出されるようになったのか、そして紫鉛と商品分類の上で区別されることになったのか、わが国にとっては、江戸から明治時代にかけて、コチニールの輸入量増大につれて、どのような防遏策をとったのか、明治政府はどのようにしてコチニールの国産化をはかり、輸入防遏に努力したのかということを、新旧両大陸の栽培・飼養を通じてみていくことにする。

このコチニールについての研究史からみた業績をあげることは難しく、わが国のものでは、わずかに本草関係の文献にみえるくらいである³⁾。

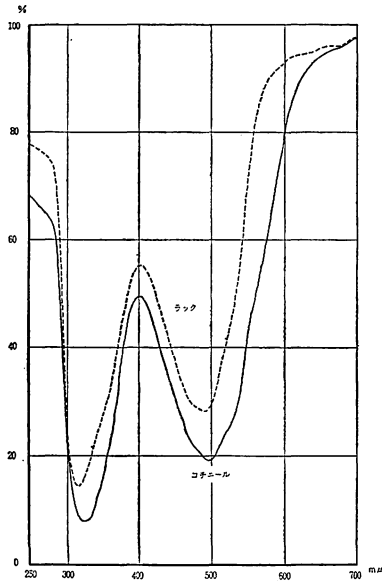
2. 紫鉛とコチニール

コチニールを検討するまえに、コチニールと紫鉛とを対比して、その品質・性質などの相違を明らかにしておくことが必要である。

紫鉛は、アリマキ科の小虫、ラックカイガラムシの雌が、まめ科、くわ科や、むくろじ科などの樹の枝に寄生して、外側に樹脂様の物質を分泌しその表面に固着するもので、いわゆる「ラックダイ Lac Dye」とよばれているものである⁴⁾。やはり薬材と染色材とにつかわれたが、その他に色材としてもつかわれた。中国の南部、とくにインドに多く成育し、わが国へも、奈良時代にはわが国へ渡来していたことが、正倉院御物にも宝蔵せられていることからわかる〔図版11〕。

コチニール *Dactylopius cacti* L. は、サボテン科の植物に寄生する昆虫で、このカイガラ虫科に属する虫は、その無翅の雌虫が褐色のカイガラ状をしており、刺毛の助けて植物器官、とくに嫩枝に固着していて、その吻でこの嫩枝としている。これらの虫は死んだのちも、なお枝に付着していて、乾燥した身体が粉状をしていて卵を包んでいる。なおカイガラ虫の牡は翅をもち、はなはだ敏捷な行動をとる。これに属するものに、前記のほかに白蠟虫 *Coccus Pela Westw* があるが、わずか5ミリくらいの体長で、雌の体液にはカルミン ($O_{17}H_{18}O_{10}$) を含んでいる。

これらの色材について「透過スペクトル」の試験結果では、ラックでは、 $315m\mu$ と $490m\mu$ の箇所、に、落ち込みがみられ、またコチニールでは、 $320m\mu$ と $495m\mu$ の箇所に落ち込みがみられる。これを比較するならば、コチニールは、一般的に、波長の長い側にずれる傾向があり、さらに透過度が少ないという傾向がみられる⁵⁾。ただこれとは反対に、「反射スペクトル」の試験結果によると、反射率は、波長300～400の間においてカーブは、顕著ではなかったが、



〔図〕 1. 透過スペクトル〔コチニール、ラック〕

〔フランス語〕 コチニール Cochenilles.

〔イタリア語〕 コシングリア Coccinglie.

〔ナワトル語〕 ノチェットリ Nocheztli. コチニールラッヘ Cochinillaje. グラナ Grana.

〔スペイン語〕 コチニーヤ Cochinillaj. Cochinillas. とするが、

これは Coccinus の縮小形とみられるものである⁸⁾。なお本稿では、このコチニールという英名を普通名詞として、これ以後、使用することにする。また現在の商品としての形態は、粉末状、ときには液体状に加工することが行われ、袋入、あるいは瓶詰にして一般には販売されている。またこの昆虫の形状が「穀物の実」とよく似ているので、グラナGrana と呼んでいる。

この染色方法については、1650年ごろ、ドイツ人コルネリユス、ドレッフハペルにより発明せられたもので、それまで灰汁と明礬をもちいて染色していたものを、金属塩による媒染により、紅から紫までの範囲の広い堅牢な色調が得られることとなった。すなわち

- 1) アルミナ塩および亜鉛塩には「赤色」を呈する
- 2) マンガン塩には「樺色」を呈する
- 3) 鉄塩には「緋色」を呈する
- 4) 鉛塩には「桔梗色」を呈する
- 5) 銅塩には「紫色」を呈する

ただごくわずかに「突出」した部分が検出されている。

わが国では、ラックを紫鉚・紫梗・紫鉾とし、またコチニールを^{コシスルラ}谷悉涅爾・^{コセニール}哥撰尼爾・^{がらんちゆう}呀蘭虫・^{がらんべい}呀蘭米・洋紅虫（また別名、金花亀）などと記し⁹⁾、またラックの抽出液を木綿に浸漬させ円形の板状にしたものを猩藤脂・猩円紙とも称している。

またコチニールについては、

〔オランダ語〕 コンセニール Konzeniele. コシェニール Koschenille. コチニール Cochenilje

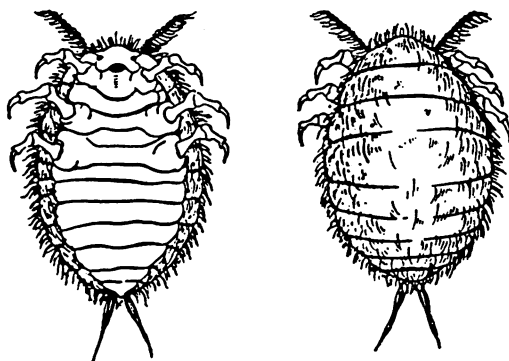
〔ラテン語〕 コーショネーラ Coccionella. コーシヌウス Coccinus.

〔ドイツ語〕 シュイデラウス Schidlaus.

〔イギリス語〕 コチニール Cochineal. コチニール Cochineal⁷⁾.

- 6) 水銀塩にはまた「赤色」を呈する
- 7) 重クロム酸カリでは「蘇芳色」のような色調を呈する
- 8) 硫酸アルミナでは青色を帯びた「赤色」を呈する
- 9) 第一，第二塩化錫では「緋色」を呈する
- 10) 硫酸銅では「灰色」を呈する

このコチニールの染色には，コチニールの雌虫を利用するわけで，これをサボテンの葉より収穫して熱湯で殺し，太陽に曝して乾燥させる。このとき黒色になるので，これを「ブラック・コチニール」とよび〔図版20〕，また雌虫を袋にいれて熱湯を入れずに乾燥するときは，



**Cochineal
(Coccus Cacti)**

〔図〕 2. コチニール (雌虫) 〔拡大〕

白い光沢のあるものとなるので，これを「シルバー・コチニール」とよんでいる〔図版21〕。黒色のものは銀色に比較して優れていて価格も高いといわれる。それはシルバー・コチニールは，鉛粉〔フランスでは，滑石や白色鉛，ロンドンではバリウムの硫化物，重晶石，骨の灰など〕を混入することで増量をはかり販売することもあった。現在，日本で市販されているのは，このうちのブラック・コチニールとシルバー・コチニールであ

る。メキシコ原産と伝えられたが，中南米全域にわたって分布していたことが確認されるし，いずれの地域においても，紀元前後の時期には飼育されて，盛んに染色されていたことが染織遺品の検討を通して明らかにされている。この動物染料が羊毛業とかかわりをもつのは，毛織物の染着性に優れていて，古くから紫紺とならんで大量につかわれてきたからであった。とくに新大陸の発見以後，各地に移養がはかられ，それによって染色された猩々緋は，西欧人の手により，世界各地に輸出された。

3. 新大陸におけるコチニールの飼養

このコチニールの原産地は，メキシコといわれているから，古くからの現住民であるマヤ，アステカ族の伝統をもっている飼養方法からみていくことにする。

まずスペイン征服以前から存在する「アマーテ Amate」や，洋紙に書かれた絵文書コディセ Codice (英語では，コディクス Codex) に多くの描写がみられるが，これらを分類するな

らば、(1)貢納台帳にみられるコチニール収納袋、(2)栽培とその利用を描いたもの、に分けることができる。

『ランダ事物記』〔1564-72年成立、1864年印刷刊行〕によると、「赤い虫（コチニール *Coccus Anix* のことか）、この虫からは非常に良質の黄色い油がとれ、これを腫れたところや傷跡に塗ったりすりこんだりすれば非常に良く効く。これはまた器の塗料にも役にたち、塗装につかえば色を定看させる（これについては意は不明、引用者）」、あるいは「彼らは、昔はえんじ虫〔コチニール〕をよくとっていた。これはインディアスのものが最高といわれるが、おそらくそれは土地が乾燥しているからであろう。場所によってはインディアスたちが今でもこの虫を少しはとっている」とみえているので、(1)薬用、(2)塗料の二つの利用を挙げているが、本稿における中心課題である「染料」については、触れていない⁹⁾。

『貢納台帳』(*Matricula de los Tribute*)〔16世紀前半、メキシコ国立人類学歴史学図書館蔵。16葉のアマーテに描かれている〕は、アステカが統括する地域から納められる産物を描いているが、そのなかに「コチニールの収納袋」を描いている部分がある。ここには各地から中央へ送られてくる産物を描き、その数量を一定の単位にしたがって、個数〔描かれた袋1個は、20袋を意味する〕であらわす方式をとっている。わが国の律令時代に行われた税制のうち、地方の特産物を貢納することを決めた「調」で、これをまとめた台帳としての『正税帳』にあたるものである。ここではコチニールをサイザル麻袋に詰め込んだ袋とみられる。

『メンドーサ絵文書 (*Codix Mendoza, Codice Mendocino*)』〔16世紀中葉、おそらく1541-1542年との間、オックスフォード大学ボードレイナー Bodley 図書館、72葉の洋紙に描かれている〕は、その内容が3部にわかれており、そのうち第2部が「貢納台帳」で、コチニールの収納袋〔1個は20袋に相当する、2個は40袋に相当する〕を掲げ、上記のものと同様な方式にしたがって描いている〔図版8〕¹¹⁾。

また『フローレンス絵文書 (*Codice de Florence, Florentino*)』〔1578-1580年、フローレンス、メディセア・ロウレンチャーナ Biblioteca Medicea-Laurenziana en Florencia 図書館蔵、1210葉の洋紙に記される〕の第11巻地上の事物 *Earthly Things* に、「コチニール栽培図」がみられる。この原書は、メキシコにおいて1980年に復刻されており、また古くはサグン Fr. Bernardino de Sahagun により、『新イスパニア帝国の事物の一般史 *Historia General de las Cosas de Nueva Espana*』としてまとめられており、さらに英訳されているから、関係部分について明らかとなる〔図版9〕¹²⁾。

このコチニールは、ナワトル語で「ノチェットリ *Nocheztli*」とよんでいる。ここでは、コチニールは、(1)染色用、(2)色材との二つの用途をもつものとしてつかわれたようである。この

ことは「紫鉀」と同じであった。そして図版においては、非常に虫を大きく描いているのは、微少な虫であるため意識的に誇張したことによるのであろう。

これらの名称（ノチェットリ）は、「サボテン、オープンティア opuntia（とくにノパル・サボテンを指す）」と「血」からきており、そのことは、サボテンの葉上につくられるからであり、血液のような色調をもち、「血まめ」のような形をしているためである。このコチニールは昆虫の一種であり寄生虫である。コチニール・サボテンは、このコチニールにとって繁殖場所である。ごく小さい飛翔物、昆虫を養うことができるようなサボテンの葉の上に生きており孵化する。その上で大きくなり、成長し、体長を延ばす。体は肥え、体長を増し、体軀は厚くなり、円形状を呈することになる。それ自身、脂肪質で包まれている。寄生虫が成長して、ふくらんでくると、「血まめ」のようになる。そこで蜘蛛の巣のような網状組織で包まれる。そして死がおとずれ、地上に落下する。あるいは堆積し、吹き飛ばされる。ほうきをもって、掻き集められる。

体軀の色調は、洗練されたものではない。乾燥した血液のように――円くらいで、小さくて円く、小さなスポンジ状で乾いたもの一で、黒ずんだ表面からなるものである。わたし（筆者）は、染色をここみみた。そしていくつかのコチニール色調をつくった。この色で「モノ」を塗った。色を適用した。色を混合した。色を塗り重ねた。いくつかのチリー・レッド（トウガラシ色）をつくった。それはチリー・レッドとなった。色はあらわれた。

このような記述には、その一部に、現在における観察の視点とは、またことなるものがみられるのであるが、基本的には、事実関係においての観察には誤りはないものと思われる。

またここでは掲載しなかったが、このコチニールを「パン」の着色材として使用していることである。掲載図〔原図第804図〕では、一人が粉を練っており、他の一人は積み重ねられたパンを販売している。このパンは、いうまでもなくトウモロコシの粉からつくられた「トルティヤ Tortilla」のことで、トルティア自体の黄色にたいして、コチニールの赤色に加わり紅色となり、食欲をそそる色調を生むことになる。

メキシコでは、コチニールの飼養についての文献が、古くから出版されているので、これについて内容を紹介しておく。

まずホセ・アントニオ・デ・アルサタ Jose Antonio de Alzata の『自然界の記録―グラナ（コチニール）加工の研究―』〔メキシコ、1777〕であるが、これは18世紀中葉に書かれたコチニール飼養の手引書とでもいえるもので、コチニールの昆虫学的研究からはじまり、その飼育から、利用におよぶ大部のものである。最近、幸いにもメキシコで影印版が出版されている¹³⁾。

また『グラナ，コチニール』〔メキシコ，1963〕という文献が，「歴史的業績の新メキシコ文献1」に収められている。このなかに『グラナ，コチニールの（製造）手順，方法，および法令』〔メキシコ，1773〕をみることができる¹⁴⁾。この文献集は，コチニール関係の古文書を集大成したものであり，前者の『自然界の記録』に登載している図版も，ここでは編集されたものが挿入されている。これにはコチニール飼養のための作業方法を12の図解で示し，解説を付している。その作業方法は，前者と同じである〔図版3～6〕。

また20世紀にはいつてからも，コチニールの飼養は，続けられていたのであるが，そのなかには，つぎのような製造方法を記録している。

このコチニールの製品は，メキシコでは，つぎのように品質分類され，出荷されている。

- 1) グラナ・フィナ Grana Fina（優良コチニール）
- 2) グラニーヤ Granilla（小粒コチニール）
- 3) ポルボ・デ・グラナ Polvo de Grana（微粒コチニール）
- 4) グラナ・シルベスター Grana Silvester（野生コチニール）

このうちもっとも品質の優良なものはグラナ・フィナ（あるいは，コチニーヤ・フィナ）で生産の中心はメキシコのオハカ州にあり，メキシコ全生産の60パーセントを占めていた。オハカ州統計局の数字によると，1758～1854年までの約100年間の生産高は，1774年には，156万ポンド（リブラ）にも達し最盛期をむかえることになるが，次第に下降線をたどり，50万ポンドの線を維持していた。生産金額では，最高では，1774年の340万メキシコ・ドルであり，19世紀中頃の価格の低下から，50万メキシコ・ドルの線にまで下降することになり，化学染料の出現とともに，一段と低下することになる〔付表1〕。

グアテマラにおけるコチニールは，とくに1920年以前において，モモステナンゴ Momostenango 県で羊毛の染色に盛んに使用されたといわれる。この山間にとりかこまれた地域は，農地に適せず，スペイン人によって羊毛技術が導入せられてからは，グアテマラ唯一の毛布生産地となった。これは，赤色に染色するための唯一の染料であり，購入のためにサテカペケツ Sacatepequez 県，アンティグア Antigua 県へ赴くか，あるいは送付してもらったものを使用したという。そしてアメリカの歴史地理学者マックブライド Felix Webster McBrydeは，モモステナンゴの老人からの聞き書によると，コチニールは，アンティグア地方からもたらされたものであり，赤色の染色には，これのみがつかわれたという。そして古くは，モモステナンゴの「市」だけで，年間2,000ポンドの量が販売されたという。

基本的な染色方法としては，モモステナンゴ付近で生育しているシンチェ・ネグリート Chinche negrita，またはシンコ・ネグリートス Cinco negritos (*Lantana camara* L.) の枝・

葉・花が集められ、これをコチニールとともに煮て染液をつくる。そしてライムを媒染剤としてつかい、5ポンドの羊毛に対して、ライム40-50個の割合で果実を半分の切ったものを染液に加える。これにより染色される。

しかし1920年代からは、ドイツのアニン染料が導入せられ、他の染料とおなじように、赤色染料が大量につかわれたが、あまり堅牢度には期待できなかったという。またこのときからコチニールとの割建により、深みのある染色ができたという¹⁵⁾。

またオニール女史が訪れた1930年代には、わずか使用量は100ポンドと推測され、そして1960年代にはみられなくなってしまった。このときオニール女史が、グアテマラのモモステナング Momostenango で織工から聞き取りによるコチニール染色法は、つぎのような処方で、

| | |
|---------|-------|
| 羊毛 | 総1ポンド |
| コチニール | 6オンス |
| チチネグリート | 手一杯 |

(チチネグリート *Lantana camara* L. は、発色材として葉・小枝など、すべての植物の部位がつかわれる)

| | |
|-----|-----|
| レモン | 50個 |
|-----|-----|

によるといわれ、それぞれ使用材料の違いにより発色を異にするという¹⁶⁾。この方法は、前述のマックブライトの報告と同じである。

グアテマラにおけるコチニールの飼育状況については、1839-40年に、中央アメリカを旅行したステヘンス John L. Stephens の旅行記に、サカパ Sacapa 県グアラン Gualan 付近のコチニール飼育状況、アンティグア Atigua 最大のコチニール飼育、アマティトラン Amatitlan 付近の飼育についての記述がみられる。ステヘンスは、このようなプランテーションを「コチニール農場」とし、あるときは「コチニール・アシエンダ (大農場)」, 「シャボテンとコチニール農場」とよんでいる。

アンティグアの記述については、「われわれは、山並みでかこまれた広い平野に入った。コチニールとともにその基礎 (シャボテンのこと) が栽培されている」とし、またアンティグア最大のビダウリー Vidaury 氏の大農場を訪問したときについて、「この植物は、シャボテンの一種で、インディアン・コーンの栽培列のように、列をなして植えつけられていた。これらの高さは、4フィートくらいであった」としている。ここでは、シャボテンの栽培の範囲と、コチニールが飼養される状況について詳細に述べている。

またアマティトラン Amatitlan 付近の栽培については、「道路の両側には、背の高い土塀があり、シャボテンは、アンティグアよりも、もっと頑丈なもので、そこよりわずか25マイル

しか離れていないのかかわらず、より価値のあるものを産み出したが、それは気候が非常にちがっていたため、それぞれのシーズンに、二回の収穫がえられたのである」と記している。そして最大の栽培地では、40万本ものサボテンが植えられていたとする¹⁷⁾。

このグアテマラでは、1821年には7県、1868年には17県に拡大されたが、実際には、最盛期には22県（これはほとんどの県にわたる）におよんでいる。その主な生産地域は、ルビオ Rubio の論文によると、

グアテマラ Guatemala 県
 バハ・ベラパス Baja Verapaz 県
 チキムラ Chiquimula 県
 ハラッパ Jalapa 県
 フウチアパフ Jutiapaf 県
 アマティラン Amatitlan 県
 サカテペッケツ Sacatepequez 県

であったという。

そして寄生するウチデ・サボテンの種類により、コチニールの収穫の程度がことになってくるが、このうちつぎのような5種類のサボテンが関係するといわれる。

カクタス・テストデイヌウス (Cactus Testudinus) [亀の足シャボテン]
 カクタス・シルベストリス・Th. (Cactus Sylvestris Th.) [野生シャボテン]
 カクタス・カンペチアヌス・Th. (Cactus Campechianus Th.) [カンペチエのシャボテン]
 カクタス・ラツウム・Th. (Cactus Latum Th.) [黄色のシャボテン]
 カクタス・コチニリーフェル・L. (Cactus Cochenillifer L.) [コチニール・シャボテン]

このうち最初に掲げたものが、最高の品質をつくりだすことになり、第二に掲げたものを含めて、「La Cochnilla Fina (高級コチニール)、あるいは Grana fina」を生産することになる¹⁸⁾。この品質分類は、メキシコの場合と同じ方法によっている。

この飼養状況は非常に簡単な記述ではあるが、当時の飼養状況を把握するためには、重要な記述である。飼養は、地域によって乾季と雨季に分かれるため、飼養は慎重にならざるを得ず、とくに雨季には最大の注意が払わなければならないとしている。「雌が受精して大きくなると採集がはじまる。これをリスの尾でこすりおとし、熱湯にひたして殺したのち、日光またはストーブの湯で乾燥する。採集は、年に三回行われる。卵をもった雌のみが採集されるの

で、一回目には若い雌が採集され、三回目には年とったものも、若いものも、皮までも無差別に集められる。雨季がはじまる前に、若いコチニールの付着したシャボテンの枝を切り落とし、家のなかに保存して、コチニールが雨のために死ぬのを防ぐことになる」と述べている¹⁹⁾。

おそらくこのような飼育状況は、天然染料から、合成染料へ移行する1960年代まで、継続するのであるが、それ以後、急速に減少することになる。それに加えてグアテマラでは、度重なる地震により、この減少傾向に拍車をかけた²⁰⁾。

このようなコチニール生産にたいして、ヨーロッパへ輸出されることになるが、スペイン征服後、17世紀1/4期までの外国貿易をとりあつかったものに、リー Raymond L. Lee 女史の論文がある。これによると、スペイン商人の求めに応じて生産拡大がはかられ、新大陸からスペインに送られる重要な輸出商品となった²¹⁾。

グアテマラから、ヨーロッパへ輸出されたコチニールの数量は、不明の部分もあるが、つぎのとおりである。

〔表〕 1. コチニール輸出数量

| | 輸出量 (L.) | 価額 (ドル) |
|------|-------------|-----------------|
| 1867 | 1, 525, 782 | 1, 068, 047. 40 |
| 1868 | 1, 273, 591 | 891, 513. 70 |
| 1869 | 1, 862, 667 | 1, 266, 613. 56 |
| 1870 | 1, 443, 357 | 867, 414. 20 |
| 1871 | 1, 460, 082 | 867, 025. 20 |

- 〔註〕 1. 数字には、輸出金額は含んでいない。
 2. 1872年2月のグアテマラ会計士ビーセント・ゼバドアによる。
 3. Boletin Oficial, ano 1872. 1873
 4. 輸出量リブラ Libra=ポンドと同量。

この数字からみると、最終時期における輸出量についての数字は、グアテマラからは、約150ポンドのコチニールが、スペイン人の手により、ヨーロッパに輸出されていたものとみてよい。

南米、とくに太平洋に面する中央アンデス地帯においては、コチニールは、紀元前後には、盛んに飼育されていた。この染織遺品による分析の結果は、多くの文献にみることができる。たとえば、フェスター

G. A. Fester によると、ナスカ Nazca 期とチムー Chimu 期の染織遺品にみることができるとしている。この二つの文化に存在したとする事実は、それ以前に起こったパラカス Paracas 期より、以後の文化であることがわかる²²⁾。またパラカス・オッカへ Paracas Ocaje 遺跡出土の染織遺品を調査したキング King 女史は、ナショナル・アニリン研究所 National Aniline Laboratory で、染色試験（この方法については明記していない）した結果、赤色はコチニール染料によるものではなく、茜科に属する植物（レブニュム種）によるものであったとしている²³⁾。このことにより、ナスカ期以後に導入せられたものであることが確実となった。ただこの茜科に属する植物が、どのような試験方法により確定せられたかということである。これはメキシコの寄生虫が、もともとペルーに存在していたものを利用しなかったのか、あるいはメ

キシコとの交流により、アンデス地帯へも拡大することになったのか、またナスカ期になって、初めて利用するようになったのは、どのような理由にもとづくのであるかについて、考がえてみる必要がある。

そして分光分析試験は、ナショナル・アニリン研究所のマックス・サルツマンなどの手により行われているが、そのうちコチニールについては、ティワナコ Tihuanaco 期 (ca. 1000A. D.) のものと、チャンカイ chancay IV期 (ca. 1450-1550) の二点について試験せられ、これについても、反射スペクトルであるために、505と540m μ の箇所、突出した部分がみられ、コチニールが使用された事実を示している²⁴⁾。

インカ Inca 期のとき、この寄生虫は多くの「記録者」(クロニスタ Cronista) が報告しているように広く飼養されていたことは明らかである。

またコボ P. Bernabe Cobo による記録では、雌は、豆の一種であるガルバンソ Garbanzo か、フリホーレス (いずれも微小粒の豆) くらいの体長をもつものとしている。そして野生種は、現在、プーノ Puno 地方にみられるとしている²⁵⁾。

そしてアコスタ P. Acosta は、新大陸のシャボテンとコチニールについて、つぎのように述べている²⁶⁾。

さらに別種のシャボテンで、実はならないけれども、非常に珍重され、大そう気をくばって栽培されるものがある。つまり、「トゥーナ」(シャボテン) の実はならないが、そのかわりえんじ虫がつく種類で、その木の葉をよく手入れすると、そこに小さな虫がつき、それを薄い膜が覆っているのである。これを注意深く採集したのが、余りにも有名な新大陸のコチニリャで、これで美しいえんじ虫の染料ができる。この虫を乾かして、そのままエスパニャに持って行くと、大した金になる商品なので、このコチニリャまたはえんじ虫の一アローバ [約11.5キログラム] が、何ドゥカードもする。(15) 87年の船団で5677アローバのえんじ虫が運ばれたが、これは28万3750ペソの値に達し、通常毎年このくらいの富が運ばれてくるのである。

この種のシャボテンは、温暖な、やや寒いくらいの土地にできる。ペルーでは、今までのところ産出しない。エスパニャでもこのような植物を見たことがあるが、問題とする必要もなさそうなものだ (増田義郎訳)。

現在では、ペルーのアレキッパ Alequipa 州・タクナ Tacna 州の一部で栽培されるにすぎなくなり、ほとんどが外貨獲得のために、染色用、あるいは食品着色用として、イタリアとフランスへ輸出されていて、そのためにペルーでは、ヨーロッパへの輸出産業の一つとして飼養が盛んであり、外貨獲得のために飼養が奨励されている²⁷⁾。

4. コチニール飼養の拡大

ヨーロッパに輸入されたコチニールは、急速な勢いで、需要をのばしていった。しかしこのような染料が何によってつくられたのか、明らかにすることはできなかった²⁸⁾。

また1570年代に、メキシコのアカプルコから、フィリピンのマニラとの間に、ガレオン船による太平洋横断航路が開拓せられると、グラナは、短期間のあいだに、西へと送られた、更に中国、東南アジアへも、転送されることになる²⁹⁾。

メキシコから、ヨーロッパへの輸出量は、1594年においては、銀輸出量のわずか9パーセントにすぎなかった。しかし急速に、輸出量が増加し、最後には、この比率は、1 : 3 にまで伸びることになる。大航海時代にあって、このコチニールは需要の増大することから、新大陸から移植されることになり、スペイン南部、カナリア諸島、それにスペインの無敵艦隊が、オランダに殲滅されてからは、インドネシアのジャワ島にも、移植されることになる。

そして紫釐（梗）Kermes insect (*Coccus ilicis*) は、このようなコチニールの参入にたいして対抗せざるをえなかった。いままで紫釐にたよっていたベニスの染色業者は、これを変革せざるを得なくなり、これらを利用するベニスの染色業者により、「ベニス・スカーレット」なる色調を生み出すこととなったのである。

ヨーロッパ毛織物の染色は、赤と黒を基調とするもので、そのうち黒は僧侶を、赤は軍隊を象徴する色でもあった。このような赤の染色には、このような染着性のよい動物染料を使用してきた。最初は、ヨーロッパで入手が容易であるケルメスによっていたが、16世紀以後、新大陸からコチニールが大量に輸入されるようになると、鮮明な色調がこれにとってかわって従来のケルメスを駆逐し、19世紀後半には、ケルメスは、わずかに東欧の人たちにものみ使用されるに過ぎなくなっていった。

またメキシコのアカプルコから、フィリピンのマニラに達するガレオン航路は、相互に貴重な貿易品をもたらすことになるが、メキシコから太平洋を横断し西へ送られた物資のなかに、このコチニールがみられる。

そしてスペイン人で染色されたものの手によって、アフリカのアルゼリア、そしてアフリカ北部のカナリア諸島に移植された³⁰⁾。

5. わが国へのコチニール輸入

コチニールの輸入以前にすでにわが国へ「紫釐」の輸入があるが、これは薬材としての輸入であり、動物染料としてではなかった。これは奈良時代には輸入され正倉院宝物に宝蔵されて

いる。その解説は、「種種薬帳に『紫鉱六十斤 并袋』と記されているが、いま宝庫に残っている紫鉛は、図のように枝に固着したもの（ステックラックとよぶべきものであろう）や、分離したもの、あわせて約八六三〇グラム、もとの袋は失われている」としている〔図版11〕⁸¹⁾。ただ染料として使用していたかについては疑問で、薬材（浄血剤、湿痺、切り傷の外用药など）として使われたとみられる。

それ以後の輸入経過については明らかでないが、江戸時代にも多量に輸入せられており、明治以後の貿易統計によると、毎年ではないが、一定の量が輸入されている。このときも「漢方薬」として分類されているので、「着色材」ではない。江戸時代には、コチニールは、オランダ商館の手によりもたらされているが、とくに友禅の染色に使用すること、そして日本画の画材として、紅・蘇芳とともに使用されたので、オランダを通じての「コチニール」輸入量は増大するにいたった。おそらくオランダ領であったインドネシアからの輸入とみられる。

わが国へは、徳川家康により、ヌエバ・エスパニア Nueva Espana（現在のメキシコ）との間に、交易をもつこととなるや、京都の商人が派遣され、夥しい数量の「猩々緋」がもたらされている。これらの品々は、メキシコとの直接貿易によっているために、ヨーロッパよりイスパニア、イギリス、オランダとの貿易によってもたらされたものより安価であったといわれる。

またガレオン Galleon 船による太平洋横断航路の開設によって、メキシコのアカプルコ Acapulco とフィリッパンのマニラ Manila を中継地としてわが国へもたらされた「猩々緋」も、価格の点において安価であったといわれる⁸²⁾。

これらの製品とともに、オランダの手によって染料として輸入せられ、その色調の鮮やかなことから、日本画材、友禅染の染料として使用が増加し、それとともにコチニール飼養の意向が高まり、長崎のオランダ商館を通じて輸入するよりも、染料の国産化をするべく、そのサボテンの栽培方法、コチニールの飼養方法を求めることになる。

したがって、これらを段階的にみるならば、

- 1) 毛製品（猩々緋）にたいするあこがれから、コチニールで染色された製品が大量に輸入されることとなり、外貨の流出をまねく段階。
- 2) それらが「コチニール」という染料により、染色されていたという記録を知った段階。
- 3) 「コチニール」栽培と染色技術を導入し、猩々緋の国産化を試みようとした段階。
- 4) 「コチニール」が見本として少量でも輸入せられた段階。
- 5) 実際に試験的にでもコチニール染色が行われた段階。

となり、これらの発展段階のあることを考慮にいれて導入なり、関係文献をみていくことが必

要である。

もちろん近世において、新大陸の発見以後、メキシコから大量にスペイン本国にもたらされ、そしてコチニール染色された毛織物は「猩々緋」と名付けられ、東洋貿易の重要な輸出品としてわが国へ継続的に輸入が計られることになる。また新大陸に開かれた新スペイン王国としてのヌエバ・エスパニア王国（現在のメキシコ共和国）とのあいだに、徳川家康は国交を開くことを計画し、京都の商人を派遣しているが、これらの商人がもたらしたものに「猩々緋」がみられる³³⁾。これはメキシコから西へのルートによるコチニールの輸入毛織物であるが、わが国はキリスト禁令のために、一時的な貿易に終始したのであった。

このために、戦国武将の間では、「猩々緋」が、その生命力としてもてはやされ、意匠の奇抜さと、あざやかな色彩にとりいれられて、被服・陣羽織をかざった。このために、遠くからの色彩・意匠のはなやかさとが、これらの豪華さに加えていた。それに、「火事羽織・頭巾・胸掛・合羽・馬氈・鞍掛・駄覆・押掛」などに、毛織物を使用するのであり、これには「羅紗・猩々緋・羅背板」などが使われたのである。

また戦国から江戸時代にかけての文献には、「猩々緋」とみえる毛織物の使用が散見する。高坂昌信『甲陽軍艦』のなかに、織田信長から武田信玄に購られた進物のなかに「からのかしら」「毛氈300枚」「猩々緋の笠」がみえている³⁴⁾。また長林樵隠『豊薩軍記』〔寛延2（1749）年自序、10巻10冊〕に、天正3（1575）年には、ポルトガル船が臼杵の浦についたときには、綾羅錦繡伽羅に、「猩々皮（緋）の二十間つつき」を加えて、多くの珍宝がもたらされている³⁵⁾。

江戸時代にはいつてからも、オランダ人によりもたらされており、幕府への献上物のなかに多くみることができる。また三角貿易により、猩々緋をもたらした。これらは、本国よりも中近東のコロマンデル産によるのかも知れない。

オランダが日本へ初めてきたのは、慶長5（1600）年のことで、オランダ商船リーフデ号が豊後の臼杵湾に漂着したのが最初であった。この漂着したのが最初で慶長11（1606）年には、対日貿易開始のきっかけとなった。『平戸オランダ商館日記』には皇帝（将軍）への献上物を選定するなかに、「猩々緋一反」とみえていて、つぎの「赤羅紗三反」とは区別して書き挙げている。この区別は多くはないのであるが価格の点において区別することの意味がそこに存在したのであろう。

| | | |
|------------------------|------|----|
| 1636〔寛永13〕年3月21日皇帝へ | 赤猩々緋 | 1反 |
| 1636〔寛永13〕年8月29日閣老内匠殿 | 猩々緋 | 1反 |
| 1640〔寛永17〕年10月16日閣老内匠殿 | 猩々緋 | 1反 |

[長さ24エル 4分3, 買入価格19グルデン]

1640 [寛永17] 年10月16日閣老太田備中殿 猩々緋 1反

「猩々緋1反, 蒸留酒1樽だけを気持ちよく受取り」とみえる。

1640 [寛永17] 年7月16日に平戸候 猩々緋 1反

1640 [寛永17] 年10月30日に平戸候 猩々緋 1反

1640 [寛永17] 年10月31日にバタバアへ返却 猩々緋 [再出] 1反

これらは購入して入手したものとみられる。大抵は贈物をして「この国の慣例のとおり」「彼(閣老, 註は引用者)に贈り物を渡した」「贈り物は, つぎの通りである」「お返しとして, つぎの品々を贈る」とあるように, すべては, 贈答交易による贈り物とみている⁸⁶⁾。

この平戸にかわって, 長崎にオランダ商館があつめられた。そのために商人は長崎に集められた。これには記事がダブルことがあるが, ここにふたたび採録することにする⁸⁷⁾。

1641 [寛永18] 年1月15日日本閣下に, 猩々緋 3反
[12月21日]

1643 [寛永20] 年8月10日積荷に, 猩々緋ラーケン 3P

1643 [寛永20] 年12月9日日本閣下に, 猩々緋ラーケン 2反

1644 [正保元] 年8月30日積荷に, 猩々緋ラーケン 3P

1647 [正保元] 年12月1日 猩々緋 1反

1650 [正保元] 年1月18日日本閣下に, 猩々皮 3反

1650 [慶安3] 年12月28日顧問官に, 猩々緋 5反

1650 [慶安3] 年4月7日オランダ国王より, 猩々緋 1反

カピタンより, 猩々緋 1反

オランダ国王より, 猩々緋 1反

このつぎに平戸にきたのはイギリスであるが, このときに將軍他の人物に, 贈り物として「猩々緋 *scharlaecken* は喜ばれ, 赤, 緋及び黒ラーケンも同様である。黄, 緑, 青, 灰色も可なるが, 時には肝臓色, 麝香色 *Muscus*, 紫, 鼠其の他灰色の暗色がかったものと変更するが, 然るべく, 黄は最も好まれず, 我が国の織物中余り高価なラーケンは商人にも貴族にも認められぬ」としている。

その結果, 記述によると, わが国にもたらしたものは, つぎのとおり,

1642 [寛永18] 年1月14日皇帝・太子に, 猩々緋羅紗 3反

1642 [寛永18] 年1月17日馬場彦四郎に, 猩々緋生糸 [羅紗か] 3斤

1643 [寛永19] 年8月10日積荷に, 猩々緋 *Carmosijn roode scharlaeichen*

| | | |
|------------------------|-------------------------------------|-----|
| | | 72反 |
| 1643〔寛永20〕年12月9日皇帝陛下に、 | 緋ラーケン Carmosijin roode scharlaecken | |
| | | 3反 |
| | 猩々緋羅紗 scharlaecken | 2反 |
| | 猩々緋 scharlaecken | 3反 |
| 1643〔寛永20〕年8月30日積荷に、 | 緋ラーケン Carmosijin roode scharlaecken | 84反 |
| | 猩々緋ラーケン rood scharlaecken. | 3反 |
| 1644〔寛永20〕年8月30日積荷に、 | 緋ラーケン | 84反 |
| 〔再出〕 | 12月9日閣下、太子、顧問官に、 | |
| | 猩々緋羅紗 | 2反 |

である。ここで注意しなければならないのは「猩々緋」「緋ラーケン」であるが、ここでは、原文の翻訳にしたがうが、翻訳には原文ともに誤りがある³⁹⁾。

たとえば、『敍有院殿古実記』には、「寛文三（1663）年三月朔日蘭人御覧あり、貢物は猩々緋一種、羅背板一種、羅紗二種云々」とみえているように、オランダ人が献上物として幕府に納めていて、猩々緋は、その最初書き上げているのである³⁹⁾。

これらの毛織物の禁令は、寛文8（1668）年に公布されたもので、3回目の公布であった。同年の江戸大火により、公布されたもので、大倭約令では当時毛織が輸入品であったために、徹底的に禁制品となったものとみられる。町人に毛織の羽織・合羽が禁じられて「町人衣類、上下随其分限、倭約を相守可着之、毛織之羽織かつは弥無用事」（禁3154）「町人衣類、上下随其分限、倭約を相守可着之、毛織之羽織合羽弥無用之事」（禁3038）、武士にも同樹「家来中、向後、紗綾、縮緬、毛織物類、着用之儀停止」（禁2237）に禁じられている。禁令に関連して、これらの毛織物については、すでに、寛文8（1668）年5月8日に、

「異国江遣間敷并異国より持渡間敷品之覚

一、絹紬木綿織物類

（中略）

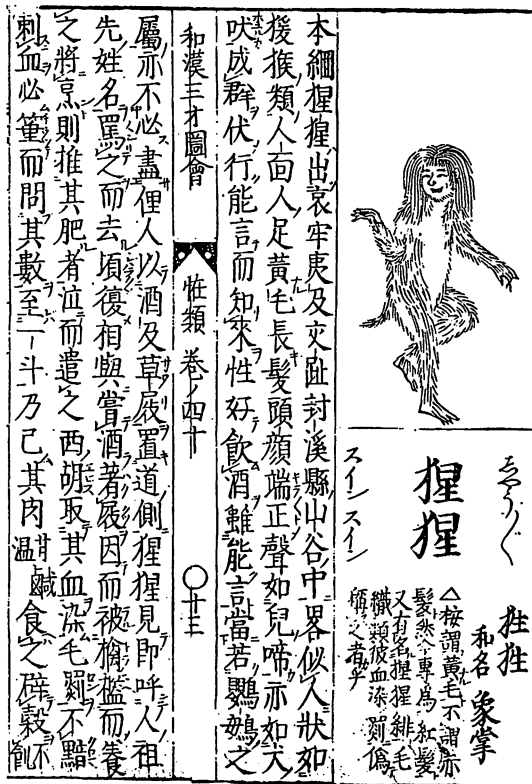
一、羅紗せいた、猩々皮

右三色者、可持渡事、右之外毛織者、可為無用候

（4108）」

前文では、輸出入を禁し、後文では、三色のものを持ち渡すことは禁止されていないけれども、この他の毛織物については、ご法度であるとしている⁴⁰⁾。

これも天和3（1683）年には、天和の禁令には、百姓・町人之衣服について、規制しているが、金沢藩では「羅紗・猩々皮・毛織衣服之外高直成織物」についての規制をしている⁴¹⁾。ま



〔図〕5. 『和漢三才図絵』にみえる「猩猩」

た熊本藩では、毛織物の輸入するに長崎とは、立地条件が比較的近いこともあって、その種類も多く目立っているが、安永8（1779）年には「内袖、襟持来之、天鷲絨、羅紗、猩々緋」などを禁止している⁴²⁾。このように、庶民の間では、「羅紗・ゴロフクレン Golf-Grain・羅紗板」の使用があげられるが、色調については、規制を決めておらず、「猩々緋」とはいっても、色調からみて藕粉、あるいは茜染であった可能性もあり、それらは各種の文献に散見している。

そして井原西鶴『日本永代蔵』〔貞享5（1688）年刊〕巻6に「本朝の織絹・から物を調べ、毛類は猩々緋の百間つゞき」とか⁴³⁾、喜多川季莊（守貞）『守貞漫稿』〔天保8（1837）～嘉永6（1853）年〕には「猩々緋ハ赤色也」「胴着ハ猩

々緋ニテ仕立脇ノ下ヲ糸カガリニスベシ」などとみえている⁴⁴⁾。

このように「猩々緋」は、オランダ人の贈答貿易によって、その貿易事業の継続を願うために上京して入貢しているが、その贈物のなかには、必ず、といってよい程、少数ではあるが、「猩々緋」が贈物として登場してくる。そして書き上げられる順位は、つねに織物のなかでも、上位におかれているわけである⁴⁵⁾。そしてその贈られる次第により、上位から下位に順次に贈られて「火事装束・陣羽織」へと仕立てあげられたのである。

この猩々緋とは、「猩猩」、つまり中国の想像上の怪獣であるが、この血をもって染めたものを「猩々緋」としている。寺島良安『和漢三才図絵』〔正徳（1713）年刊〕巻40「猩猩」の項に、「△思うに（本文に）黄毛といって赤髪とはいってないのに、今もっぱら紅髪としている。また猩猩緋という毛織物があるが、これは猩猩の血で染めた麝の類であると偽って称しているのであらうか。（中略）西の胡人は、猩猩の血をとって毛織物を染めるが、色は黒ずまない。猩猩の血を取るときは、必ず猩猩を鞭うって、どれだけ取ってよいかを尋ね、一斗になると取るのをやめる」（『東洋文庫本』訳文による）としている⁴⁶⁾。また後藤梨春『紅毛談』〔2

巻、明和2（1765）年刊〕ではこの猩々緋について、紫釰とし、下記の説明を加えている。

○猩々緋、此せうぜうひの染草の事を、和人南海に住む猩々の血をとりて、染るといふならはせり、此ごとを先年、どうでえひふるすといへる、かびたんに問しに、左にあらず、もっとも紅花蘚枋木の類にてはなし、猩々緋を染る国にて見しに、今日本にて見れば、椎の木といへるものに、木目も葉形も似たる木あり、其の木老木になれば、腐目、ふし穴に、夏中少き黒き虫おびただしく生ず、其形酒酢等にわく虫に似たり、此虫をおほく取あつめ、蒸籠などのごとく、四重にこしらへたる箱をかさね、其はこの底を三重は、絵絹のごときものにてはり、さて彼虫をとりあつめ、第一の箱につめ、ふたをしておくとき、其内にも虫のつよきは、底の絹をくいやぶり、過半は第二の箱へおつる、第二のはこにてもつよきぶんは、底絹を食やぶり、第三のはこへ落る、第三のはこもまたかくのごとし、第四の箱へおちたるぶんばかりを取あつめ壺に入、麩酢にかきまぜ、蓋をして口をちやんにてぬり、地へうづめおき、一年ほど経て、来夏中ひらき見れば、其色紅と変ず、取りだしすりつぶし、水にてとき、しやうじやう并に毛類を染るに、色よしといへり、光生按るに、和俗の猩々の血にて染るといふも、疑らくは此説の聞あやまりにてもあらんか、和俗酒にわく虫をしやうじやうといへばなり⁴⁷⁾。

このように、はじめは紫釰によるものとわかっていたのであるが、その地以外の人たちにとっては、鮮やかな色調が「血」のような色に染色せられているので、架空の動物の血と類似させて俗説ができたのであろう。それに瑞祥動物として日本の武将にとりいられることになり、陣羽織などの羅紗には、かならずといってよいくらい猩々緋で染色したものが、つかわれることになるのである。

これらは輸入量の関係から、前述したように多くの染色は蘇芳によったものであり、ときには「ラック」によるか、あるいは「ラック」と茜（日本茜・インド茜・西洋茜のいずれによるものかは不明）との併用であったとみてよいであろう。そして江戸後期には、一部にコチニールの染色試験がみられるようになるという過程をたどるのである。そしてとくに毛織物は、武将の陣羽織・武具の装飾・毛氈などにつかわれており、これがために、コチニール飼養の意向が高まり、本格的に着手する契機ともなるのである。

ただこれらの染色がどのような染料によるものかは、実際には明らかにされていなかった。しかし一般には架空上の動物である猩々の血、ひいては何か動物の血による染色であろうという単純な知識が普及していたのである。ところが第八代将軍吉宗の時期には、このコチニール染色の面でも解明を試み、それを導入しようとする努力がみられた。享保16（1731）年3月のこと、オランダ・カピタンは江戸へ例参した。このときには「入貢の阿蘭人御覧あり、貢物は

猩々緋一種、羅紗一種、ごろふくれん一種、はあい一種、羅背板一種、へるとへとあん一種、びらうど一種、ふらた一種、綸子一種、縞珍一種、純子一種、縞布四種、海黄三種、金巾一種、更紗一種、酒二種なり」とみえている⁴⁸⁾。

幕府は医官丹羽正伯をその宿舎につかわし、物産のことを詢問させている。この時、猩々緋を染める原料について質問したが、オランダ人の回答は「本国より西の方、アメリカと云ふ国あり、其の国に蜜蜂の如き紫色なる虫あり、其の虫を多く採り、虫の血汁を以て染むる由を伝聞す。其の虫の名を、コンシニールと申す」ということであつた⁴⁹⁾。したがって伝聞による知識として、コチニールによる染色を、昆虫の体液による染色であることは、幕府は認識していたようである。

対オランダ貿易による毛織物の大量輸入は、その染料をも国産化することにより、外貨、当時では、銅の流出を招来することになるので、毛織物技術の導入と、それを染色するコチニール染料の導入が計画されることになる。そして長崎奉行からオランダ商館への「コチニール虫の作り方」の問い合わせとなつたのである。ところがオランダ側は、貿易の独占が途絶することをおそれて、十分に熟慮の上、「ホメル Chomel の字書中第一巻と第七巻とに在るコチニルエ Cochenilje 及び染色 Verwen の項に見ゆる記載」を渡すことによって解決をはかろうとした⁵⁰⁾。

ジャワ島におけるバタヴィア政庁（オランダ東インド会社）においては、のちに述べるごとくコチニール飼養に成功をみていたのであるが、常に商業取引を優先にみる外交関係にあつたため、形式的な取扱いをしたのであろう。それに欧州はナポレオン戦乱により、東洋貿易にまで手を延ばすことが困難となり、細部にまで幕府の要求には応じられない状況となつていたのである⁵¹⁾。

『厚生新編』に訳出された「コーセニリイ」の項目をみるに、

按に和蘭舶上齋し来るもの有り、これ猩々緋を染る虫是なりと、本邦の人に珍す故に少許といへども往々これを匿蔵する人もあり、其形質の如きは本条に詳なり。

とわが国に舶載されて染色する材料であることが、前書において解説されており、以下、忠実に訳出されている。なお原文は、翻訳に使用したとみられる「蕃書取調」と記載のある国会図書館所蔵のものの「コチニール」関係部分について、翻訳文をのせ、原文をそのまま〔図版10〕に掲げる。

コーセニリイは形小粒を為すが如き形にして圓くして三稜或は四角形をなす。外面は帯白裏面は赤し。亜墨利加地方より我方に致す。殊に多く墨是古（メキシコ）国より輸送す。

此物本来小虫にして「ワンド・ロイセン」（扁風の類）のごとし生活するものは彼地の無

花果の一種「カルダッセ・ラケッテ・ノバル・オピユンチア」(「チュナミチアル」又「ヤローレ・サニグイネ・ヲ・コシニルリヘラ」共に羅甸)と名る木に生ず。土人意を用ひて其樹を培養す。其樹赤花を開き、且美紅の実を結ぶ、此虫其花と実の赤汁を吸取りて餌食として其体自ら赤色を為すといふ、年中其季候を論ぜず、夥しく其虫を採り聚む。其法は其生植の下に多羅絨を展開げ木を振ひ揺してこれを落し、あつめて小鉢へ入水に浸し殺して乾すなり。右にいふ一種の無果花状の生植二種あり、一種は莢種^{うへきや}戸にて培養す。一種は自然に野生し刺棘多し。此種に生ずるの虫は培養園生の樹に生ずるものよりは甚色薄く劣品とす。

ここでは、まず虫の生息について述べ、そしてつぎにメキシコ(当時、新スペイン王国と称する国であり、「ノーバ・イスパニヤ、新伊斯把泥亜」とよんでいる)に於ける飼養方法について述べている。

「ノーバ・スバニイ」(新伊斯把泥亜係干亜墨利加洲)の土人多く此「コーセニリイ」を採り聚るに其地の雨多き時候に近づく頃に「ノバルボーム」(前に出づ)より得る也。是は右にいへる如く此樹の花実を此虫の好んで吸出すを以てなり。及ち土人これより虫を取りて其樹に着けて家に貯へ長育せしむ。雨多き時候を過ぎ去れば「パステルス」と名る小籠の内に入れ貯ふ。此籠の内に貯ふること十四五日許、而後其籠を右の「ノバルスボーム」に附け置くに暫く日を経るの間に此虫其樹に夥く卵子を慈息し、自ら其巢を捨て「ノバルス」樹の葉に遍く浸行す。而して其子を蓄息すること三ヶ月より多くは日を経ることなし。但其前に於て少しばかりを採ることあり。これは卵を着るの後は速に衰老して死するものなるを以てなり。扱其初めて生ずる子長じて再び生ずる時も採りあつむ。たゞ是も亦子も生ずれば死するなり。且其樹に残りたる虫及子は三ヶ月を経れば亦子を生ず。但右の雨多き季候に近づきて夥き雨にて皆死すが故に其老も子も尽く取りて家に帰るなり。是を第三度の採り集るの候とす。其家に持帰りて後は十分足る程の子を貯ふべし。是れ翌年其類を蓄息するが為なり。扱収め貯ふべからずと定るの虫は皆採りて水に浸し、或は竈炉に炮炙し殺すべし。或は土人の恒に蒸餅を製するに用る偏平鍋に入れ炒りて殺すなり。其水に入れ殺す所の虫は外面赭色なり。其の竈炉にて炮し殺すものは斑文ありて灰色なり。鍋にて乾すものは黒して全く焦れたるが如し。然れども其裏は鮮美なる紅粉充つるなり。此虫如此貴むべくして高価を獲へき色料を固定す。こゝを以てよく乾し碎き、或は粉となし持来るなり。此虫其脚及「リンゲン」(輪の義虫に具するの状と見えたり)及卵形の軀粉にしたる物にても顕微鏡を仮らずして、右のごとき数種を見ることを得るなり。人云此虫を養育し聚め取る等に因て人民夥く射利し、甚だ豊かに生活することを得、年々

八十万斤余（一斤と訳するは百二八錢なり）の「コーセニール」を彼亜墨利加地方より歐羅巴諸州に持来り、販売するなり。但其中三分の一は「ウィルトコーセリール」と称する物なり。

これ以下の文では、品質の問題を述べ、さらに医薬、染料、画料、化粧料（頬紅）、さらにブランケットを紅染して化粧用布につかうことなど、利用方法を詳細に述べている。

このような翻訳事業を通じて、「紫鉛」と「コチニール」の実態が明らかにされていくことになるが、その過程で文献だけにたよることになるために、記述に不明確なことがみられる。

たとえば中嶋真兵衛（清香）『舶来諸産解説七拾条』〔享和3（1803）年〕では、「没薬」の項目に、

紅毛語　メルラー

羅甸語　ドユンミメルレー

漢名　没薬

唐蜜持渡ル中チ琥珀色ノ如ク。透色有ヲ上品トス。然トモ透様許リハ来ラス。黒色ニシテ。砂石ヲ挟ム。天塊ノ中ニ雑合セ持来ル。是ヲ薬肆ニ於テ。煉リ没薬ト云。真物ニシテ水脂ナリ。別ニ類ナシ。然ニ近來ノ一書ニ。没薬二種有リトシ花没薬ト云フ物ヲ上品トス。花没薬ト云者ハ。本草綱目虫部ニ出ス紫鉛ノ事ナリ。樹上ニ虫ノ造ル処ノ者ナリ。上品ハ紫赤色ニシテ透キ有リ。下品ハ黒色或ハ褐色等ニテ。打碎ケハ内ニ白斑アリ。形チ種種有リ。樹枝ニ附テ海参ヲ見ル如キ者多シ。綱目燕（膳）脂ノ下ニ。時珍曰ク一種以紫鉛汁染綿而成者謂之胡燕（膳）脂ト有リ。俗ニ照燕（膳）脂ト名テ、持来ル者ナリ。然レトモ今来ルハ。蘇木汁ヲ以テ染ル者ナリ。紫鉛ヲ水ニ浸シ。綿ヲ染メ試ルニ絵家染家等ニ。所用ノ色ハ出ス。考ルニ蜜産ノ。コーセニール樹上ニ聚ル小虫ナリ。猩々緋ヲ染ル由シ。水ニ浸シ是ヲ試ルニ。紫色ハ出テ。真紅色ハ出ズ。二種共ニ別ニ法有テ。鮮紅色ニ成ルヤ不審ト。紫鉛ノ主治ヲ考ルニ。大同小異アリ。強チニ咎ムベカラザルカ。（下線引用者）

この著書では、花没薬、つまり紫鉛のことを記し、最後にコチニールのことを記しているのであるが、すでに幕府に於いて、コチニールの必要性が認識されていた時期であり、その染色についても、このような試みがなされていたのであろう。ただどのような生態であったかについて明らかにされていないのは、前述のものと同様である⁵²⁾。

栗本丹州『栗氏千虫譜』〔文化8（1811）成立〕は、原本が残されていないが、明治になってから、曲直頼輔（10巻）と服部雪斎（3巻）の両氏により手写したものが、現存している。ここでは寛政年中（1789-1800）に、紅毛船によりもたらされたとし、また明和初（1764）年に実見したとしているコチニールを乾燥した状態で図示している。ここで明礬により発色さ

せ彩色に用いると記すのみで、猩々緋のような羊毛染色について明らかにしていないのは、何かの理由があったのであろうか⁵⁸⁾。絵図とともに解説は「図版12～16」のとおりであるが、他の文献との比較において再掲することにする。

紫鉚虫 寛政中紅毛船齋来者蛮名コーセニイル、大サ碧蟬花（オオツユグサ）ノ実ノ如シ、状長円色々ニシテ不定、背高クツマミタル如ク筋ウネリテ黒光漆ニテ塗タルカ如シ、ウスキ処ハ赤ク燕脂色ヲナスモノアリ、質堅硬ナリ、腹ハ平ク凹ク内エ巻込ムカ如キモノアリ、脚ナシ、木枝ヘ粘着スル処之

此虫二三粒ヲ小皿ニ入レ、熱湯ヲ灌入レ、明礬小許ヲ入レハ、立処ニ紅汁出テ、燕脂色出ル、煮ツメテ彩色ニ用フベシ、虫ハ皮ノミ残ルモノナリ、コレハゼルマニヤ國中ヨリ産スル一種ノ虫卵ニシテ、「ヨハンニスブルード」ト云モノニシテ、今「コーセニール」ニ充テ偽ルモノナリ、別ニ図説アリ参考スベシ

ここで「紫鉚」とするのは、適当な訳語がなかったためで、「呀蘭虫」の名称は、このとき使われていない。ラックカイガラ虫の用語をあてるべきとする解説者小西正泰の意見があるが、これはコチニールの種類からみて適当ではない。

江戸後期における『厚生新編』の翻訳事業がもたらした結果、紫鉚とコチニールの区別は、解消することになった。おそらくその翻訳から得た知識によるものとみられるのであるが、大関増業『止戈枢要』巻155～6「彩色類聚」〔文化11（1814）～文政5（1822）年〕には、この二つを区別して解説を加えている。しかしながら「コチニール」の部分は、何分とも伝聞によるもので実際の虫を観察したわけではないので、簡単な記述におわっている。

○綿臙脂

コーセーニイルレヲルムと云虫を、醋に浸し、綿へとりしを、シヤウエンジと云也。漢に腥紅とも猩紅とも云。コーセ〔一〕ニイルハ木ニ生ずる虫也。霸王樹に生ずるとも、何れ熱国ならでハ生ずまじ。

○胡臙脂製 愚考

一、紫鉚 三合 水一升

右火ニ掛テ「ニ」煮立程煎ジ、滓ヲ去リ、煎ジツメ、上ニ、アクノ如キ物ノ浮ムヲ時々ニ漉シ、三度位ス。一升ノ水、一合五、六勺ニ煎ジツマリシ時、又漉シテ炉灰ノアクヲ清水ニテ出シ、差シ、ツマリタル水ヲ延テ、極上ノ明礬少シ入ル、右ノ水ニ凡二リン位ナリ。次ニ一宿ニ宿置ク也。赤クナル。

一、又方

紫鉚十五匁、血竭三匁、何モ、ラ〔ヨ〕ク打搥ク。鬱金六匁ヲ加フ。

右ヲ焼醋一合五勺ニ五、六日浸シ、上水ヲ取り、半分ニ煮ツメ、尤滓ヲ去ルベシ。炉火ノアクヲ、上水四十八匁煮ツメ、二十五匁位へ、右アク水ヲ五匁入、極上ノ明礬ヲ五リン入ルレバ赤色出ル。其汁ヲ以テ綿ヲ染メ、乾テ後湯ヲ二勺位入、シボリ、其汁ヘ明礬ヲ又加ル、是ニテヨク色〔出〕ル。

一、同思考、胡臙脂

初ニ細カニ引サキ、皿ニ水ヲ、タップリ入レ、ツ〔シ〕バラク漬置テ、絞ル。其滓ヲ去リ、火ニカケ、トロトロト能ク煮テ、後、イサラン、上水ヲ取り、下ニ残リシヲ用ベシとするように、すでにオランダ語がつかわれており、「綿臙脂」とし、従来からの紫鉛を「胡臙脂」（「思考」と割註をいれている）として分類し、染色方法を解説している⁵⁴⁾。

また飯室庄左衛門（楽圃）『虫譜図説』12巻〔安政3（1856）年成立〕においても、このことは同じであり、虫類の分類においては正鵠をえているが、内容は、従来の文献からの編集したものすぎない。

そのうち、「巻二、卵生類二、凡そ百四十五品」のうちに、「紫鉛」としてまとめられており〔図版18〕

紫鉛 コムラツカ ショウムシ コラセエニール

コセニール シ コクシネル

積名 赤膠 紫梗 尚田丹 紫草茸（本草逢原）

集解 時珍曰紫鉛出南蛮乃細虫如蟻。緑樹枝造成正如。今之冬青樹上小虫造白蠟。一般故人多挿枝造之今呉人以造。

臙脂 此三図寒泉子蔵スル所ノ虫譜ヨリ写テ其処ノ名ヲ補フ。然ドモ其虫ハ見ル事アリ。今其真ヲ得テ貯フ。其巢ノ状聞コトナシ。其巢初白蠟虫ノ如ク、後赤色ニ変スト云。

蜜名コムラツカ。又云フロイテ。地名イトラツカハ凝脂ノゴトシ。コシネルラ虫ト云。此巢ヲ作ルコトヲ聞ス。別物ナルヤ知ラズ。（下線、引用者）

錦氈赦 調子（芥子園画伝）細目訳説紫鉛ノ汁ニテ綿ヲ染タル者形チ扁クシテ作り成ス者ナリ赤ク径リ六七寸許今画家用ル者是ナリ又シボリカスヲ火漆ト云フ。

とみえているが、ここではコチニールの名称は知っていても、その生態については見聞していないので、分からないとしている⁵⁵⁾。ただ写生は、実物からのものとみることができ、紫鉛の項目のなかにいれ、色材として分類しているが、動物分類学の立場からも混同しているとみることとはできない。

幕府の意図したコチニール飼養は挫折せざるをえなかったが、コチニールに対する知識は、染色された毛織物、コチニール虫、オランダの文献などによって、ある程度の資料収集段階に

まで達していたようである。しかし残念なことには、生態の観察するにまでおよばず、単に知識の羅列にすぎなかったことで、誤解を招く結果ともなったのである。このことはヨーロッパにコチニールがもたらされたときの事情とよく似ている。

わが国では、実際にコチニールと紫鉛とは区別できなかったようであるが、幕末の本草関係の文献には多くの混同がみられることは、先学の指摘するところである。とくに紫鉛の名称の下にコチニールを含めているのは、用途からみてやむを得ないが、実際には舶来の際の商品形態は異なっており、これを区別し図示しているのは、全く混同をおかしているといえないのであろう。

そのようなことから、むしろコチニールについての昆虫学的知識は、染料として認識せられ集成される段階において現れるとみてよい。

前田利保『啓蒙虫譜図解』上下2巻〔天保12（1841）年序〕においては、つぎのように説明し、その関係する絵図〔図版17〕を添えている。

紫鉛〔音鉈〕 蜜産ナリ、綿臙脂ヲ染ル虫ナリ、蜜名コーセニルレト云、其状ハウエークロイクニ似タリ〔木虱ノ類ヲ云〕、金体尽ク紅紫ノ血液ヲ含ム、多取り圧搾液汁ニテ片作綿子ヲ染ナスモノ、画匠今日用ユル処ノ生臙脂ト呼モノ是ナリ、此虫亞墨利加州〔南印度極熱ノ国名ナリ〕ヨリ産ス無花果実ニ似タリ樹上生スト云、俗ニ此虫ノ液汁ニテ猩々絨ヲ染成ト云伝フ。

明和初年（1764年のこと、注引用者）、蜜人将来ノコーセニルレ五七個ヲ浪華兼葭堂ヨリ贈レリ、其状豇豆半粒ノ大ニシテ、背ハ微ク高ク起リ肚ハ微ク凹ニシテ全形扁ク木虱ニ似タリ、横文蟻虫ノ如シ、色紫黒ニシテ皺文ノ間白ク光アリ、銀粉ヲスリコミタルニ似タリ、其ノ一個ヲ小碟子ニ入レ、白湯ヲ三分一許漉入レハ、虫身ヨリ深紫紅色ノ液汁出テ鮮血ノ如シ、針類ヲ以テ虫殻ヲ去リ、緩火ニ上テ極テ上好ノ稜色ニ用ラル、胭脂トナル、真ニ奇物ナリ、其後、此上品ナルモノ、舶来ナキ歟見アタラズ、今舶来アレ共、至テ下品ニシテ、形小扁ニシテ青黒微ク鉄色ヲ帯フ、此モノ入ル瑪泥國中ホレイゴニウムノ地方シントヤンノ辺ノ樹木ニ於テ取ル赤虫米粒ノ如シヨハンニスブルト虫ト云是ヲ以テコーセニルレナリトナリト欺称シテ貿易ス、コレ亦一種ノ虫卵ナリ、日光ノ暖処ニ置ハ、遂ニ生育シテ羽アル虫ニ変化スト云、此虫ノ造処ノ巢木枝ニ卷付テ生ス、赤ク透明堅硬ニシテ、松脂ノ如クミユ、形虫蠟ノ木ニ着、生ルカ如シ、俗云、紫梗。薬舗俗ニ花没薬ト呼モノ是ナリ。

時珍謂之、蟻漆赤絮者ナリ、薬用ノ麒麟竭ハ乃此虫ヲ産スル紫鉛樹ノ脂ナリト云。一ニ云、蘭名コンセニリイン、羅甸コン子ルラ、生活ノ時、細小八足アリテ蠕動スブルードロ

セノ小虫ナリ、此説貯血ト云テ、凡蚊虱類ヲ指テ云、霸王樹上ニ産ス、此虫ノ紅汁ヲ以テ猩々絨ヲ染ルト云。

蜜名ゴムラッカ 又云フロレンテイ（地名）トテツカ（疑脂ノ事）、蜜説ニコシ子ルラノ虫、此巢ヲ作ル事ナン、マタ別物ナリトス。

この挿図には、紫鉚として「猩々虫 コセニール」と「花没薬 紫草茸 本草逢原」とみえており、この二つを正しく分けて図解している⁵⁶⁾。

またこの写本の後書には、つぎのような記載がみられる。

「本草啓蒙虫譜上下二巻ハ富山侯前田利保公ノ著ハス所ナリ。然レドモ世間伝本有ルコト稀ナリ、近比書肆文淵堂偶然齎ラス所ノ蘭翁万亀譜ト題スルー書ヲ検スルニ、其所国ノ無類ノ順序啓蒙虫部所載ノ品類ト全然相符合スルヲ見ルノミナラズ、富山城中所採ノ虫図ヲ載スルモノ一ニシテ、足ラザルヨリ之ヲ推スニ、其利保公編集ノ書タルヤ問ハズシテ知ルベキナリ。依テ其代価ヲ問フニ十二金ナリト云フ。予其不廉ニ驚キタレドモ珍書一度逸セバ後得可ラザルヲ思ヒ、歳末数日ノ閑ヲ偷ミ之ヲ自写シ以テ他日ノ参考ニ備フト云フ。

明治四十三年十二月廿八日

白礫水識 』

しかしながら文献を検討することにより、この二つの動物染料について、このとき明らかに区別をしていた。

ここで問題となるのは、わが国におけるコチニール染色の始まりを、何時とみるか、そして最初の試験的染色から、実際の染色への移行をどのようにみるかである。しかしながら、このようなことについては、輸入数量がごくわずかで、高価であったことから、ごく少数の本草学者に珍重されるにすぎなかったものであり、大量に輸入されてくる幕末まで、実際の染色の試みは引き延ばされることになる。

毛利藩士中島治平が、文久2（1862）年に、山口の染工たちに教授した『西洋染方』は、彼が蘭学のなかから学びとり、それを門人篠原宇兵衛が講義を筆記したものであるが、コチニールの染法の試験部分があるので、ここに引用しておくことにする。

紅色の染る所の物は、コーセニルレメタの兜虫の類也。是は種々のサボテンにおおく生ずる所のもの也。是によって此樹に生ずる小き虫を求めて熱板の上に殺す故に、彼の身体集縮する物也。面又白粉の如き物を覆物也。是商家に売買する所の物にして、是を以染工におひて猩々緋、并緋羅紗染、又は紫色の染に迄用ゆべきもの也。亦メンコーセニルと云もの有て、夫は樹木の漆において樹枝の漆を以生活する所の物にして、染物として用ゆる、夫は染工において塩酸に錫塩を加へる所の物を以なすべきもの也

ここにおいてまずコチニールの実体に注目し、ブラック・コチニール、シルバー・コチニー

ルの区別を明らかにするとともに、染色方法による色相の違いを述べている。そしてメンコーセニルとは、紫釐を指すのであるが、生態上の区分・商品形態について明白に区別し、金属媒染することを明らかにしている⁵⁷⁾。

いままでコチニール染色について、明治初期まで、下らなければならないことを指摘しているものがあるが、このような山口藩の実情をみて、幕末段階に於ける試験的染色の事実を指摘しておくことにする。

6. 明治初期のコチニール飼養

幕末の開港時の関税は、あらゆる物品に5分の関税が掛けられることになり、このコチニールにあっても例外ではなく、同様に5分の関税がかけられている。慶応2（1866）年5月13日の『改税約書』では、

運上目録 輸入品第一種

8号 コシニイル（洋紅） 百斤毎 一分銀21箇

〔英文〕

No. 8 Cochineal 100catties 21Boos

とみえている⁵⁸⁾。

しかしながらその輸入数量は年次を追って多額となり、物価騰貴のこともあるが、明治14（1822）年までは、上昇をつづけ需要にともなって1万斤、約7,000円の価格にまで達したのである。コチニールの輸入は、明治17（1884）年には、一時的に停止するけれども、約4年間ほど継続し、明治22（1899）年をもって終わりを告げる。これ以後、輸入は統計数字の上からは、みることはできない。なお紫釐だけは、漢方薬として輸入されるが、これも明治30（1897）年をもって終了するのか、モスリン紅入友禅の増加による統計数値の一時的増加の減少によるものではないかとの見方もあるが、統計様式に変更があったために削減されるのか、統計数字から姿を消すことになる。

明治以後のコチニールの輸入数量は、統計によるとつぎのとおりである（次ページ）。

ここに熱帯植物栽培の一貫として、サボテンの栽培と、それにともなうコチニールの飼養に適する小笠原島が浮上してくる。

小笠原島は、明治8（1876）年に領有問題が解決したので、その開拓につとめ、外務・内務・大蔵・海軍の四省によって、官員が派遣され現地調査されることになる。そのとき同年6月には、オランダ公使フォン・ウエッケルリンに依頼して、ジャワ島産のキニーネ・コーヒの苗木を取り寄せられるように交渉したけれども、10月になっても未着であるので、オランダ公

〔表〕 2. コチニール・紫梗輸入数量

| 年 次 | 呀 蘭 虫 (薬材・製薬・染料・顔料類) | | | 紫 梗 (脂・油・蠟・石鹼類) | | |
|---------------|-------------------------|--------|--------|--------------------|-------|--------|
| | 数量(斤) | 元値(円) | 平均単価 | 数量(斤) | 元値(円) | 平均単価 |
| 明治11 (1878) 年 | 675 | 552 | 0. 818 | — | — | — |
| 明治12 (1879) 年 | 2, 530 | 1, 867 | 0. 739 | 1, 027 | 164 | 0. 160 |
| 明治13 (1880) 年 | 2, 171 | 1, 816 | 0. 836 | 4, 743 | 666 | 0. 140 |
| 明治14 (1881) 年 | 10, 883 | 6, 953 | 0. 639 | 750 | 117 | 0. 156 |
| 明治15 (1882) 年 | 2, 202 | 1, 129 | 0. 513 | 5, 420 | 640 | 0. 118 |
| 明治16 (1883) 年 | 873 | 322 | 0. 385 | 300 | 22 | 0. 073 |
| 明治17 (1884) 年 | — | — | — | 493 | 46 | 0. 093 |

〔註〕統計局編『日本帝国統計年鑑』による。なお、この数値しか掲載されていないので、これにつづく数値は〔付表〕として掲げる『大日本外国貿易年表』によらねたい。

使は、この苗木を手持ちのものより日本政府へ贈与することにし、苗木一箱九種類、種子等一箱、珈琲倍〔陪カ〕殖法一冊を内務省に寄贈している。おそらくこの苗木をも持参したのであろう。

明治8 (1876) 年11月21日には、工部省新造の明治丸により、外務四等属出仕田辺太一・大蔵省租税権助林 正明・海軍大尉根津勢吉・内務省地理寮七等出仕小花作助（旧名、小花作之助）の四省委員をはじめとして、各省より随行する大蔵中属原田明善・同十等出仕藤村図高・内務省勅業少属杉田晋・外務省十三等出仕天野瑚次郎・海軍省十四等出仕関唯左右・外務省雇佐藤忠篤のほか、従者一名、写真師松崎晋二、ほか一名（氏名不詳）を加えた一行十三名の小笠原諸島探査員が任命され、一カ月の予定で現地調査のために横浜を出帆し、同月24日には、父島二見港に入港し、各地を調査の上、12月16日に帰京したのち、復命意見書を政府に提出している⁵⁹⁾。

この開拓の拠点となる袋沢については、明治9 (1877) 年2月内務省上申の「小笠原島写真」に、一部撮影されたものがあるが⁶⁰⁾、何分ともまだ未着手の状態であり、開発したのちの栽培状況を示すための参考とはならない〔図版19〕。そのとき所持する植物のなかには、コーヒ苗木は含まれておらず枯萎したのであろうか。このように熱帯植物の移植に積極的であったのであるが、何分ともこの熱帯に属する地域にとってどのような植物栽培が適当であるかについては、判断を決し兼ねていたのである。このときロシアに滞在の榎本武揚は、「日本領南洋群島之真景小笠原之部 榎本所蔵」という小笠原島の写真を保存しているが、これらの写真を焼増したものを入手していたのであろう。

この復命書によって政府は、明治9 (1877) 年3月に、内務省管轄として小笠原島に出張所

を設置し⁶¹⁾、移民の渡航するのを奨励した。同年7月には、四省合議として島規則・輸出入品税則を作成して布告し、また同年8月10日には、御用取扱として、内務権少丞小花作助・同十等出仕藤森図高を任命し、小笠原等出張所職制ならびに事務章程を設定した。この人たちは、12月22日に現地に赴任している⁶²⁾。そして10月17日に寺島外務郷は、イタリア、イギリス、デンマーク、アメリカ、オーストリア、ベルギー、ペルー、ロシア、フランス、スペインなどの各国公使にたいして、「我南海中ノ一属島小笠原島ノ義。明治八年我政府ヨリ官吏ヲ派シ實際ヲ験セシメ候処、追々移住ノモノ相殖今般該島へ官庁ヲ設ケ、官吏ヲ駅セシメ、諸規則ヲ設ケ取締為候条、此段及御通知候」と通牒を發し、ここにわが国領土を確定するにいたった。同年10月には、内務権少書記官小花作助は、松方正義勸業頭に上申書を提出して、諸苗木種物農具を持送り、試験栽培することにしたが、このことは翌10年4月になり、海島綿種などを取り寄せて栽培していることでわかる。これらは勸業局新宿試験場の手をわずらわせたもので、小笠原島出張所において試験的に栽培されたものであった。しかし天候の加減で草綿は失敗に帰し、他の植物についても耕種の時期を失して失敗に終わった。

このため本格的な移植計画は、明治11(1878)にまで引き延ばされることになる。その熱帯植物栽培計画の淵源をたどるならば、榎本武揚が駐箚ロシア大使に任にあり、千島樺太交換条約の締結に努力しているところであり、ほかの上申書にみえることから判断するに、明治8(1876)年3月ごろのこと「○日本南方ニ幾那珈琲及談婆姑植付之説 武揚」を提出しており、ここでは栽培品種については「幾那・珈琲・談婆姑」の三種であり、主題としてとりあげるコチニールについては含まれてはいない。公文書にみえるものは「榎本武揚上申幾那珈琲樹等植付之義ニ付伺」で、同年5月25日の日付となっており、このとき「正院御上申按」に上記の榎本説が付属している⁶³⁾。このように榎本武揚の構想は広大で、単に日本の農業開発にだけに止まらず、ロシア国農業博物館の求めに応じて、日本より種子・苗木を取り寄せ、ロシアに移植することで相互に農業の交流をはかることに貢献しているのである⁶⁴⁾。

このことは榎本武揚自身よりの手紙でも明らかである。明治9(1877)年9月12日夜付託状の一節に、

先般御被下候小笠原写真は、一札の折手本と為し、その表紙に手製のガルフアニ仕掛にて「日本領南洋群島之真景小笠原之部 榎本所蔵」といふ文字を銅版にして取附候積りにて、銅版は既に出来上り申候、手前は小笠原島より尚以南にあるラドローネン諸島をも、イスパニヤより買ひ入れて日本領と為す事を先頃建言し、当節は朝廷評議最中の由、先達而寺島より申越せり。これは種々込み入りたる見込有之事にて、一寸は申上兼候。右の次第に付小笠原島等の写真は別して楽しみにながめ申候。

とあるように、すでにこの時期以前に政府へあらゆる農業開発の可能性を建言していたのである⁶⁵⁾。この建言のことは、友人山口堤雲にあてた書翰にもみることができる。

このロシアからの献策は、わが国政府によって採用をみることになり、明治11(1878)年1月のこと、内務省博物局大書記官田中芳男の建議により、内務省は熱帯植物の栽植を試験するために、コーヒー、キニーネ、コチニール、ゴム、オリーブの苗木・種子の買入、移植を試みようとした。田中芳男の伺書は、宛先を欠いているが、勸農局長松方正義に提出されたものは、勸農局博物局より有用諸植物苗木種子を送り、栽培試験をしてきたが、「幾那樹(キニーネ)」「珈琲(コーヒー)」「阿利機樹(オリーブ)」などの有用植物を実際に栽培する時期となったとみてよい。明治11(1878)年2月(2月21日決判)田中芳男が勸農局長松方正義に提出した伺書によると、「第二 呀蘭虫即チ洋紅虫」では、コチニール、つまり洋紅は、この近年来、画工染匠による需重が増加し、そのため輸入もおびたしくなっていた。これについてはわが国では産出しないし、この小笠原島でもこれまで栽培試験はしていないけれども、暖度の島であるので適当に生育するものと思われる。そのためにインドなどから、原種を取り寄せ試植することにしたいとする。このような主旨の上申書が松方正義に提出されている。

第二 呀蘭虫ハ霸王樹ニ生スル小虫ニシテ此虫ヲ乾枯セシモノヲ呀蘭米ト称ス。輸出物ノ一ナリ。以テ鮮紅色ノ染料ヲ製ス。洋紅ト称ス。画工及ヒ染匠ノ最モ貴重スル所ニシテ、常ニ輸入ニ仰グト雖モ、高価ナルヲ以テ、未タ十分使用スルニ至ラス、此虫ハ本邦ニ無之故ニ、未タ該島ヘ移シ不申候得共、其成育ニ須要ナル霸王樹ノ生育スヘキ地ナラバ、此虫ヲ繁殖セシムベキ者ナルヲ以テ養育セハ必ス出来可申ト存候、此虫ハ原来墨西哥産ニテ、其地ニハ大ニ繁育セシモノナレドモ、又之ヲ亞弗利加州ノ北部其他ヘモ移シテ、一ノ産物トナセリ、因テ右地ヨリ便宜ヲ以テ取寄〔寄〕度見込

とあり、そのうち「多年ヲ経ズシテ収納アルハ幾那樹、呀蘭米ニ可有之。右ヲ以テ方今着手ノ専業トナシ」とするように有力な産物と目されていた⁶⁶⁾。このことからみると、もとの榎本武揚原案は、田中芳男によって内容が更に拡大され、コチニールの飼養が加わったものとみられるのである。それをとりまとめて『勸農局第四回年報』〔明治十一年度〕には、「本年(明治11年、引用者註)一月小笠原島ヘ移植ノ議興ル、該島ハ暖地ニ付、暖国産ノ植物ヲ試植セシニ、土地ニ適当シ繁殖セルニ因リ、幾那樹、「エラスチカゴム」樹、珈琲樹、阿利機樹、及ヒ洋紅虫等ハ必用ノ為ニ付、同年三月一等属武昌昌次ヲ印度地瓜哇島ニ派遣シ、右物産ヲ購求セシメ、該島ヘ移植蓄息セシメン事ヲ謀レリ」と報告している⁶⁷⁾。

どのような新規植物移植計画であったかは、明治11(1878)年2月5日決判の武昌昌次が提出した「小笠原島ヘ植物移植費用概算伺」によると、明治11年度より10カ年間の総額で7,734

円90銭を要し、11年目からは毎年4,335円50銭の経費を見込んでいるもので、そのうちコチニールの飼養、サボテン栽培の直接費用（植物買上費）については、

金五百円 洋種霸王樹千本但シ尅本ニ付 金五拾銭

是レハ呀蘭虫ヲ養育スル為ニ植付候分

金貳百円 呀蘭虫原種取寄費

右印度地方ヨリ購求候分

金三百円 和産霸王樹三千本 但シ尅本ニ付金拾銭

是ハ前同断呀蘭虫養育ノ為植付候分

とみえている。ここでは建物建設費・人件費・輸送費などを省略したが、何分とも本土より離れた南方の島嶼であるため、直接費だけでも膨大な経費を必要としたのであった。ここで注目しておきたいのは、コチニールの購入をインドとしていることで、このことはジャワ島での購入については、すでに購入の見込みがないとの認識があったものとみられる⁶⁸⁾。

ただこの目的は、「呀蘭虫原種養育之方法」となっており、このときすでに購入のためだけでなく、栽培のための参考資料の入手ということも考慮に入れられなければならないと思われる。

植物買付の任を帯びた内務一等属武田昌次は、外務省よりイギリス、オランダ公使への紹介状を携え、同年3月5日午前5時横浜を出航、目的地のジャワ島におもむいた。

これより以後の訪問日程のすべてを、報告書（瓜哇印度派出御用済概略之義上申ノ件）にしたがって、つぎに掲げることにする⁶⁹⁾。

明治11（1878）年3月5日午前5時 横浜出港（ピー・オー航海会社郵船）

3月12日午後3時 香港着 汽船ロンバルデー号

3月14日 香港発

3月 日 シンガポール港着（英領インド通航会社郵船）

3月27日 ジャワ島バタビア港着

オランダ政府総督に面謁、無賃駅馬にて、ボイテンゾルグ府をへて、スクブミ県下で、コーヒ栽培を取調、バンドン県下で、キニーネ栽培取調、キニーネ苗木1500本・コーヒ苗木500本、同種子・コチニール虫原種・其他有用植物苗木を受贈される。

4月23日 ジャワ島バタビア港出港

4月25日 シンガポール港発（英領インド通航会社郵船）

英領マレイ地マラカ、ペナン、英領ビルマ地モルメイン、ラングーン

の四港をへて

5月16日 印度カルカッタ着

5月29日 シムラにおいて、農商租税寮大書記官へ面会、紹介状をうける。

6月7日 東北インド、ヒマラヤ山脈ダージリン山着。

ベンガル政府総督，ならびに大書記官へ面会，マンポー・ランビー両山（インド中第一のキニーネ栽培地）にてキニーネ樹栽培・キニーネ塩製造取調，熟実のとき，種子輸送を約定する。

6月14日 カルカタ府着

植物農産およびベンガル政府キニーネ栽培場総監督キングに面会，農業諸件を質問する。

ボンベイ府・マダラス府をへて

7月1日 マダラス管轄地南インド，ネルゲリー山の内ヲ、タカモンド着マダラス政府総督，ならびに大書記官に面会。

ドダペットの地にて，キニーネ・コーヒ栽培取調。

7月 日 南インド，チュチコリン港出帆

7月11日 セイロン島コロombo府着

セイロン政府大書記官へ面会

プサワリチャルド（コロombo府より74里，ケンデー山より25里）にて，コーヒ栽培，コーヒ水車場など取調。

7月21日 セイロン島ポイントデゴール出帆（フランス国郵船）

7月21日 シンガポール港着

サイゴン，香港をへて

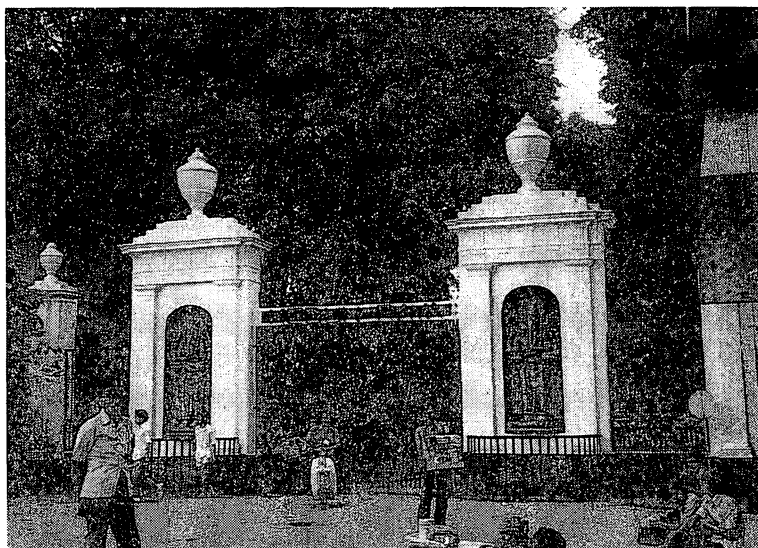
8月12日 横浜着

8月13日 東京着

このうち目的とするキニーネ，コーヒ苗木の半数については，オランダ総督の配慮によって購入することができたが，コチニールについては，

一，呀蘭虫ハ瓜哇地ニテハ近来産出追々相減シ，殊ニバタビヤ近地ニテハ，裁育場無之，何分取調行届兼，尤スラバヤ県バンジョワギ県ニハ，裁育場有之候趣ニ候得共，瓜哇極東之地ニテ，五百里以上七百里之地ニテ日数ヲ費シ候ニ付，ボイテンソルグ府植物園ニ育養有之候見本之分，少々取入当印度地ニヲヒテ吟味候心得ニ御座候，サシ句此段上申候也。

とし，ジャワ島のコチニール生産は近年産出が減少し，とくに首都のバタビヤ近辺では裁育場



〔図〕 4. ボゴール（旧ボイテンソルグ）熱帯植物園・正面玄関
〔昭和56年4月撮影〕

がなく、東方へ5～700里も行かねば得られないし、そのための所要日数が多くかかるので、ボイテンソルグ政府植物園長シェヘル（Dr. R. Scheffer, Botanical Garden of Government Buitenzorg）の厚意により、コチニール見本が贈られることとなった。

このボイテンソルグ熱帯植物園は、ジャカルタ（当時は、バタビアとよぶ）の南、約60キロの地点にあり、サラク山の斜面に広がる山麓の海拔約260メートルの高度にある。平均気温摂氏25度で、最高30～最低22度の範囲を上下するくらいで、現在でも避暑地としてよく知られている。この植物園の敷地は約87ヘクタールにもおよぶ広大なもので、植物園の門をくぐると広いカナリ樹の並木道があり、それには藤蔓がまわりついている。ここには9,000種以上の植物が栽培されており、その他に、鬼蓮の径2メートルにおよぶ大円葉と、径70センチの花が浮かんでいる。また熱帯植物栽培所、博物館、標本室、図書館などを併設する世界最大の科学的実用的植物園ともいえるものである。そしてオランダ植民時代には、この地をボイテンソルグ Buitenzorg と呼んでいたが、現在ではボゴール Bogor と地名を変更している。

現在、このボゴールへは、ジャカルタのコマ Koma 駅からディーゼル車で約1時間40分でボゴールに達する。実際には現在のジャカルタ市の中心は、南へ移行しているので、ガンビール Gambir 駅から乗車するのが普通である。武田昌次の訪れた明治11（1878）年4月には、すでに鉄道が敷設されていたのであるが、オランダ政庁からの「駅馬」の提供をうけたので、その供与をうけたのであろう^{70）}。ボゴールは小さな町であるが、もと古いヒンズー王国パジャラン

の宮殿があったところで、1817年にオランダ政府の手によって熱帯植物の収集では世界最大の最も古い植物園がつくられた。多くの熱帯植物がインドネシア全土から、そして外国から収集され、規模が次第に拡大されて、現在におよんでいる。

19世紀のはじめに、このような大規模の熱帯植物園が建設されたのは、それなりの理由があった。それは資本主義的商品としての有用植物を開発することであった。その結果、紅茶（緑茶をふくむ）、アヘン、コーヒ、ゴムなど、多くの農業加工品が国際貿易品として登場してきたのであり、これらを利用するため資本主義的植物の基本的研究が必要であった。

このとき収集した関係荷物は、武田昌次がバタビア港から本国（日本）へ送付したのであるが、この荷物は同年5月24日に横浜に到着したのち、直井真澄が受取り、6月3日に新宿試験場で田中芳男立ち会いのもと、かねて送付の「物品目録」を現品と対照し検収しているが、そのなかに「コセニール 壱箱」、「サボテン苗 同箱」、「コセニールニ用ユル小道具 壱揃」とみえるのみで、あとのコチニール関係道具類は到着しなかったのであろうか、関係記録にはみることができない⁷⁴⁾。このほかの荷物は、農商務省勸農局・博物・地理の三局へと、それぞれ送致された。このため勸農局としては小笠原島に苗木などを輸送し、その受入準備をしておくことが必要であるので、7月2日には、勸農局御用掛服部五十二、および属官二三名、農夫三名が、キニーネ、コチニール、エラスチカゴム、コーヒー樹の苗木数百本を携え、そのほか事務所・農夫舎・農具置場・収穫小屋などの建物を建設するために、建築業者玉置半右衛門などが、田子ノ浦丸によって出帆した⁷⁵⁾。

武田昌次が持ち帰った内容は、「幾那・珈琲の兩種ハ充分に買入れ、尚ほ後々の注文もなせしかしど、唯コセニールのみハ、兩地とも至て少く、偶たま持帰るも日本地方にハ適せされハ買入れず、とのことなり（下線引用者）」としており、最初から、日本における飼養の成功の可能性に望みをかけていなかったのである⁷⁶⁾。しかし見本のみがジャワのポイテンソルグ植物園において入手できたので、これに望みをたくすことにしたのである。『農林水産省百年史』には、「内務省は十一年武田昌次をインドへ送り、小笠原島へ試植する幾那・珈琲・阿利襪などの樹苗を求め、珈琲樹のみが適作であるのを知った」としているが、実際は後述の通りで、大部分の植物は不成功に終わったものとみてよい⁷⁴⁾。

まずコチニール飼養には、それに寄生させるために必要な霸王樹（以下、史料の引用を除き断らないかぎり、シャボテンとする）が必要であった。明治11（1878）年2月19日には、「勸農局ニ於テ霸王樹凡ソ六百本ヲ小笠原島ニ送り、以テ呵蘭虫飼養ノ用ニ供ス」（勸農局樹芸762）とあるが⁷⁵⁾、移植予定の数量であったのか、実際に移送されたのか明らかでないが、あとの移送から推測して、予定数量であったものとみてよい。そのため明治11（1878）年2月23

日、保坂常二郎を勸農局動物課へ所轄変更し、新宿試験場納付のシャボテンのうちより、小笠原島へさしむけ受入準備をさせた。前島密勸農局長から小笠原島在勤の小花作助権少書記官宛への書状には、

一、別紙＝有之候呀蘭虫原種移植ニ付テハ、原種ヲ七月便ニ御地へ持渡候節飼養ニ可供覇王樹兼テ植置不申候ヘテハ、食料ニ差支候間、植付地所等可然御見立御指諭有之度候也としている。つまりシャボテンの栽培する場所の設立など準備をしておくようにとのことであつた。そして3月4日には、小笠原在勤農夫としてシャボテン苗木を携帯し、横浜を出帆した。この和種シャボテンは、前述の計画では3,000本を調達することが予定され、3月には5～600本も便船へ積込むことになっていたが、実際の数量は明らかでない。どうもこの時期においては、どの種類のシャボテンにもコチニールが寄生するとの考えから収集されていたのではなかったのであろうか。

勸農局小笠原島事務掛まで送られたい旨の通知が、神奈川県に出され、それを受けた神奈川県側も、同年8月24日までに、それまでの間の経費請求に応じて数度にわたって差し出したシャボテンの原価・荷造運賃を請求している。しかしながら予定した5～600本の数量にはとうてい達せず、他の地域からの送付もあったであろうが、「着手状況」からみると318本となっており、神奈川県で調達されたのは、わずかに35本に過ぎなかった。

8月24日までに神奈川県が数度にわたって通送したシャボテンは、合計わずか35本で72円を要している。その計算表は〔表〕3.の通りであるが、他の温暖なシャボテンが生育している府県も史料を欠いているが、若干の数量を送付したものとみられよう⁷⁹⁾。

〔表3〕3. 覇王樹計算表

| 樹名 | 数量 | 原 価 | 荷造運賃 | 産 地 |
|-----|----|--------|-----------|-------------|
| 覇王樹 | 1 | 1 円 | 00円64銭4 厘 | 相州三浦郡紙山口村 |
| 覇王樹 | 21 | 14円20銭 | 5 円26銭 | 相州鎌倉郡大町村 |
| 覇王樹 | 1 | 2 円 | 82銭4 厘 | 相州高座郡浜ノ郷村 |
| 覇王樹 | 12 | 15円75銭 | 32円57銭5 厘 | 相州足柄郡小田原谷津村 |
| 合 計 | 35 | 32円95銭 | 39円30銭3 厘 | |

〔註〕『農務願末』第6巻 第30小笠原島 20和種覇王樹差送ノ件
475ページによる。

明治11(1878)年10月16日付『郵便報知』によると、武田昌次は11月1日に小笠原島へ赴任するため、横浜を出帆したようで、「小笠原島へ機那コーヒ苗植付の為め、勸業属の一等属武田昌次君が農夫十名、頭取世話役一名、及び農具苗木等を積み載せ、来十一月一日該島へ発船

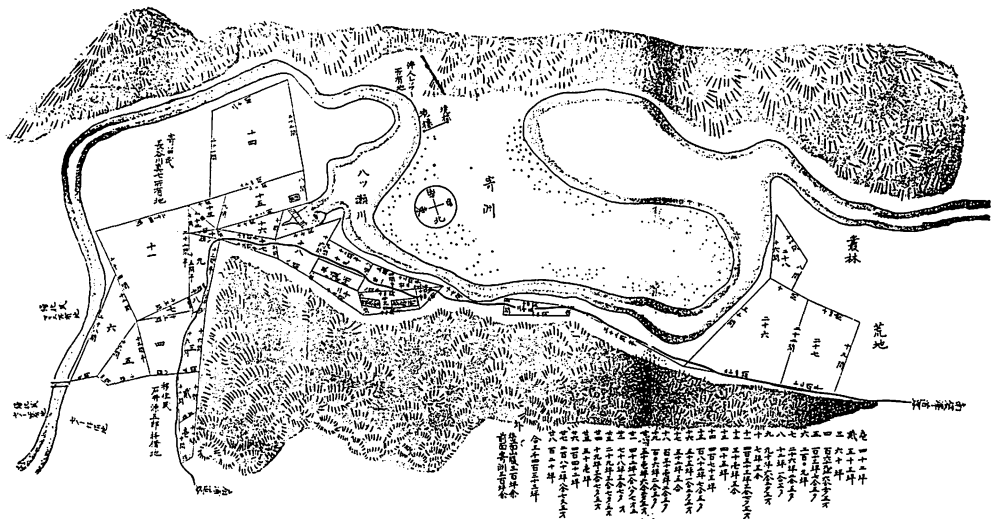
さるる趣、又該島の袋沢といふ所に勸農局農務所を設け、武田君及び直井真澄君の官宅二棟を其側に建設し、武田君到着の上は万事を主任さるゝ由」とみえている⁷⁷⁾。実際には、それより遅れて11月2日に、社寮丸により武田昌次一等属ほか、37名が乗組み、種牛・草木の苗木を数種積み込まれた⁷⁸⁾。そして小笠原島本局出張所を北袋沢（島民はボカニュー・ビーチという）に於いて、その近傍および野衾谷を開墾し、コーヒ、ゴム、オリーブ、アカシヤ、ユーカリなどの苗木、種子などを栽培したが、その地積は6,933坪であった。ここにコーヒ本植337本、実生678本を植え、また種子若干を播下した。またコチニールを飼養するために、あらかじめシャボテン318本を植え、別に米国産のゴム樹、オリーブ、アカシヤ、ユーカリ、プチスの類200余株を栽培した。

『勸農局第三回年報』〔明治十年度〕には、

本年一月小笠原島へ移植ノ議興ル、該島ハ暖地ニ付、暖国産ノ植物ヲ試植セシニ、土地ニ適当シ、繁育セルニ因リ、幾那樹、「エラスチカゴム」樹、茄菲樹、阿利機樹、及ヒ洋紅虫等ハ、必用ノ産物ニ付、同年三月一等属武田昌次ヲ印度・瓜哇島へ派遣シ、右物産ヲ購求セシメ、該島へ移植蚕息セシメン事ヲ謀レリ

と報告しているが⁷⁹⁾、簡単な記述のために栽培経過が明らかとはならない。

明治11（1878）年7月には、この北袋沢に勸農局出張所が設置され、開拓が開始された⁸⁰⁾。そして各種の植物が栽培されることになった。『勸農局第四回年報』〔明治十一年度〕によると、コチニールの飼育の準備として、3月4日には、勸農局試験場農夫保坂常三郎を小笠原在



〔図〕 7. 小笠原父島勸業着手場（シャボテン苗を植えた場所は、図の右の区画である）

勤農夫としてシャボテン苗木を携帯して赴かせている。そして「予メ霸王樹，三百十八本ヲ栽エ」ているが，その明細は，大25本，小263本，挿芽130本としている。またその他の植物についても，コーヒ，ゴム，オリーブ，アカシヤ，ユーカリ，プチスなどを植えるか，また種子をまいている⁸¹⁾。

「小笠原島勸農局着手場 明治十一年一覽表，自十一年七月至十二月卅一日」によると，つぎのように記載しており，その着手状況の全貌をうかがうことができる。

「出張所位置 北袋沢，島民「ボカニュー・ピーチ」と呼ぶ。

着手場地名 同，右，野衾谷

着手 地積 六，九三二坪 内三，四三二坪 自七月至十月

三，五〇〇坪 自十一月至十二月

建物 地積 一二〇坪 但着手地積の内

〔動植物〕

珈 琲 本植三三七本（瓜哇種），実生六七九本（瓜哇種），播種（瓜哇種）

幾 那 苗木到着

サ ボ テ ン 三一八本⁸²⁾

ゴ ム 樹 四二本

オ リ ー ブ 三六本

アカシヤ類 一二三本

ユウカリプタス

牛 牡犢一，牝犢二

密 蜂 二室

仏国産食肉兎 雌雄各一

所属 船隻 押送一，カノ一

職 員 一等属一

十等属一，その他

農 夫 十二人その他一人病死

一人婦京 十一月十一人渡島

雇 夫 二九六人の内七六人移植に属する作業 二二〇人臨時作業

費額 概算 十年度 七，七三四円九〇銭

十一年度以降 四，三三五円五〇銭

総費 金三五二円三六銭五（下線，引用者）

ここに関係するサボテンも、「呀蘭虫ヲ飼養スル為ニ予メ霸王樹三百十八本ヲ栽エ」たが、これは移植計画の3,000本に対し、16%にしか達していない。そして11月1日には、武田昌次ほか、農夫10名、頭取、世話役1名が、農具・苗木などをもって、勸農局主張所を建設するために出発している。

ところが『勸農局第四回年報』〔明治十一年度〕に、

昨年（明治11年、引用者註）瓜哇ニ於テ、和蘭総督並植物園総長ハ、呀蘭虫ヲ飼養スルハ
勞シテ効ナキモノトイヘリ、其理由如何トナレハ、蓋シ風雨屢コレアル地方ニテハ生育セ
サルヲ以テナリト、該島ハ冬季春初ニ至レハ日々暴風雨多シ、加フルニ昨年十二月移栽ノ
霸王樹ハ、成長遅ク今夏ニ至リテ萎凋ノ状ヲ現セリ、故ニ此亦繁殖ノ見込ミナシ、但シ呀
蘭虫ハ桑港ヨリ購求スヘキモ、即未タ到着セス（下線、引用者）

という結果であった⁸³⁾。つまりコチニールの飼養とシャボテンの移植は、わが国の気候的立地条件が適さないことから失敗に帰したものとみられる。そのため現地におもむいて、政府官吏が調査したところによると、

勸農局出張所ヲ置キテ之カ培育ヲ担当セシメタリ、然レトモ他ノ植物及呀蘭虫ノ如キハ、
率ネ土地ニ応ゼズシテ中廢シタレトモ、独リ珈琲ト弾力護謨ハ能ク適応シ、将来一産物ト
モ成ルヘキ景況ナリ（下線、引用者）

とする状況であった⁸⁴⁾。

さらにこの部分のみを詳細に述べている「小笠原島植物景況」においても、その記述は、前者とほぼ同一であるが、ここでは別の導入方法を取り、アメリカ、サンフランシスコより購入することが報告されている。それも気候条件の問題から、不成功に終わったことを記している⁸⁵⁾。

このコチニールは、何故、自然的に消滅していったかは、小笠原諸島の政府から、東京府への行政移管によるものであるとみてよい。明治12（1879）年まで、小笠原島出張所は行政的には内務省勸農局の管轄に属していたが、この明治13（1880）年の段階に於ける国家財政は、内乱と西南戦争による不換紙幣の乱発により破綻寸前の状態に陥り、すべての政府事業を見直しが行われ、事業の改革をせざるを得ない必要にせまられており、そのため同年11月には「工場払下概則」が公布され、政府事業として経営している多くの殖産興業は、財政補填のため民間に払い下げられるという状態にまで追い込まれたのである。

これらの勸農事業の衰頽に拍車をかけたのは、明治13（1880）年10月23日の小笠原諸島の東京府移管であった⁸⁵⁾。この移管のことは、同年10月4日の新聞紙上において、風聞として報道せられ、「遠からず小笠原島を以て東京府の所轄と定められる由に聞及べと未だ真偽を知ら

ず」ということであったが、明治13（1880）年10月8日、太政官布告第44号に「内務省所轄小笠原島ヲ、東京府管轄ニ被属候此旨布告候事」とあるように、東京府に移管され、勸農事業も引き継がれることとなった。その最大の目的は、国家財政上の見地から経費の削減することにあった。内務省からの上申には「其収益之如キ内地ニ輸出スル代価毎歳僅ニ貳千九百円余、若シ此儘旧套ニ依リ改正セサル時ハ、到底若干之経費ヲ支出シテ就産之実効勤相立、就テハ地力ヲ量リ経験之規模ヲ改正シ、数名ノ官吏ヲシテ全ク本島ノ監守タルニ止メ候ハ、若干之経費ヲ減却可致」とする状態であり⁸⁶⁾、将来への小笠原島勸業の収益性が問題にされており、この損益の分散という見地から、東京府への移管が決定をみることになるのである。そのために行政事務の引き継ぎは、10月9日に吉水五等属・中野七等属が内務省に出頭して行われ、当分の間は内務省出張所の官吏が在勤するとのことであった⁸⁷⁾。しかし内務省勸農局出張所は、10月23日付にて廃止となって東京府出張所と改まり、小花作助権内務少書記官が、現地へ出張の上、事務の引き継ぎを行ったのちは、内務省官吏は東京府へ転任することになった⁸⁸⁾。また内務一等属武田昌次も、11月1日出帆の便船で同島へ赴くことになっていた⁸⁹⁾。

ところが、明治16（1880）年10月21、22日のこと、父島、母島とも前代未聞の暴風雨によって多大の被害を被ることになるのである。その状況は「樹木にして枝幹の全きもの一本なきほどなれば、島敷には烈風多けれど、斯る大風に遇ひ風災の甚だしきは、実に希有の事なりとぞ」というもので復旧もままならぬことであった。「北袋沢勸農局出張所所管ノ建物モ、其罹災ノ景況ハ、同出張所ヨリ具状ニ及ヒ候ニ付キ略申候」とあって、勸農局北袋沢出張所の被災状況は明らかでないのであるが、主官庁の詳細な被害状況については、「当出張所仮官庁モ殆んど倒覆ノ勢ニ候処、幸ニシテ大害ヲ免レ候ヘ共、傾斜破損ニ及ヒ候不少附属建築ノ内、監倉并水夫小屋モ、大分ノ破損ニ及ヒ候ヘトモ、其他各官舎等格別ノ損処無之候」というように、勸農局関係官舎の被害は少なかったけれども、民間の被害は多大であった。それに勸農作物については、「過ル十年勸農局ヨリ回送相成候、米国種海島綿追々繁殖、本年播種ノ分凡四万坪程モ有之、将来島産ノ一ニモ相成可申存候処、今般ノ風災ニテ悉皆枯、却人民ノ刻苦一朝水泡ニ属シ、実ニ愍然ノ至ニ候、向後勉覇ノ氣力失却セシメサル様致度存候」とするもので、今後の回復が問題となっていたのである⁹⁰⁾。

そのため「小笠原島の開墾は存外に捗取りたれば」という進展状況であったことから、一国をもうけて、南海道の一部に編入することが最適であると、風聞にのぼったことも、明治12（1880）年11月の段階にはあったけれども⁹¹⁾、実際には、このような暴風雨による被害がたびたび起こることから、栽培植物の成長が危ぶまれたのである。

明治15（1881）年ごろから、小笠原島に最適な植物の栽培を求めるために、試行錯誤的にい

ろいろな植物の試植が行われることになる。同年4月には「紀州産の蜜柑の苗木若干本を試みの為、植付られし処いづれも生木よろしく適當の風土たるを以て猶今般該木数株を移植さるゝといふ」ということがみられたし⁹²⁾、養蚕の適する土地であるとの風聞から、「信州上州の有志者が、小笠原島の元來桑樹に富るを聞付け、若干の醸金をなして相曾某を主任となし、蚕婦数十名を引連れ、該嶋に渡海する手筈にて出京し、馬喰町旅人宿にて便船を待ち居れり」というように将来の開発に期待をかけていた⁹³⁾。

明治16(1882)年のこと、農商務省勸農局御用掛池田 謙、および同御用掛曲直瀬愛が⁹⁴⁾おもむくことになるが、このときはまた別の勸農殖産の目的であった。このことは磯村貞吉『小笠原島要覧』〔明治21(1888)年刊〕に簡単に導入を記すことに止まり⁹⁵⁾、また山方石之助編『小笠原島志』〔明治39(1906)年刊〕でも、同様なことが記述されているのであるが、

呀蘭虫 明治十二年、内務大書記官田中芳男の建議により、同年武田昌次をして、印度及び瓜哇より移植せしめたるものなり、該虫はコチニールガ虫一名洋紅虫と称し、即ち洋紅採取の目的を以て、これが飼養素たる霸王樹と共に移植せしも、途次不幸にして該虫を枯死せしめしより、霸王樹のみ、發育良好なるも、其頭書の目的は、全く破れたるなり(593ページ)。呀蘭虫(コチニール虫)印度より移植せしも目的を達せず(651ページ)。

とするように、寄生に必要なサボテンのみが取り残されたのである⁹⁶⁾。

このように明治20年代には、コチニールのことなど全く忘れ去られたとするが、むしろコチニールの飼育は、移植したのち成功しなかったものとみてよい。そしてサボテンの成長が、栽培の痕跡としてみられたのであった。むしろ染料植物として山藍が試植され、東京藍会社と特約を結び拡張されつつある段階にあったのである。

7. お わ り に

新大陸から、旧大陸へとスペインの独占貿易を通じて、移植されたものは、これ以外にも多くの物資にみることができ、少なくとも旧大陸に住む人たちにとっては、その恩恵によくしているわけである。このような現象は、現在でも、継続して行われているのを、食用植物にみることができる。

このコチニールでも、現在、着色材として輸入せられているが、天然着色材の無制限輸入については、包含する不純分の点で問題が残されている。

ここでは、これまでの新大陸における飼養状況、旧大陸との貿易関係、わが国への染色品の輸入と、その導入について述べてきた。

このコチニールという動物染料は、たんに染料だけの用途に止まらず、多能的な色材であ

り、(1)薬材、(2)染料、(3)色材、の三つに使われてきたのである。しかしながら最近では、合成樹脂の出現で置換されることになった。

そして紫鉛との間では、色調の点では、優位に位置したけれども、価格では高価だったの
で、むしろ紫鉛の消費が多く、明治以後も、インドで伝統的な生産がおこなわれ、継続して輸
入されてきたのである。

しかし色調では、コチニールは色調の点で紫鉛よりも優れており、媒染剤により、紅から紫
までの幅の広い色調が得られたことに優位性があった。それがため染色においては、紫鉛にと
って代わることになるのである。

わが国におけるコチニールの国産化も、江戸後期には、オランダから導入しようとした時期
もあったが、これには成功をみず、また明治になってからも、熱帯植物の導入として、小笠原
島に移植しようとする試みがなされたが、これも成功をみることなく終わったのである。

〔追記〕本稿は、本学東西学術研究所「技術の伝播」班の研究目的に基づいて、書かれたも
のであるが、これには海外学術研究員〔昭和58年度〕、学部共同研究費〔平成元年度〕の研究
成果の一部が含まれていることを記しておく。

註

1) たとえば、つぎの文献にコチニールが、商業取引の対象として挙げられている。

ジョン・イーツ著、瓜生寅訳『商業博物誌』上下2冊 明治18年5月 文部省編輯局

〔原著書〕John Yeats,

1876 Natural History of the Materials of Commerce, London, 2nd ed..

〔註〕この著書は、1862年に脱稿、1870年の序文を付して、同年発行。訳書は1876年第2版。

○呀蘭虫（「コックス、カクチ」）初テ此有用ナル小虫ヲ歐洲ニ移センハ、千五百二十三年ニシテ、墨西
哥ヨリ来レリ、此虫ハ「ヘミテラ」即チ半翼虫ト称スル昆虫科ニ属ス、其翼根ノ部位ハ、他ノ部位即チ
網膜ヨリ成ル所ノ部ニ比スレハ、強硬ニシテ粘韌ナリ。

此虫ヲ蓄養スルハ、旧世界ヨリ新世界ニ伝播セント雖モ、印度、瓜哇、阿爾及、其他歐洲ノ処々ニ於テ
ハ其効ヲ見ズ、其形小ニシテ縐紋多ク、其色濃厚ナル桑椹色ナリ、各種ノ仙人掌樹ヲ食ツテ生活ス、商
品ノ呀蘭虫ハ仙人掌樹ヲ刮削シテ執リ、袋ニ盛リ沸湯ヲ以テ殺シ、而シテ之ヲ日乾スルナリ、其肥テ銀
色ヲ帯ビ、摩擦シテ粉末トナストキハ、光輝アル深紅色ヲ発スルモノヲ最上品トス、其形ハ小ナルヲ以
テ、呀蘭染料一磅ヲ製センニハ、其数七万虫ヲ要スト云フ、千八百五十五年中、我国ニ輸入セン呀蘭虫
ハ、其量千四百噸ニシテ価七十万封ナリ、此量ヲ獲ルニハ、其数大都ネ二千二百億ヲ要スルナリ。

世ニ洋紅ト深紅染料ト称スル所ノ赤色染料ハ、皆ナ呀蘭虫ヨリ取ル所ナリ、呀蘭虫ハ猩々緋ヲ染ムルノ
用トシ、且ツ主トシテ毛布ヲ染ムルニ用フ、其染法ハ明礬ト酸化錫ノ着色薬ヲ以テ、此虫ノ色分ヲ着定
シ、過酒石酸鉍鉍鉍作用ヲ藉テ、其色ヲ出サシムルナリ。

○紫梗虫（省略）

ジョン・イーツ著、大島貞益訳『商業工芸史』上下2冊 明治25年11月10日 文部省編輯局
第二門近世ノ工芸（181ページ）

第二章 染工（前略）蓋シ西班牙人ノ始メテ墨西哥ニ入りタル時、其国内既ニ黒、紅、黄、緑、青等ノ

色布アリ、其染料ハ即チ今ノ「コチニール」ナリシガ故ニ、色沢極メテ鮮麗ナリ、而シテ此染料ハ疾カニ「ケルム」ニ代リ行ハレテ、其年々ノ消費、今ハ常料磅幾百万ヲ以テ計ヘ、此虫ヲ養フ所ノ一種ノ霸王樹、今ハ普ク旧洲中同氣候線ノ地ニ繁殖セリ、此物ハ畜ニ一品ニシテ貴重ノ染料タルノミナラズ、亦他物ニ和シテ、能ク艶麗ノ色ヲ発ス、例ヘバ其膏ニ硝石塩酸及ビ尋常ノ食塩ヲ和スレバ、今日普通緋ト称スル色ト為ルガ如シ、是レ一千六百五十年、アルクマルニ於テ、コルネリアス、ドレップルノ發明セル所ナリ、又同ジク無血虫界ヨリ得タル一種ノ紅料ニ、「ラックダイ」ト名ツクル者アリ、此料ハ一種ノ無血虫ノ放出セル脂状ノ粘汁、「コムラック」ト称スル者ヲ取りテ練成セル者ナリ（後略）

2) わが国における明治期の文献については、つぎのものがある。

大竹多気「呀蘭虫の説」『大日本織物協会報告』第53号 大日本織物協会 明治24年3月15日（10-13ページ）。

ここでは商品として「黒色コチニール」と「銀色コチニール」との二種があり、黒色のものは、雌虫を植物の葉より収穫して熱湯にて之を殺し、日に曝して乾かす時は、黒色となるので、「黒色コチニール」とよんでいる。黒色のものは、銀色のものに比して、やや優るところがあり、その価もやや貴いという。銀色コチニールは、雌虫を集めて袋にいれ、熱湯に入れずに、乾燥するときには、白い光沢のあるものが得られるので、これを「銀色コチニール」とよんでいる。銀色コチニールは、鉛粉を混ぜて重量を加え、売買する悪商人がいる、としている。

なお、後藤捷一など編『世界染色史料集成』は、コチニールの文献が翻訳されて収録されているが、その文献の出所の一部については、欧米の染織関係文献目録により明らかにすることができるが、その全体について十分に明らかにしえない。

「コチニール」『世界染色史料集成』『染織』第138-139号 染織文化社 昭和14年12月10日（499-541ページ）。

「ケルメス」『世界染色史料集成』『染織』第140-141号 染織文化社 昭和15年1月10日（542-559ページ）。

「ラック・ダイ」『世界染色史料集成』『染織』第142号 染織文化社 昭和15年2月10日（560-563ページ）。

3) わが国におけるコチニールの文献を掲げておく。

三省堂編纂所『日本百科事典』第四巻 明治43年12月6日 三省堂書店

「コチニール (Cochineal)」(大竹・中島)

富山房辞典編纂部編『国史辞典』4 富山房 昭和18年12月8日

「コセニール」(後藤捷一稿)

矢野宗幹「えんじむし考」『本草』創刊号 春陽堂 昭和7年7月15日（33-38ページ）。

大阪絵具染料同業組合編『絵具染料商工史』 大阪絵具染料同業組合 昭和13年1月1日

後藤捷一「哥撰尼爾考」（245-253ページ）。

上村六郎『色と染』日本人の生活文化史(3) 毎日新聞社 昭和55年5月30日（162-166ページ）。

和田淑子「天然染料の研究（第2報）ーラックダイの染色性についてー」『帝塚山短期大学紀要』第19号 帝塚山短期大学 昭和57年3月1日（19-31ページ）。

和田淑子「天然染料の研究（第3報）ーコチニールの染色性についてー」『帝塚山短期大学紀要』第20号 帝塚山短期大学 昭和58年3月1日（1-11ページ）。

なお、本稿においては、「呀蘭虫」とあるのは、「蘭」の文字に「口」ヘンを省略して、統一をはかっている。

4) この製法については、つぎの文献によられたい。

『輸出重要品要覧』第三次工産之部漆器 農商務省商工局 明治33年3月20日（59-61ページ）。

「ラック」ハ印度主要ノ輸出品ニシテ其種類五種アリ。即ち「バットンラック」「シテルラック」「シードラック」「スティックラック」「ラックダイ」是ナリ。孰モ同一ノ原料ヨリ出ツ。本品ハ「コッカスラック」ト称スル虫ノ脂肪ナル樹ヲ撰ミテ、其樹液ヲ吸収シ、之ヲ排列シタルモノヲ集メタルナリ。其「スティックラック」ト称スル該虫ノ寄生シテ排泄物ノ固着シタル儘ノ樹枝ヲ二吋乃至四吋ニ折りタルヲ云フナリ。「ラックダイ」トハ右ノ「スティックラック」ヲ床上ニ排列シ、棒ヲ以テ麵棒ヲ取扱フカ如クニ該枝ノ上ニ回シテ脂塊ヲ收取シ、水ヲ盛リタル桶ニ之ヲ容レ、杵ニテ搗キ、又足ニシ踏ミ交フルトキハ、赤キ液汁ヲ呈ス。斯クシテ水ヲ替フルコト数次、此水ヲ蒸発セシメテ赤塊ト為シ、藍靛ノ如クセシモノナリ。又右ノ樹脂ノ桶中ニ残存スルモノハ細ニ粒状ヲ成ス。之ヲ「シードラック」トス、此「シードラック」ヲ袋ニ入レ、火ニ炙リ其溶クルヲ待チテ、袋ノ兩端ヨリ緊メ上ケ、濾過スル所ノ液ヲ磁器、若クハ、芭蕉葉ニ滴下セシムルトキハ、乾キタル後、薄層ノ塊ト成ル、恰モ貝類ノ肉ヲ干シタルカ如キ形状アリ、之ヲ「シエルラック」ト称ス、又時トシテハ滴下スル所ノ液ヲ直径一時乃至一時半ノ大サニ止メタルモノアリ、是レ「バットンラック」ノ名アル所以ナリ

本品ノ印度ニ於ケル用途ハ、土産ノ火酒ニ之ヲ溶解シ色素ヲ加ヘ、家具ニ塗用ス、又之ニ硫黄ヲ加ヘ、色ヲ附シテ西洋封蠟ノ如キ棒状ニ製シテ後、之ヲ塗抹用ニ供ス、又西洋ニ於テハ、封蠟及斯克「ヴァニシユ」ノ混合物ニ用ヒ、同ハ礼帽ノ仕上糊、及石版用「インク」ニ使用スト云フ

なお前述の領事報告とはほぼ同様な商品陳列所嘱託吉田寿信調査の報告が、つぎの文献に収録されている。

『農商務省商品陳列館報告』第15号 「○英領印度に於ける虫膠(Lac)製造業」明治42年4月(42—44ページ)。

5) 透過スペクトルの測定は、日本化学繊維検定協会において、つぎのように行った。

1. 試料作成

- ①コチニールブラック コチニール 0.5 g を 100 cc の蒸留水に浸漬し、濾過する。濾過液を20倍に希釈したのち、検液とした。
- ②ラック ラック原液を2000倍に希釈したのち、検液とした。

2. スペクトル測定条件

分光光度計 日立124型

チャート・スピード 20 mm/min

レンジ 10 mμ

6) 宇田川榕菴『含密開宗』巻13, 18

「○染法ハ酒石英二錢、水適宜ヲ錫鍋ニ煮沸シ、哥胝尼爾〔花金亀ノ一種、和産未詳〕細末八錢ヲ加ヘ木棍ニテ攪セ煮ル事、数刻、錫液八錢ヲ徐々ニ加エ和勻シ曾テ練リタル多羅絨ヲ棍ニ巻キテ鍋上ヨリ快手ニ鍋内ニ解下シ又鍋内ニテ故ノ如ク巻キ半時ノ間煮テ乾ス」

7) 『神奈川運上所・新定税目』『兵庫運上所・新定税目』慶応2(1866)年

8) 竹内久兵衛輯『和洋異名伊呂波字引・絵具染草薬品略説』衛生社 明治15(1883)年

9) 『ランダ・ユカタン事物記』第Ⅱ期3 岩波書店 1982年7月20日(466, 478ページ)。

10) Museo Nacional de Antropologia,

1979 *Los codices de Mexico.*

37. Matricula de Los Tribute,

Museo Nacional de Atropologia, Mexico, p.37.

John, B. Glass

1964 *Catalogo de la Coleccion de Codices.* Museo Nacional de Antropologia

Instituto Nacional de Antropologia e Historia, Mexico.

55. Matricula de Tributos (32-52) Detalle.

11) Don Fransisco del Paso y Trorcoso (Facsimile Fototipico Dispuesto)

1980 *Codex Mendoza*. Librena Nova, S. A. Mexico.

Ross, Kurt (Commentaries)

1984 *Codex Mendoza*, Liber, Mexico, p.58

12) Sahagun, Bernardino de

1950 *Florentino Codex*: General History of the things of New Spain.

Santa Fe, New Mexico: The School of American Resarch and the University of Utah.

13) Jose Antonio de Alzata

1777 *Memoria sobre la Naturaleza, cultivo del beneficio de la Grana*. Mexico.

1981 Edicion facsimilar limitada con motivo del trasado del Archivo General de la Nacional edificio de Lecumberri. Mexico

この内容は、23の章からなっているが、構成する項目の割合には、あまりページ数を割いておらず、詳しく記述されていない。

1. 序説
2. コチニールの種類, 収穫, 処理
3. コチニール, あるいはグラナの解説
4. コチニール雌の解説
5. グラナの特徴
6. グラナの孵化
7. グラナの増殖とサボテンに寄生する方法
8. グラナの飼料
9. 優良と精良のコチニール
10. グラナの飼育のための適当な植物
11. グラナの収穫
12. グラナの収穫についての考察
13. グラナの大敵
14. グラナを殺す方法
15. 悪いグラナを知る方法
16. グラナをめぐる非常に特殊な二つの現象
17. グラナの習慣
18. グラナ研究のめぐる整理
19. グラナの変種
20. 政治の反映
21. 栽培方法のいくつかの説明とグラナの取引
22. 補遺(1)
23. 補遺(2)

14) Barbro Sdahlgren de Jordan

1963 *La Grana Cochinilla*. Nueva Biblioteca Mexicana de Obras Historicas, 1. Jose Porruae Hijos, Sucs., Mexico.

この書の内容は、つぎの文献の集成からなる。

- I. サンタ・マリア・エカテペックの司祭ホアキン・バスコの教書

Ⅱ. サンタ・マリア・ラチヒオの司祭ビーセント・マゴンの教書

Ⅲ. 国王協定の諮問決議

Ⅳ. 総督に対するグラナ課税の公開手順書

Ⅴ. ホワン・マヌエル・マリスカルの経歴書

Ⅵ) 付録

Ⅰ—1. 『1784-1789年にいたるコチニール生産明細』 1790年12月18日王立ベラクルス税関

Ⅰ—2. 『1784-1789年にいたるコチニール生産高』 1790年8月5日王立オハカ税関

Ⅰ—3. 『1784-1789年にいたるコチニール生産額』 1790年8月3日ベラクルス

Ⅰ—4. 『1784-1789年にいたるコチニール年間生産高』 1790年9月11日オハカ

Ⅱ. オハカ州統計局発表数値によるコチニール生産高

Ⅲ. 『グラナ, コチニールの手順, 方法, あるいは法令』 [メキシコ, 1773]

Ⅳ. 図版(1)シャボテン

(2)コチニールの飼養

(3)コディセ・フロンティノ第77図(原図第802, 803, 804図)

15) McBryde, Felix Webster

1947 *Cultural and Historical Geography of Southwest Guatemala*.

US.Government Printing Office Washington, D.C., p. 66.

16) O'Neale, Lila M.

1945 *Textiles of Highland Guatemala*. Publication 567, Carnegie Institution of Washington, D.C., p. 29.

17) Stephens, John L.

1841 *Incidents of Travel in Central America, Chiapas and Yucatan*. 2 vols.

Harper & Brothers, New York. [Dover Publications, Inc. New York, 1969]

18) Rubio, Sanchez Manuel

1961 *La Grana o Cochinella*.

Antropologia e Historia de Guatemala, Tomo 13, no. 1, pp. 15-46.

この論文の内容は,

Ⅰ. 序説

Ⅱ. 語源

Ⅲ. 栽培起原

Ⅳ. コチニールの記述

Ⅴ. サボテンの起原

Ⅵ. コチニールの収穫と方法

Ⅶ. コチニールの飼育と使用方法

Ⅷ. グアテマラにおけるグラナ飼育の発展

Ⅸ. グアテマラにおけるグラナと使用法

からなるもので, グアテマラ政府文書 (AGG) 9 と古記録によって, グアテマラ全土におよぶコチニール飼養の歴史的観察に努力を払っている。

19) Diguët, Leon

1909 *Histoire de la Cochenille de au Mexique*.

Journal de la Societe des Americanistes de Paris, n. s. Tomo VI, Paris, pp. 75-99.

この内容は, つぎの通りである(順次, 番号を付す)

- I. 歴史
- II. 野性コチニールと家畜コチニール
- III. コチニールの飼育と仙人掌科（シャボテン）奉仕
- IV. 現在サボテンの様子とオハカ
- V. サボテンの据付
- VI. コチニールの作業と急速な作業
- VII. コチニールの飼育方法
- VIII. サボテンの住処
- IX. 保護のプロセスと収獲
- X. コチニールの生産
- XI. 結論
- XII. 参考文献

Dahlgran, Jordan B.

1961 *El Nocheztle o la Grana de Cochinilla Mexicana.*

Homenaje a Pablo Matinez del Rio Mexico, pp. 387-399.

この内容は、つぎの通りである（順序、番号を付す）。

- I. メキシコのノチェットリ（コチニール）
- II. 先史時代のグラナ
- III. 1523-1880年輸出の重要な部門におけるメキシコのグラナの変容

20) 『朝野新聞』第397号 明治7年12月5日第2面第2段

「亜墨利加の大地震 ガアテマラ新聞は、九月三日の地震を記したり、其地方へ家屋顛倒し、器械破壊し、呀蘭虫（猩々緋を染める使用せる虫の名）を貯へたる数千の倉庫崩屋倒墻の下に埋没し（後略）」とみえるように、地震による被害が大きかった。

21) Lee, Raymond L.

1948 *Cochineal Production and Trade in New Spain.*

The Americas IV, pp.449-473.

1951 *American Cochineal in European Commerce, 1526-1625.*

The Journal of Modern History, vol.23, pp.205-24.

22) Fester, G.A.

1954 *Some Dyes of an Ancient South American Civilization*, Dystuffs Vol.4, pp.238-44,

23) King, Mary Elizabeth

1965 *Textiles and Basketry of the Paracas Period, Ica Valley, Peru.*

University Micro Film. pp.96-97.

24) Saltzman, Max and A.M.Keay and Jack Christensen

1963 *The Identification of Colorant in Ancient Textiles.*

Dyestuffs, vol. 44, no. 8, National Aniline Division, Allied Chemical Co. New York, pp. 245-248.

25) Cobo, P. Bernard.

1653 *Historis del Nuevo Mundo*, 4th book 63rd chapt. and 5th book 3rd chapt.

26) アコスタ・増田義郎訳・注『新大陸自然文化史』上 大航海時代叢書Ⅲ 岩波書店 1966年1月12日（391ページ）。

第23章 竜舌蘭、シャボテン、えんじ虫、木藍、綿について

- 27) ベルー経済財政省地域商業局の計画と方針により、アレギッパ開発の一環として行われていることについては、つぎの新聞記事にもみられる。

COMERCIO 1983, 11, 13 Falta apoyo mejorar colorante a base de cochinilla.

- 28) ヨハン・ペッグマン, 特許庁技術史研究会訳

『西洋事物起原』Ⅱ 「ケルメスとコチニール」ダイヤモンド社 昭和56年9月18日

- 29) Lee, Ramond L.:1951, ibid. pp.207.

- 30) Schultz, Wiliam Lytle

1939 *The Manila Galleon*. New York.

Chapter 2, The Japanese.

- 31) 正倉院事務所編『正倉院宝物』北倉 朝日新聞社 昭和37年5月30日 第96図 紫鉞

正倉院事務所編『正倉院宝物(増補版)』北倉 朝日新聞社 昭和62年11月30日 第119図 紫鉞

- 32) 兄玉幸多他編『岡田章雄著作集』Ⅲ 1983年5月20日 思文閣出版

Ⅲ. 日欧交渉と南蛮貿易「毛織物の輸入—風俗史の周辺—」(102-123ページ)。

「〔岡田〕(中略) ええ、コチニールというのはもともとアメリカ大陸の一種のサボテンの寄生虫なんです。ですからアメリカ大陸発見以前にはスペイン人も知らなかったんです。インカの織物の色なんです。アメリカ大陸発見以後にヨーロッパに伝わった染色方法なんですね。それでヨーロッパの猩猩緋がつたわると非常に喜ばれてね」(下線, 引用者)と問題にしている[『被服文化』第160号 文化出版局 昭和53年10月10日 安土・桃山時代の風俗に及ぼした南蛮文化の影響 対談岡田章雄・中部よし子(20ページ)]。

丹野 郁『南蛮服飾の研究』雄山閣出版 昭和51年11月25日 [原色] 8, 10—13, 23, [単色] 3, 28, 58 (118-119ページ)。

山辺知行・神谷栄子『上杉家伝来衣裳』講談社 昭和44年4月16日 107 [原色(部分)] (214, 215

[単色]), 108 [原色(部分)] (217, 218 [単色]), 103, 104 [原色(部分)] (209 [単色]) 図

神谷栄子「伝上杉謙信所用陣羽織八領」『美術研究』第259号 東京国立文化財研究所美術部 昭和44年3月31日 PL. I-IV, および13-37ページ。

梶山 伸『前田家来衣裳』講談社 昭和44年 37 [原色]。

『仙台市博物館収蔵資料図録』②服飾 仙台市博物館 平成2年1月8日 2 [原色], 38, 39-40 [単色]

中村恭子「伊達藩の服飾—伊達政宗所用陣羽織について(1)—」『聖和』第6号 聖和女子短期大学 昭和41年10月18日 156-170ページ。

中村恭子「南蛮服飾—伝伊達政宗所用陣羽織について(2)—」『聖和』第7号 聖和女子短期大学 昭和43年2月15日 59-84ページ。

中村恭子「伊達藩の服飾—伝伊達政宗所用陣羽織—」『聖和』第8号 聖和女子短期大学 昭和44年12月10日 97-134ページ。

『原野農芸博物館図録』第2集 日本の民具—衣食住編— 原野農芸博物館 昭和44年1月1日 [原色, 及び1ページ]

『南部家伝来衣裳』目録 盛岡市公民館 昭和46年 [7. 陣羽織, 2. 猩々緋羅紗地陣羽織]

中屋弘子「南部家伝来衣裳(第2報)陣羽織その1—二領の白羅紗陣羽織について—」『奥羽史談』第60号 1972年11月

日野西資孝「武将と陣羽織」『MUSEUM』No. 47 美術出版社 1955年2月1日 7-13ページ。

山辺知行「赤地違い 鎌文陣羽織」『MUSEUM』No. 162 美術出版社 1964年9月1日 24-27ページ。

波多江穂野・森タミエ「細川忠利の衣裳について」『紀要』第6号 共立女子短期大学 昭和37年12月141-156ページ。

以上の文献により、当時の陣羽織のうち「猩々緋」「緋」を集計すれば、つぎのようになる。

1. 伝上杉謙信・景勝所用緋羅紗陣羽織 〔所蔵〕米沢市・上杉神社
2. 伝上杉謙信・景勝所用紺緋羅紗袖替陣羽織 〔所蔵〕米沢市・上杉神社
3. 伝上杉謙信・景勝所用緋羅紗陣羽織 〔所蔵〕米沢市・上杉神社
4. 緋羅紗陣羽織 〔所蔵〕盛岡・盛岡市公民館
5. 白羅紗地日の出紋（猩々緋羅紗日の出紋）陣羽織 〔所蔵〕盛岡・盛岡市公民館
6. 羅紗緋色地波兎紋火事装束（童着） 〔所蔵〕東京・前田育徳会
7. 伝小早川秀秋所用猩々緋羅紗地遶鎌文陣羽織 〔所蔵〕東京国立博物館
8. 伝豊臣秀吉所用陣羽織 〔所蔵〕滋賀・近江風土記の丘遺物館
9. 伊達政宗所用黒羅紗地裾緋羅紗銀モール陣羽織 〔所蔵〕仙台・仙台博物館
10. 緋羅紗地北斗七星文様陣羽織 〔所蔵〕仙台・仙台博物館
11. 伝山内一豊所用緋羅紗陣羽織 〔所蔵〕大阪・原野農芸博物館
12. 緋羅紗陣羽織 〔所蔵〕東京・永青文庫
13. 緋羅紗地三巴九曜文孔雀文様纏入陣羽織 〔所蔵〕仙台・松島美術館

ここでは、すべてが「緋羅紗」となっているが「猩々緋」とすべきではなからうか。当時の「肩身代り」「袖代わり」「裾代わり」など、流行による図柄構成がとられた。

33) 『大日本史料』第一二編之七〔慶長一五年五月四日記事〕 東京帝国大学 明治38年7月8日

「当代記」五 五月、此比、京都町人米屋ノリウセイト云者、大御所御意、ノビスバンエ渡海、売買任心帰朝、猩々皮多持帰、（後略）

『外蕃通書』第二十六冊 御書物奉行臣近藤守重『近藤正斎全集』第一 国書刊行会 明治38年11月25日の182ページに引用の記事を下記にかかげる。「猩々緋」なる文言はみえないが、「数色の羅紗」とみえている。

『駿府記』慶長十六年九月ノ条ニ、東海之中有濃昆須般国、自古未通、去年京都町人田中勝助、就後藤少三郎而望渡海、今夏帰朝、数色之羅紗、并葡萄酒持来云々トミュ（後略）

『家康史料集』校注小野信二『戦国史料叢書』6 人物往来社 昭和40年12月15日

『駿府記』慶長十六年九月廿二日、（前略）東海の中に濃昆須般国あり。古より未だ通わず。去年京町人田中勝助、後藤少三郎に就きて渡海を望み、今夏帰朝す。数色之羅紗并葡萄酒持来、件の紫羅紗は其一なり。（後略）（16ページ）。

『駿府記』慶長十七年四月二日、（前略）今日、鍋島信濃守、使者を以て黄金五十枚、猩々皮卅間、これを献ず。（43ページ）。

『駿府記』慶長十八年八月三日、イゲレス、今日殿中に候す。猩々皮十間、弩一挺 象眼入鉄砲二挺、長サー間程、の鑓鍵六里これを見るを献ず（77ページ）。

「ドン・ロレリゴ日本見聞録」『異国叢書』駿南社 昭和4年4月10日 76, 119ページ。

「新イスパニヤは布類、藍、紅染料、革、毛布、毛氈、帽子、羅紗、粗羅紗、葡萄酒等の不用又は過剰の品を輸出し（後略）」（76ページ）。

「何となれば新イスパニヤの普通の商品は、洋紅、革、砂糖、布類、藍等なるが、若しアカブルコより船を發し給はば、日本に於て販売すべき品は、布類、洋紅、毛布、コルドバ革干したる果物、葡萄酒、及び少額の絹にして（後略）」（119ページ）。

『駿府記』慶長十六年九月廿二日、（前略）東海之中有濃昆須般国、自古未通、去年京町人田中勝介就後藤少三郎望渡海、今夏帰朝、数色之羅紗并葡萄酒持来（後略）

「ドン・ロレリゴ日本見聞録」『異国叢書』 駿南社 昭和4年4月10日 76, 119ページ。

「新イスパニヤは布類、藍、紅染料、革、毛布、毛氈、帽子、羅紗、粗羅紗、葡萄酒等の不用又は過剰の品を輸出し（後略）」（76ページ）。

「何となれば新イスパニヤの普通の商品は、洋紅、革、布類藍等なるが、若しアカプルコより船を發し給はば、日本に於て販売すべき品は、布類、洋紅、毛布、コルドバ革 Cordovanes、干したる果物、葡萄酒、及び少額の絹にして（後略）」（119ページ）。

- 34) 高坂昌信『甲陽軍鑑』(中) 磯貝正義・服部治則校注 戦国史料叢書4 人物往来社 昭和40年10月15日 (268ページ)。

- 35) 『改訂史籍覽集』通記第31長林樵隱「豊薩軍記」10巻10冊〔寛延2年自序〕巻之1 明治33年11月17日 近藤活版所 (13ページ)、宗麟政務并唐船渡海之事。

- 36) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第1輯 岩波書店 昭和31年1月10日 (141, 142, 229, 279, 335ページ)。

村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第2輯 岩波書店 昭和32年1月30日 (19, 29, 140, 294ページ)。

村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第3輯 岩波書店 昭和33年8月23日 (50, 203-4, 283ページ)。

- 37) 『平戸オランダ商館の日記』第3輯 永積洋子訳 自1633年至1637年10月 岩波書店 昭和48年2月10日 (309, 424ページ)。

『平戸オランダ商館の日記』第4輯 永積洋子訳 自1637年至1641年6月 岩波書店 昭和48年2月10日 (277, 285, 415, 417, 421, 423ページ)。

- 38) 村上直太郎訳『出島蘭館日誌』上 昭和13年2月11日 文明協会 (195-209ページ)。

村上直太郎訳『出島蘭館日誌』中 昭和13年8月15日 文明協会 (8, 11, 122, 248ページ)。

村上直太郎訳『出島蘭館日誌』下 昭和13年5月10日 文明協会 (182ページ)。

- 39) 『敝有院古実記』巻21 『徳川実記』巻41 吉川弘文館 昭和7年6月5日に収録 (381ページ)。

- 40) 石井良助校訂『徳川禁令考』前集第六 創元社 昭和34年9月15日 (411ページ)。

石井良助校訂『徳川禁令考』前集第四 創元社 昭和34年5月30日 (234ページ)。

石井良助校訂『徳川禁令考』前集第五 創元社 昭和34年7月30日 (310, 355ページ)。

西村綏子「江戸時代幕府法における衣服規制の具体的内容―着用すべき衣服を中心として―」『岡山大学教育学部研究集録』第41号 昭和50年5月25日

- 41) 藩法研究会編(石井良助)『(金沢) 藩法集』創文社 昭和34年1月10日

- 42) 藩法研究会編(石井良助)『(熊本) 藩法集』創文社 昭和41年3月31日

- 43) 井原西鶴『日本永代蔵』6巻6冊〔貞享5(1748)年刊〕巻6 野間光辰校注 『西鶴集』下 日本古典文学大系48 岩波書店 昭和35年8月5日 (176ページ)。

頭注によると「26南米産の無花果の木につく木虫を潰してその液汁で染めた緋羅紗。猩々の鮮血で染めたという俗説から『猩々緋』と記す」とあるが、この注にある「無花果」と説明しているのは誤解を招く恐れがある。

- 44) 喜田川守貞編『守貞漫稿』〔天保8(1837)～嘉永6(1853)年〕上中下 朝倉治彦編 東京堂出版 昭和48年12月10日 (145b, 335d, 568c, 612cページ)。

喜田川守貞『類聚近世風俗志』聖光社 昭和3年7月25日

第八編男扮「胴着は猩々緋にて仕立腋の下を糸がかりにすべし」

第十七編織染「猩々緋 羅紗 幅綸 羅背板 じよん かつさん へるへと 猩々緋以下来船の手織也 綿羊の毛を以て織之 猩々緋は赤色也」

第二七編傘覆「女乗物 右の製なる物には日覆猩々緋也」

第二八編駕車「傘袋 貴人の室娘猩々緋紐紅を用ふ」

- 45) オランダ人が上京のとき将軍に入貢するが、これには織物が含まれており、このなかに必ず「猩々緋」がみえている。ここでは紙面の都合から、寛文8（1631）年から、元文4（1739）年におよぶ贈与を掲げたが、これには時代とともに贈りものには変化がみられるが、すべての贈物に「猩々緋」が含まれており、それも上位に掲載されているのである。

『敝有院殿御実紀』〔『国史大系』第42巻徳川実紀第5編 吉川弘文館 昭和6年5月25日〕

1. 〔寛文8年2月28日〕蘭人御覧ぜられる。猩々緋1種。羅紗2種。羅紗板1種。縞布2種。貝光布2種。東京綸子1種。箱1。鏡1。珊瑚枝5。水ほう1。水玉7。獅子香炉1。独角1。沉多酒1壺。
 2. 〔寛文9年3月朔日〕蘭人御覧あり。羅紗2種。羅紗板1種。天鷲絨1種。猩々緋1種。毛氈2種。綸子1種。貝光布1種。縞布3種。たびい1種。眼鏡5。酒1壺。
 3. 〔寛文10年3月朔日〕蘭人御覧あり。猩々緋。大小羅紗。羅紗板。海黄巻。綸子各1種。丁子。牛黄。るさらし。あめんとす。千里鏡。大鏡。縞布5種。貝光布2種。
 4. 〔寛文11年3月朔日〕蘭人御覧あり。猩々緋1種。羅紗2種。羅紗板1種。天鷲絨2種。縞布4種。更紗。貝光布3種。はさる1種。血留石1。鮫皮5張。酒1壺。
 5. 〔延宝元年3月朔日〕蘭人御覧あり。羅紗3種。天鷲絨2種。縞子2種。縹紗1種。縞布4種。更紗2種。海黄1種。東京綸子1種。貝光布2種。丁子50斤。酒1壺。
 6. 〔延宝2年3月14日〕蘭人御覧あり。猩々緋1種。羅紗1種。羅背板1種。縮緬2種。縞布1種。木棉1種。海黄1種。縞子2種。紗綾1種。綸子1種。金入1種。鏡2。花瓶1。鉢1。香盒2。硯屏1。丁子100斤。酒1壺。
 7. 〔延宝3年3月朔日〕蘭人御覧あり。堆朱香台。金鴨香台。金獅子香炉。猩々緋1種。羅紗2種。金入1種。天鷲絨1種。縹珍1種。たびい1種。茶亭1種。縞子2種。縮緬2種。海黄1種。金巾2種。綸子1種。縞布3種。縹布団。彫玉。琥珀。珍陀酒。
 8. 〔延宝4年3月朔日〕蘭人御覧あり。獅子香炉2。堆朱卓1。琥珀匣2。猩々緋1種。羅紗1種。金入1種。縞子1種。たびい1種。縞布1種。海黄1種。貝光布1種。丁子1種。珍陀酒1種。驢馬2匹。
 9. 〔延宝5年2月15日〕蘭人御覧あり。青磁香炉1種。玻黎鏡2。独角1。猩々緋1種。羅紗2種。綿中1種。ころ1種。羅背板1種。天鷲絨1種。金入1種。たびい1種。縞布4種。綸子1種。更紗2種。貝光布2種。海黄1種。縫布1枚。丁子油55斤。酒2種。
 10. 〔延宝6年3月15日〕蘭人御覧あり。大獅子香炉。麒麟香炉各1。玉色大鏡1。自鳴鐘1。金入1種。純子1種。天鷲絨1種。猩々緋1種。羅背板1種。羅紗3種。縞布4種。更紗1種。貝光布2種。海黄1種。東京綸子1種。丁子油28壺。葡萄酒。陣陀酒各1壺。風鳥3隻。
 11. 〔延宝7年3月朔日〕蘭人御覧あり。大鶴香炉2。自鳴鐘1。花氈2枚。羅紗1種。羅紗板1種。縞布1種。貝光布2種。縮緬1種。海黄1種。油1種。酒2壺。
 12. 〔延宝8年3月3日〕阿蘭人入貢す。大卓2。唐金獅子香炉2。刀箱1。瑠璃燈籠2。鍔氈1。金入紗1種。猩々緋1種。羅紗2種。羅背板1種。縞布3種。縹紗1種。海黄1種。貝光布1種。紗綾1種。油1種。酒1種。
 13. 〔天和元年2月28日〕阿蘭人御覧あり。銅大鶴香炉。同龍馬香炉。螺鈿卓。金紗。紋むりやう。阿蘭たびい。花席。金入。縹羅紗。綸子。紗綾。海黄。金巾2種。縞布4種。丁子油。ちんた酒。葡萄酒。
- 若君には、琥珀造物。堆朱匣。羅紗。金紗。海黄。東京縞子。縮緬。奥縞。金巾。酒2種。
14. 〔天保2年2月28日〕阿蘭人入貢す。びいどろ大鏡2面。金獅子香炉1。螺鈿卓1。花席3枚。ご

ろ1種。猩々緋1種。羅紗1種。縹子1種。縮緬2種。紗綾1種。海黄1種。吉貝布2種。縹布3種。香油1種。酒2壺。

若君には、堆朱卓1。白銅獅子香炉1。猩々緋1種。ごろ1種。縮緬2種。海黄2種。縹布1種。香油1種。酒2種。

15. 〔天保3年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。堆牛卓1。銅鴨香炉1。青磁香炉1。一角1。花席2張。金入2種。羅紗2種。猩々緋1種。縹子1種。縹布4種。縮緬2種。海黄1種。紗綾1種。金巾3種。酒2種。油1種。

若君には、堆朱沈箱。玻黎偶人。珊瑚。花席。金入羅紗。縮緬并に酒2種。

16. 〔貞享元年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。猩々緋1種。羅紗3種。羅背板1種。金入6種。天鷲絨2種。縹布4種。金巾1種。海黄1種。紗綾1種。蛇香1本。香敷3枚。大鏡2面。大花席2枚。丁子油1匣。酒2壺。

17. 〔貞享2年3月3日〕阿蘭人御覧あり。猩々緋1種。羅紗3種。羅背板1種。銀入1種。綿2種。純子1種。紗綾1種。天鷲絨2種。金入1種。縹子1種。縮緬1種。金巾2種。縹布1種。海黄1種。瑠璃鏡1面。油1種。酒2種。

18. 〔貞享3年2月28日〕蘭人入貢するをもて、けふ御覧あり。珊瑚珠3顆。独角杖1本。玻璃器32。金入1種。猩々緋1種。羅紗2種。縹布4種。紗綾1種。紗綸1種。縹紗2種。海黄1種。金巾1種。酒2種。

19. 〔貞享4年2月28日〕蘭人御覧あり。珊瑚。瑪瑙61顆。猩々緋1種。羅紗3種。羅背板1種。金入1種。純子1種。海黄1種。縹紗2種。綸子1種。紗綾1種。更紗1種。縹布4種。糸30把。油1種。酒2壺。

『常憲院殿御実紀』『国史大系』第43巻徳川実紀第7巻 吉川弘文館 昭和6年9月11日]

1. 〔元禄元年2月28日〕蘭人御覧あり。猩々緋1種。珊瑚珠100顆。玻璃10。縹布2種。羅紗2種。糸1種。緞子1種。羅背板1種。縹子2種。縹紗2種。海黄1種。ふらすこ1対。油1種。酒2種。
2. 〔元禄2年2月14日〕蘭人御覧あり。眼鏡2。琥珀珠50。碧珊瑚珠8。珊瑚石1。蘭石珠13。羅紗2種。猩々緋1種。蘭金入1種。縹子2種。海黄1種。縹布2種。更紗1種。縹紗2種。油20壺。酒2種。
3. 〔元禄3年2月28日〕蘭人御覧あり。猩々緋1種。羅紗2種。花氈1種。金入1種。天鷲絨2種。縹珍2種。縹子2種。縮緬2種。縹布4種。海黄2種。金帛1種。酒2種。
4. 〔元禄4年2月30日〕蘭人入貢す。金銀珠5顆。奇梅香1本。龍腦1斤。猩々緋1反。羅紗2種。ごろふくりん1種。縹子2種。綸子2種。縮緬2反。縹布4種。金巾1種。海黄1種。糸2種。酒2種。
5. 〔元禄5年3月6日〕蘭人御覧あり。玻黎鏡1面。香舖1匣。花席2枚。猩々緋1種。大羅紗1種。金入1種。海黄2種。縹子2種。綸子2種。縹布4種。縹紗3種。酒2種。
6. 〔元禄6年2月28日〕蘭人御覧あり。螺鈿植。并に盆。堆朱香匣。并に盆香2種。猩々緋1種。大羅紗1種。毛氈1種。ごろ1種。海黄1種。縹布4種。金入1種。綸子3種。純子1種。天鷲絨2種。糸3種。酒2種。
7. 〔元禄7年3月朔日〕入貢の蘭人御覧あり。奇南香1種。沈水香1種。珊瑚1種。琥珀2種。羅紗2種。猩々緋1種。氈1種。純子1種。綸子1種。縹紗2種。紗金1種。天鷲絨1種。縹布2種。海黄2種。糸2種。酒2種。
8. 〔元禄8年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。珊瑚3枝。琥珀30。大羅紗2種。糸2種。猩々緋1種。縹布3種。海黄2種。金入1種。錦1種。純子1種。縮緬5種。酒2種。
9. 〔元禄9年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。琥珀35。花氈2枚。猩々緋1種。縮緬3種。羅紗1

- 種。縞布3種。金巾1種。金紋紗1種。純子1種。海黄2種。綸子2種。酒2壺。
10. 〔元禄10年2月28日〕蘭人御覧あり。琥珀50顆。花席1枚。羅紗1種。猩々緋1種。天鷲絨1種。縞布5種。純子1種。綸子1種。縞紗3種。糸3種。酒2壺。
11. 〔元禄11年2月28日〕蘭人御覧あり。猩々緋1種。羅紗2種。金紗1種。綸子1種。天鷲絨3種。縮緬4種。白紗1種。縞布4種。海黄2種。毛氈1種。酒2種。
12. 〔元禄12年2月28日〕蘭人御覧あり。珊瑚2枝。琥珀50顆。独角1。羅紗2種。猩々緋1種。金入1種。綸子4種。縞紗3種。縞子1種。縞布3種。海黄2種。酒2種。
13. 〔元禄13年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。珊瑚3枝。金琥珀50顆。羅紗2種。猩々緋1種。縞珍1種。錦1種。綸子1種。縮緬2種。紋紗1種。天鷲絨2種。縞布5種。海黄1種。糸2種。酒2種。
14. 〔元禄14年2月28日〕蘭人御覧あり。大羅紗2種。猩々緋1種。縞子1種。純子1種。錦1種。天鷲絨1種。縮緬1種。縞布4種。海黄3種。金巾1種。糸1種。酒2種。
15. 〔元禄15年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。琥珀200顆。大羅紗2種。猩々緋1種。ふらた1種。茶宇1種。縞子2種。純子1種。縞紗1種。縞布3種。糸1種。海黄3種。酒2種。
16. 〔元禄16年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。珊瑚100顆。猩々緋1種。大羅紗2種。天鷲絨2種。もうる1種。縞珍1種。綸子1種。縞紗3種。縞布1種。金巾1種。糸1種。酒2壺。
17. 〔寛永2年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。大羅紗2種。猩々緋1種。天鷲絨2種。縞子2種。縞子1種。純子1種。縞布3種。縮緬2種。紗綾1種。海黄2種。金巾1種。酒2壺。
18. 〔寛永3年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。珊瑚20顆。猩々緋1種。天鷲絨3種。糸1種。縞子1種。綸子1種。縮緬2種。縞布4種。海黄2種。酒2壺。
19. 〔寛永4年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。珊瑚珠20顆。猩々緋1種。天鷲絨1種。縞子2種。縞珍1種。純子2種。縮緬1種。縞布3種。海黄1種。更紗1種。酒2種。
20. 〔寛永5年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。珊瑚珠100顆。猩々緋1種。大羅紗3種。金入1種。純子1種。天鷲絨1種。縮緬2種。綸子2種。縞布4種。糸2種。酒2種。
- 『文昭院殿御実紀』『国史大系』第44巻徳川実紀第7編 吉川弘文館 昭和7年4月15日]
1. 〔宝永6年3月朔日〕阿蘭人方物を献ず。珊瑚珠100粒。金琥珀17粒。切子金琥珀150粒。猩々緋1種。大羅紗2種。錦1種。縞子1種。紅白糸30斤。縞布3種。海黄1種。縮緬2種。酒1種。
2. 〔宝永7年3月朔日〕入貢の蘭人御覧あり。珊瑚珠1種。琥珀2種。猩々緋1種。羅紗3種。縞布1種。海黄1種。天鷲絨1種。錦1種。ごろふくれん1種。綸子1種。縮緬3種。糸2種。酒2種。
3. 〔正徳元年3月朔日〕入貢阿蘭人御覧あり。珊瑚珠150種。猩々緋1種。大羅紗1種。縞子1種。純子1種。縞珍1種。縮緬3種。糸2種。海黄2種。酒2壺
4. 〔正徳2年3月朔日〕阿蘭人方物を献ず。珊瑚珠100粒。猩々緋1種。海黄4種。天鷲絨2種。金入1種。純子1種。縞布1種。茶宇1種。大羅紗1種。更紗1種。縞珍1種。ころう1種。縮緬2種。酒2壺。
5. 〔正徳3年3月朔日〕蘭人御覧あり。猩々緋1種。大羅紗1種。天鷲絨1種。綸子2種。縮緬2種。縞布6種。海黄3種。酒2種。
6. 〔正徳4年2月28日〕蘭人まうのぼり方物を貢す。猩々緋1種。羅紗1種。紹2種。縮緬1種。縞布4種。海黄5種。金巾1種。酒2種。
7. 〔正徳5年2月28日〕蘭人入貢あり。猩々緋1種。大羅紗2種。縞子1種。縮緬1種。縞布4種。海黄1種。貝光布1種。酒2種。
8. 〔享保元年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。献物は猩々緋1種。大羅紗2種。羅紗1種。縞子1種。純子1種。縞布4種。海黄4種。金巾1種。酒2壺。

『有徳院殿御実紀』〔『国史大系』第45巻徳川実紀第8編 吉川弘文館 昭和8年4月25日〕

1. 〔享保2年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。猩々緋2種。更紗1種。羅紗1種。紅白金入縹子1種。嶋布2種。海黄6種。金巾1種。酒2壺。
2. 〔享保3年2月28日〕入貢の阿蘭人を御覧あり。甲冑1具。鏡1枚。猩々緋1種。大羅紗2種。縹子1種。縮緬2種。紬布5種。かいき5種。金巾1種。酒2壺。
3. 〔享保4年2月28日〕阿蘭人入貢して方物を捧げ奉る。猩々緋1種。大羅紗1種。天鷲絨1種。紅氈1種。縮緬1種。縹布6種。海黄5種。金巾1種。酒1種。
4. 〔享保5年〕欠
5. 〔享保6年2月28日〕入貢の阿蘭人御覧あり。馬具1具。鉄砲2挺。小刀12本。猩々緋1種。大羅紗1種。縹子1種。縮緬2種。縹布5種。海黄4種。更紗1種。金巾1種。酒2壺。
6. 〔享保7年2月28日〕入貢の阿蘭人拝礼す。猩々緋1端。大羅紗3種。縮緬2種。紗綾2種。奥島絹類5種。海黄4種。金巾1種。更紗1種。酒2壺。
7. 〔享保8年2月28日〕阿蘭人御覧あり。猩々緋1種。大羅紗2種。縹布6種。縮緬2種。紗綾1種。海黄3種。金巾1種。さらさ1種。酒2種。
8. 〔享保9年2月28日〕阿蘭人御覧あり。猩々緋1種。大羅紗4種。縹子1種。さらさ1種。大海黄1種。縹類5種。酒2種。
9. 〔享保10年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。猩々緋1種。大羅紗3種。海黄4種。縹布10種。金巾2種。花巾せん1種。酒1種。
10. 〔享保11年2月28日〕蘭人入貢して方物を献ず。猩々緋1種。大羅紗1種。縹子1種。縹布8種。海黄4種。さらさ1種。酒2壺。
11. 〔享保12年2月28日〕入貢の阿蘭陀人を御覧あり。猩々緋1種。羅紗5種。羅紗板1種。純子2種。縹紬8種。海黄2種。金巾1種。酒2壺。
12. 〔享保13年2月28日〕阿蘭人入貢して方物を献ず。猩々緋1種。大羅紗3種。へるへとあむ1種。縹子1種。縹珍1種。純子1種。縹布1種。海黄4種。金巾1種。酒2壺。
13. 〔享保14年2月28日〕入貢蘭人の御覧あり。猩々緋1種。大羅紗5種。へるへとあん1種。ころふくれん1種。純子1種。縹絹8種。海黄2種。大金巾1種。酒2壺。
14. 〔享保15年2月28日〕入貢の阿蘭人を御覧あり。猩々緋1種。大羅紗6種。羅紗板1種。縹子1種。純子1種。縹布類9種。海黄4種。仏郎機1口。甘蔗鳥1隻。酒2壺。
15. 〔享保16年2月28日〕入貢の阿蘭人御覧あり。猩々緋1種。ごろふくれん1種。はあい2種。羅背板1種。へるへとあん1種。びろうど1種。ふらた1種。縹子1種。縹珍1種。純子1種。縹布4種。海黄3種。金巾1種。更紗1種。酒2種。
16. 〔享保17年2月28日〕阿蘭人入貢して方物を献ず。猩々緋1種。大羅紗3種。羅紗板1種。へるへとあん2種。ごろふくれん2種。縹子1疋。純子2種。縹布7種。海黄3種。金巾1種。酒2壺。
17. 〔享保18年6月13日〕入貢の蘭人御覧あり。蘭製甲冑2領。猩々緋1種。大羅紗6種。羅紗板2種。縹子1種。縹布8種。海黄3種。金巾1種。更紗2種。酒1種。
18. 〔享保19年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。猩々緋1種。大羅紗3種。羅紗板1種。へるへとあん2種。縹子1種。純子2種。縹布9種。海黄4種。金巾1種。さらさ2種。酒1壺。独犬。
19. 〔享保20年閏3月朔日〕入貢の蘭人あり。猩々緋1種。大羅紗4種。羅紗板1種。へるへとあむ1種。天鷲絨1種。縹子1種。純子1種。縹布5種。海黄2種。更紗3種。金巾1種。酒1種。求飲鳥。
20. 〔元文元年2月28日〕入貢の蘭人を御覧あり。猩々緋1種。大羅紗4種。羅紗板2種。へるへとあん1種。縹子1種。純子1種。縹布8種。海黄4種。さらさ1種。金巾1種。酒2壺。

21. 〔元文元年3月29日〕田安邸に臨駕あり。松平左近将監乗邑。加納遠江守久通御先にまかる。右衛門督宗卿に縮緬10巻。干鯛1箱。更に羅紗。猩々緋をつかはされ、簾中には、縮緬10巻。干鯛1箱。更に純子10巻。縞子5巻。伝役以下賜物差あり。卿より綿20把。簾中より巻物5。肴1種を献ぜられる。
22. 〔元文2年2月28日〕入貢の蘭人御覧あり。猩々緋1種。大羅紗6種。へるへとあん1種。縞子1種。純子1種。縞類9種。海黄4種。金巾1種。酒1種。珊瑚大小2種。香敷1枚。硝子器1対。秦吉了1隻。胡犬2疋。
23. 〔元文3年2月28日〕蘭人御覧あり。猩々緋1種。大羅紗5種。羅背板1種。へるへとあん1種。しゆす2種。純子1種。縞布7種。海黄3種。金巾1種。更紗1種。酒2種。
24. 〔元文4年2月28日〕蘭人入貢して、例のごとくささげものす。猩々緋1種。大羅紗1種。羅紗板1種。へるへとあん1種。緞子1種。縞布4種。海黄3種。酒2壺。
- 46) 寺島良安『和漢三才図絵』1022巻82冊〔正徳3(1713)年刊〕巻40 寓類・恠類 猩猩〔東洋文庫 466『和漢三才図絵』6 寺島良安 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注 平凡社 1987年3月10日〕
 なお「羅紗」の項目には、「△思うに、羅紗は阿蘭陀から来る毛織の上品である。紅・黒・白褐の数色がある。その絳のを猩猩皮(緋)という。〔茜で染めるのであろうか。その美しさを譬えてこう名づけている。人々は猩猩の血で染めるのだというのが笑止なことである〕」(『東洋文庫本』訳文による)とみえ、茜で染めたものとみている。
- 47) 後藤梨春『紅毛談』2巻 明和2(1765)年刊〔『文明源流叢書』第一 泰山社 昭和15年11月12日に収録〕
 巻の上 ○せうぜやう緋染草の事
 〔『江戸科学古典叢書』17 「紅毛談・蘭説弁惑」解説菊地俊彦 恒和出版 昭和54年3月30日に収録〕
 なお、猩々緋は蘭語では、Scharlaken という。
- 青木昆陽『和蘭文字略考』〔延享元(1744)年序〕〔『日本思想大系』64「洋学」上 岩波書店 1976年11月5日(24ページ)。
 『日本庶民生活史料集成』第28巻『和漢三才図絵』(1) 三一書房 1980年4月30日
- 48) 〔享保16年2月28〕『国史大系』第45巻徳川実紀第8篇 昭和7年4月15日 吉川弘文館(557ページ)。
- 49) 大槻如電・佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』錦正社 昭和40年4月(166ページ)。
- 50) 関係部分については、新旧二書に翻訳されたものが刊行されているが、
 Chomel, M. Noel
 1778—84 Algemeen Huishoudelijk, Natuur, Zedekundig en Konst-Woordenboek.
 のうち、
 1 de A—D, pp. 396-7.
 ショメール著・馬場貞由、大槻茂質外五氏重訳『厚生新編』厚生新編刊行会 昭和12年8月30日
 第26巻カルミン 337ページ。
 第27巻コーセニリィ 352ページ。
 羅甸「コッネルラ」「コッシヲネルラ」
 第63巻紫酄 791ページ。
 ショメール著・馬場貞由、大槻茂質外五氏重訳『厚生新編』5巻 恒和出版 昭和53年7月5日
 2巻 第26巻カルミン 308ページ。
 2巻 第27巻コーセニリィ 361ページ。

羅甸「コツシネルラ」「コツシヲネルラ」

5 卷 第63巻紫鯉 442ページ。

直接に関係する部分は、第27巻コーセニリィに記されているが、コチニールと係関する部分を、上記に挙げておくことにする。

- 51) 齊藤阿具「寛政年間に於ける毛布染織所設立の計画に関する文書」『史学雑誌』第17編第4号 史学会 明治39年 369-384ページ。

『長崎オランダ商館日記』1 自1801年度至1803年度 雄松堂出版 1889年 3月21日

「(1800年 8月1日) すなわち、毛織物工場を設置することと、そのために必要な諸道具と緬羊数匹を持参して毛織物の織り出しに熟練した。三、四名の者を、そしてなおそのほかに、洋紅の調整と猩々緋その他の大羅紗の染色方に熟練した。一、二名の者を日本へ渡来させたいとのご希望を知らせました」(52-3ページ)。(下線、引用者)

「(1800年11月5日) 1800年にすでになおされた注文に追加して猩々緋の染物師一名か、二名を求める注文と、植物若干および燕脂虫三種を求める別段注文である」(281ページ)。(下線、引用者)

- 52) 中嶋清香『舶来諸産解説十七条』〔享和3(1803)年12月25日跋〕〔国立国会図書館蔵〕

- 53) 栗本丹洲(昌蔵)『千虫譜(栗氏千虫譜)』10冊〔文化8(1811)年、曲直瀬愛旧蔵〕〔国立国会図書館蔵〕。なお「紫鯉虫」「紫鯉」の題目で解説されている。

『江戸科学古典叢書』41 恒和出版 昭和57年12月25日に収録〕なお「紫鯉虫」は226ページに、「紫鯉」は231ページに掲載されている。

- 54) 大関増業『止戈枢要』〔文化11(1814)～文政5(1822)年〕のうち、巻145～6『彩色類聚』校訂・発行 下鳥正憲 昭和15年12月31日

- 55) 譜室庄左衛門(楽圃, 1789-1859)『虫譜図説』12巻〔安政3(1856)年成立〕〔国立国会図書館蔵〕

- 56) 前田利保『啓蒙虫譜図解』上下2巻 天保12(1841)年序〔写本〕〔国立国会図書館蔵〕

- 57) 『中島丰徳建白書(写)』(山口県立図書館蔵)

- 58) 内閣記録局編『法規分類大全』第22巻 外客門〔I〕

○改税約書 慶応2年5月13日(西暦1866年6月25日)

英仏米蘭四公使ト於江戸各国文ヲ以五通ニ認メ各通ニ連名調印

- 59) 津下 剛「明治政府と小笠原島問題」『歴史と地理』第34巻第3号 史学地理同政会 昭和9年9月1日(17-32ページ)。

『朝野新聞』第678号 明治8年11月28日 第3面第1-2段

- 60) 『公文録付属ノ図』第84号 一袋25枚〔国立公文書館蔵〕

この写真は、『朝野新聞』(明治8年11月28日付)によると、随行した写真師松崎晋二(東京、中端和泉町居住)によって撮影されたものである。彼は、この写真の販売を目論みており、「彼の島にて写し取りたる景色ならびに人物等の写真も此ほど御用の分がみなみな納め済に成り、是から跡は、勝ってに写して売をことを許されたと申しますから、皆さん買って御覧なさい船ちゃんも旅籠も入らずに珍しい処の見物が出来ます」とみえている(『東京日日新聞』明治9年2月12日付)。

- 61) 農商務省『大日本農史』今世 農商務省 明治24年6月後書〔昭和45年10月15日 国書刊行会 復刻〕(192ページ)。

「明治九年三月十日小笠原等事務局ヲ内務省に置ク(『明治職官沿革志』、小花作助手記)。此ノ局ハ幾モナク小笠原島内務省出張所ト改称シテ之ヲ該島ニ移シ省中ノ該島ニ関スル事務ハ庶務局、会計局等ニテ取扱ヘリ」

- 62) 『大日本農史』(214ページ)。

「二十二日権助小花作助ヲ小笠原島ニ遣ハン庁ヲ父島扇浦ニ設ケテ島事ヲ經理セシム」

- 63) 農林省農務局編纂『明治前期勸農事蹟輯録』上巻 大日本農会 昭和14年〔昭和50年10月30日 復刻長崎出版〕(619-20ページ)。

第14款 資20 榎本武揚上申幾那珈琲樹等植付之義ニ付伺

〔説明〕日本南方ニ幾那珈琲談婆姑植付之説 武揚

- 64) 農林省農務局編纂『明治前期勸農事蹟輯録』上巻 大日本農会 昭和14年〔昭和50年10月30日 復刻長崎出版〕(628ページ)。

第14款 資28 在魯全権大使榎本武揚ヨリ蔬菜種子其外製茶養蚕等之義申越候ニ付御回答按并ニ外務省ニ蚕御回答按并ニ外務省ニ御掛合按共併セテ相伺候

- 65) 広瀬彦太編『榎本武揚・西比利亞日記』東兆書院 昭和18年7月15日(51ページ)。

- 66) 『農務顛末』第6巻 第30 小笠原島 農林省 昭和32年12月23日(464-465ページ)。

14 有用植物栽培着手ノ件

- 67) 『公文録』明治11年2月内務省伺〔第三号文書〕

一、武田一等属ヲ印度并瓜哇島等へ派遣伺

これには、つぎのような上申書が付属している。

「 小笠原島へ植物等移植着手之儀ニ付上申

小笠原島之儀ハ、明治八年外務内務大蔵海軍四省ヨリ官員派出探偵之末、同九年内務権少書記官小花作助等彼地出張所へ渡海在勤以來、勸農局博物局ヨリ有用諸植物苗木種子差送り栽培試験候処、生育宜敷旨、昨十年中報知有之候ニ付、全ク彼地ノ風土ニ適シ候事ト考定候ニ付、是迄試植候内、幾那樹、エラスチカゴム樹、茄菲樹、阿礼機樹等有用植物類ヲ今回印度、瓜哇等ノ地方ヨリ取寄、移植着手之積リ、並ニ呀蘭米即チ洋紅ハ比年来画工、染匠ノ需用多ク、随テ逐年輸入モ顆敷有之候処、元来御国地ニ無之品ニ候間、是迄試験ハイタサス候得共、彼島ノ暖度ニテハ必シモ適當生育可致ト存シ候ニ付、右原種モ印度等ヨリ取寄試植候積リニ御座候、右移植栽培之義ハ勸農局担任トイタシ、同局ヨリ官員等派出之上、夫々着手為致、永遠彼島之物産繁殖相成候様、可仕見込ニ御座候、依之此段上申イタシ置候也

明治十一年二月廿二日

内務卿 大久保 利通

太政大臣 三条 実美 殿

」

- 67) 『勸農局沿革録』農務局 明治14年5月刊(14ページ)。

「明治十一年三月 小笠原島へ移植ノ植物取調ノ為委員(一等属武田昌次)ヲ印度瓜哇ニ派遣ス」とみえている。

『勸農局第四回年報』〔明治十一年度〕自明治11年7月至明治12年6月(勸農局)明治14年1月〔明治前期産業発達史資料〕別冊④ 明治文献 昭和40年12月25日、および『内務省年報・報告書』第6巻 三一書房 1983年7月31日に収録]

○明治十一年度小笠原島植物景況(勸農局第四回年報) 昨年瓜哇ニ於テ和蘭総督並植物園総長ハ呀蘭虫ヲ飼養スルハ勞シテ効ナキモノトイエリ、其理由如何トナレバ蓋シ風雨屢々コレアリ、地方ニテハ生育セサルヲ以テナリト

- 68) 『農務顛末』第6巻 第30冊 小笠原島 農林省 昭和32年12月23日(409-519ページ)。

18 植物移植費用概算ノ義ニ付伺ノ件

- 69) 外務省編『日本外交文書』第11巻 自明治11年1月至明治11年12月 日本国際連合協会 昭和24年12月5日(365-367ページ)。

176 八月十三日 武田内務属ヨリ伊藤内務省卿宛

- 70) このときインドネシアの「バタヴィア」と「ボイデンソルグ」間(55km)には、すでに1873(明治5)年1月に私設鉄道(オランダ東インド鉄道会社)が開通していたのであるが、これを利用せず、オラン

ダ総督からの便宜供与をうけて「駅馬」によったとみられる。現在では、その間にディーゼル車が運転されている。

- 71) 『朝野新聞』明治11年5月31日第1418号 第1面第1段

「内務一等属武田昌次君が今度印度より樹木の苗木并に種物を夥しく四ッ谷の勸農局へ廻はされしが昨三十日に到着せしとの事」

『大日本農史』(271ページ)。

このとき武田昌次により持ち帰られたものが、つぎの文献が国立国会図書館に所蔵されている。

『バタビアン府植物博物館日本海草目録』写 大 7丁 [国会] 特7/206

- 72) 『郵便報知』第1629号 明治11年7月2日第2面第2段

「(前略) 同島へ取り建つる事務所、農夫舎、農具置場、収穫小屋等総建坪八十餘坪程の建築へ桶町の玉置半右衛門が引受けしが、勸農局御用係服部五十二氏。并びに属官二三名、農夫三名を伴ひ、金鷄那(幾那)、呀蘭虫(洋紅虫)、扶紙膠樹(エラストックゴム)、茄菲樹を、及び阿利機樹の苗木数百本を携え、本日出帆の田子ノ浦丸にて該島へ出張されたり」

『大日本農史』(273-4ページ)。

- 73) 『郵便報知』第1525号 明治11年2月28日第1面第4段

茄菲、幾那、ヲリイフ樹の栽培、及び呀蘭虫(即ち紫鯽、猩燕脂の虫)養育方の為め印度カルカッタより瓜哇島へ赴かるゝ内務省一等属武田昌次氏は、来る四日頃出帆さるゝ趣(下線、引用者)

『郵便報知』第1526号明治11年3月1日第2面第2段

昨日の新聞紙上に掲げし武田昌次君が、瓜哇国へ取りに行かる^{フーニヤ}猩燕支虫は、固より熱国の産にして。銅ふに霸王樹を以てする物やへ、取り来らるゝ後は、之を小笠原島に飼立らるゝに付、其前同島へは、夥しく霸王樹を植付に成ると申す評判(下線引用者)

『郵便報知』第1666号 明治11年8月15日第2面第2段

「○先般勸農局より機那、茄菲、紫鯽の三種を買入の為め、印度及瓜哇へ出発されし内務一等属竹田昌次ハ、一昨日滞なく、帰京して具上されたる趣は、機那、茄菲の兩種は十分に買入、尚は後々の注文もなせしかど、唯コーゼニールのみは、両地とも至て少く、偶たま持帰るも、日本地方には適せざるも、買入れすとのことなり」(下線、引用者)

『郵便報知』第1621号 明治11年6月22日第2面第2段

「○(前略) ^{フーニヤ}呀蘭虫は、瓜哇地にて近來産出すれども、追々減衰し、殊に「バタビヤ」近地には養育場なく、「スラバヤ」県「パンジョウ」県には養育場あるも瓜哇の極東にて五百里乃至七百里の地にて、日数を費したれば「ボイテンソルグ」府の植物園に育養せる分を見本に買入られしのみ、尚ほ印度地方に於て吟味の上、取入らるゝといふ(下線、引用者)

『日本外交文書』第11巻 自明治11年1月至明治11年12月 日本国際連合協会 昭和24年12月5日 事項15 瓜哇産幾那咖啡苗木取寄一件(363-370ページ)。

なお同植物園の当時における邦名は「バタビアン府植物館」としている。

- 74) 農林水産省編『農林水産省百年史』上巻 農林水産省 1979年3月25日(115ページ)。

- 75) 『大日本農史』(258ページ)。

- 76) 『農務顛末』第6巻 第30冊 小笠原島 農林省 昭和32年12月23日(475ページ)。

20 和種霸王樹差送ノ件

『サボテンの驚異』原野農芸博物館図録 第3集 昭和44年11月1日

- 77) 『郵便報知』第1716号 明治11年10月16日 第2面第2段

「○小笠原島へ機那、コーヒー苗木付の為め、勸農局の一等属竹田昌次君が、農夫十名、頭取世話役一名、及び農具苗木等を積み載せ、来十一月一日該島へ、発船さるゝ趣、又該島の袋沢という所に勸

農局農務所を設け、武田君、及び直井真澄君の官宅二棟を其側に建設し、武田君到着の上に、万事を主任さるゝ由」

『朝野新聞』第1545号 明治11年10月30日 第1面第1段

「(前略)内務一等属武田昌次君は来月一日出帆にて同島へ赴かる由」と、『郵便報知』と同様な記事がみえる。

78) 『東京日日新聞』明治11年11月2日第2075号 1014ページ第1段。

79) 『勸農局第三回年報』〔明治十年度〕自明治10年7月至11年6月 明治12年8月(勸農局)〔『内務省年報・報告書』第5巻 三一書房 1983年6月15日に収録〕

80) 『勸農局沿革録』農務局 明治14年5月刊(15ページ)。

「明治十一年七月 局員及ヒ農夫ヲ小笠原島ニ在勤セシメ本局出張所ヲ該島北袋沢ニ設置シ荒地開墾ノ挙アリ」とみえている。

81) 『郵便報知』第1764号 明治11年12月13日第2面第1段

82) 『勸農局第四回年報』〔明治十一年度〕自明治11年7月至明治12年6月(勸農局)〔『内務省年報・報告書』第6巻 三一書房 1983年7月31日に収録〕(169ページ)。

小笠原島植物景況

『農務類末』第6巻 第30冊 小笠原島 農林省 昭和32年12月23日(511-2ページ)。

45 出張所着手場 明治11年 一覧表及附録

83) 『郵便報知』第1716号 明治11年10月16日 第2面第2段

84) 『勸農局第四回年報』〔明治十一年度〕自明治11年7月至12年6月(勸農局)明治14年1月〔『明治前期産業発達史資料』別冊④Ⅰ 明治文献 昭和40年12月25日〕

小笠原島植物景況

85) 『東京日日新聞』第2606号 明治23年10月26日 986ページ第2段

『勸農局沿革録』農務局 明治14年5月刊(14ページ)。「明治十三年十月、小笠原島本局出張所事務ヲ東京府ニ属ス」とみえている。

86) 『公文録』明治13年内務省第11号文書 小笠原島ヲ東京府管轄ニ被属ノ件

津下 剛「明治政府の勸農政策と小笠原諸島の農業」『経済史研究』第12巻第6号(通巻第62号) 明治9年12月 経済史研究会(22-40ページ)。

津下 剛「再び『小笠原諸島の農業』について」『経済史研究』第16巻第6号 昭和11年 経済史研究会(91-96ページ)。

87) 『東京日日新聞』第2612号 明治13年10月11日 934ページ第3段。

「○小笠原島は府庁の所轄となりしに付、一昨日、府庁より吉水五等属、中野七等属の両氏が内務省へ出張せられ、同島の書籍類を受取られたりと(後略)」

88) 『東京日日新聞』第2606号 明治13年10月26日 986ページ第2段。

『朝野新聞』第1034号 明治13年10月26日 第1面第3段

89) 『朝野新聞』第1038号 明治13年10月30日 第1面第4段

90) 『東京日日新聞』第2685号 明治13年11月19日 1006ページ第2段。

「○小笠原島は去月廿一日廿二の両日大風雨ありて其の損害の景況を左の通り其の筋へ届け出たりしとぞ(中略)当出張所仮官庁モ殆ンド倒覆ノ勢ニ候処、幸ニシテ大害ヲ免レ候へ共、傾斜破損不少、附属建築ノ内監倉并水夫部屋モ大分破損ニ及ヒ候へとも其他各官舎等格別ノ損処無之候(後略)」

91) 『朝野新聞』第1849号 明治12年11月8日 第1面第3段

「○小笠原島の開墾ハ存外に抄取りされば、今一層開進の上は、北海道の如く、国の称を設け、南海道の部分に編入され(後略)」

- 92) 『時事新報』明治15年8月19日第143号 第3面第4-5段

「○小笠原島渡航(中略)信州上州の有志者が小笠原島の元来桑樹に富るを聞付け、若干に醸金をなして相曽某を主任となし、蚕婦数十名を引き連れ、該島に渡海する手筈にて、上京し、馬喰町旅人宿にて便船を待ち居れり」

- 93) 『時事新報』明治15年4月7日第31号 第2面第3段

- 94) 明治15年『改正官員録』(博公書院)

この曲直瀬愛は、わが国最初の昆虫採集保存法の単行本、『採虫指南』明治16(1883)年をあらわしている。

- 95) 磯村貞吉『小笠原島要覧』東京 便益社 明治21年1月1日(113ページ)。

明治11年10月7日勸農局出張所を父島北袋沢に設く、是より先内務権大書記官田中芳男の建議に因り、暖地植物を島地に試植せんため一等属武田昌次を印度、瓜哇等に派遣し暖地数種の植物を携帯せしめ、此に其着手に及べり。

- 96) 山方石之助編『小笠原島志』全 東陽堂 明治39年11月30日(593, 651ページ)。

〔付表〕 1. メキシコ・オハカ州コチニール生産高
(オハカ州統計局発表数値による)

| 年次 | 生産量 (リブラ) | 平均価格 (リラ) | 総金額 (ドル) | 年次 | 生産量 (リブラ) | 平均価格 (リラ) | 総金額 (ドル) |
|------|--------------|--------------|----------------|------|--------------|--------------|--------------|
| 1758 | 675,562 | 16½ | \$ 1,393,346.5 | 1806 | 251,550 | 27 | 848,981.2 |
| 1759 | 686,812 | 16½ | 1,416,549.6 | 1807 | 341,550 | 29 | 1,143,118.6 |
| 1760 | 1,067,625 | 16 | 2,135,250.0 | 1808 | 358,200 | 29 | 1,298,475.0 |
| 1761 | 788,625 | 15 | 1,478,671.7 | 1809 | 343,350 | 33 | 1,416,318.6 |
| 1762 | 832,500 | 14¾ | 1,534,921.7 | 1810 | 545,727½ | 29 | 1,978,261.7½ |
| 1763 | 599,625 | 15½ | 1,161,773.3½ | 1811 | 478,912½ | 28½ | 1,706,069.4 |
| 1764 | 898,875 | 19½ | 2,191,007.6½ | 1812 | 199,800 | 20 | 449,500.0 |
| 1765 | 1,082,250 | 18½ | 2,502,753.1 | 1813 | 178,875 | 15 | 335,390.5 |
| 1766 | 932,625 | 19½ | 2,073,273.3½ | 1814 | 327,937½ | 25 | 1,024,804.5½ |
| 1767 | 849,375 | 19½ | 2,070,351.4½ | 1815 | 283,275 | 24 | 849,825.0 |
| 1768 | 621,000 | 22½ | 1,746,562.4 | 1816 | 358,687 | 32 | 1,410,748.0 |
| 1769 | 1,024,312½ | 24½ | 3,136,957.0 | 1817 | 315,000 | 29 | 1,141,875.0 |
| 1770 | 1,043,437½ | 25 | 3,260,742.2 | 1818 | 250,412 | 28½ | 892,092.0 |
| 1771 | 1,050,187½ | 32 | 4,200,750.0 | 1819 | 493,200 | 27½ | 1,695,375.0 |
| 1772 | 839,677½ | 30 | 3,148,790.5 | 1821 | 311,787½ | 23 | 896,389. ½ |
| 1773 | 782,437½ | 25½ | 2,494,018.0 | 1822 | 432,062½ | 18½ | 1,001,457. ¼ |
| 1774 | 1,558,125 | 17½ | 3,408,398.3½ | 1823 | 408,150 | 16½ | 841,809.3 |
| 1775 | 837,000 | 16 | 1,674,000.0 | 1824 | 377,412½ | 16¾ | 790,207.3½ |
| 1776 | 808,550 | 17 | 1,718,168.6 | 1825 | 394,037½ | 19 | 935,839. ½ |
| 1777 | 1,244,812½ | 15 | 2,334,023. ¾ | 1826 | 357,617½ | 18 | 804,628.1 |
| 1778 | 1,057,800 | 16 | 2,115,600.0 | 1827 | 610,187½ | 18 | 1,395,420.6 |
| 1779 | 842,625 | 15 | 1,579,921.7 | 1828 | 398,187½ | 14½ | 721,714.7 |
| 1780 | 1,385,437½ | 17 | 2,944,054. ½ | 1829 | 498,862½ | 13 | 810,657.4 |
| 1781 | 464,625 | 17 | 987,318.1 | 1830 | 400,437½ | 12½ | 625,683.5 |
| 1782 | 1,035,675 | 17 | 2,265,539. ½ | 1831 | 389,000 | 8½ | 413,312.4 |
| 1783 | 990,000 | 18 | 2,227,500.0 | 1832 | 342,050 | 10¼ | 438,251.4 |
| 1784 | 535,900 | 16 | 1,171,800.0 | 1833 | 328,925 | 10½ | 431,714. ½ |
| 1785 | 537,750 | 17 | 1,142,718.6 | 1834 | 455,825 | 10½ | 598,270.2½ |
| 1786 | 610,875 | 16½ | 1,259,929.5½ | 1835 | 597,400 | 11 | 821,425.0 |
| 1787 | 451,125 | 16 | 902,250.0 | 1836 | 597,400 | 10¾ | 802,756.2 |
| 1788 | 317,662 | 16 | 635,324.0 | 1837 | 544,400 | 8¾ | 595,437.4 |
| 1789 | 478,125 | 15½ | 926,367.1½ | 1838 | 564,600 | 8½ | 599,887.4 |
| 1790 | 471,150 | 16 | 942,300.0 | 1839 | 928,800 | 7 | 812,700.0 |
| 1791 | 538,650 | 16½ | 1,410,340.3 | 1840 | 811,400 | 7½ | 479,437.4 |
| 1792 | 433,125 | 15 | 839,085.7½ | 1841 | 618,000 | 6½ | 502,125.0 |
| 1793 | 334,250 | 13½ | 564,053.1 | 1842 | 516,200 | 5⅞ | 330,609.5 |
| 1794 | 655,550 | 10½ | 860,409.3 | 1843 | 468,000 | 6 | 351,000.0 |
| 1795 | 584,125 | 12 | 876,187.4 | 1844 | 424,600 | 7½ | 398,062.4 |
| 1796 | 207,450 | 17½ | 453,796.7 | 1845 | 462,700 | 7¾ | 448,337.4 |
| 1797 | 493,425 | 15½ | 956,010.7½ | 1846 | 729,200 | 7¾ | 706,412.4 |
| 1798 | 512,325 | 18 | 1,152,731.2 | 1847 | 406,400 | 6¼ | 317,500.0 |
| 1799 | 452,675 | 19½ | 1,103,395.2 | 1848 | 968,800 | 5¾ | 696,325.0 |
| 1800 | 374,400 | 19 | 889,200.0 | 1849 | 899,200 | 5 | 562,000.0 |
| 1801 | 406,012½ | 18 | 913,528.1 | 1850 | 970,800 | 5½ | 642,425.0 |
| 1802 | 433,550 | 19 | 1,029,681.2 | 1851 | 866,400 | 4⅞ | 527,862.4 |
| 1803 | 559,350 | 21 | 1,468,229.6 | 1852 | 943,600 | 4¾ | 569,262.4 |
| 1804 | 346,500 | 28½ | 1,134,406.2 | 1853 | 715,400 | 7 | 625,975.0 |
| 1805 | 191,250 | 23 | 549,843.6 | 1854 | 782,800 | 5¼ | 513,712.4 |

〔付表〕2. コチニール(Cochineal) 呀蘭虫輸入数量・価格〔単位=斤Cty〕

| 年 度 | 大 不 列 顛 | | 仏 蘭 西 | | 独 逸 | | 総 計 | |
|-------------|---------|---------|-------|---------|-------|---------|-------|-----------|
| | 数量 | 元 値 | 数量 | 元 値 | 数量 | 元 値 | 数量 | 元 値 |
| 明治16(1883)年 | 1,213 | 613,459 | 987 | 515,628 | — | — | 2,202 | 1,129,087 |
| 明治17(1884)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治18(1885)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治19(1886)年 | — | — | — | — | 1,829 | 906,940 | 1,829 | 906,940 |
| 明治20(1887)年 | 1,646 | 631,130 | — | — | 1,831 | 902,150 | 3,477 | 1,533,280 |
| 明治21(1888)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治22(1889)年 | — | — | 171 | 115,000 | 421 | 226,830 | 592 | 341,830 |
| 明治23(1890)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治24(1891)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治25(1892)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治26(1893)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治27(1894)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治28(1895)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治29(1896)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治30(1897)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治31(1898)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治32(1899)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治33(1900)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |

- 〔註〕 1. 数値は、大蔵省主税局編『大日本外国貿易年表』による。
 2. 空欄の部分は、輸入されなかった年を示す。
 3. この数値は、『大日本帝国統計年鑑』の数値と一致をみない。
 4. 統計では、染料及彩料類 Dystuff, and Pigments に含まれる。

〔付表〕3. 紫梗(Lac) 輸入数量・価格〔単位=斤Cty〕

| 年 度 | 支 那 | | 東印度 及暹羅 | | 英 領 印 度 | | 総 計 | |
|-------------|-------|-----------|---------|---------|---------|-----------|--------|-----------|
| | 数量 | 元 値 | 数量 | 元 値 | 数量 | 元 値 | 数量 | 元 値 |
| 明治16(1883)年 | 4,345 | 473.000 | 1,075 | 166.630 | — | — | 5,420 | 639.930 |
| 明治17(1884)年 | — | — | 493 | 46.300 | — | — | 493 | 46.300 |
| 明治18(1885)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治19(1886)年 | — | — | 835 | 75.800 | — | — | 835 | 75.800 |
| 明治20(1887)年 | 525 | 60.000 | 879 | 80.000 | — | — | 1,404 | 140.000 |
| 明治21(1888)年 | — | — | 2,333 | 217.360 | — | — | 2,333 | 217.360 |
| 明治22(1889)年 | 2,060 | 244.000 | — | — | — | — | 2,060 | 244.000 |
| 明治23(1890)年 | 2,143 | 319.000 | — | — | — | — | 2,143 | 319.000 |
| 明治24(1891)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治25(1892)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治26(1893)年 | 1,941 | 355.640 | — | — | 3,780 | 800.710 | 5,721 | 1,156.350 |
| 明治27(1894)年 | 918 | 137.000 | — | — | — | — | 918 | 137.000 |
| 明治28(1895)年 | 5,466 | 1,040.000 | — | — | 4,095 | 678.680 | 9,561 | 1,718.680 |
| 明治29(1896)年 | 990 | 220.000 | 2,165 | 323.850 | 5,400 | 976.000 | 8,555 | 1,519.850 |
| 明治30(1897)年 | 2,519 | 452.000 | — | — | 9,248 | 1,868.000 | 11,767 | 2,320.000 |
| 明治31(1898)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治32(1899)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 明治33(1900)年 | — | — | — | — | — | — | — | — |

- 〔註〕 1. 統計では、薬材および製薬類 Drugs, Medicines and Chemicals に含まれる。

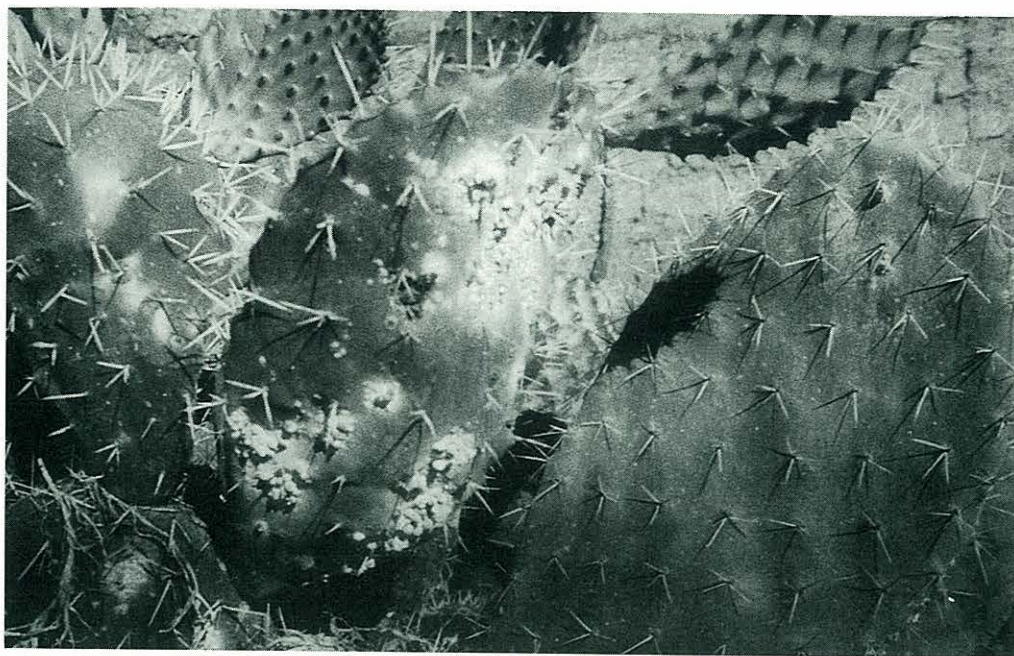


図1. アンデス地帯における野生コチニール
〔昭和52年8月、ペルー北部高原地帯カハマルカ附近にて撮影〕



図2. カナリヤ諸島におけるコチニール飼養

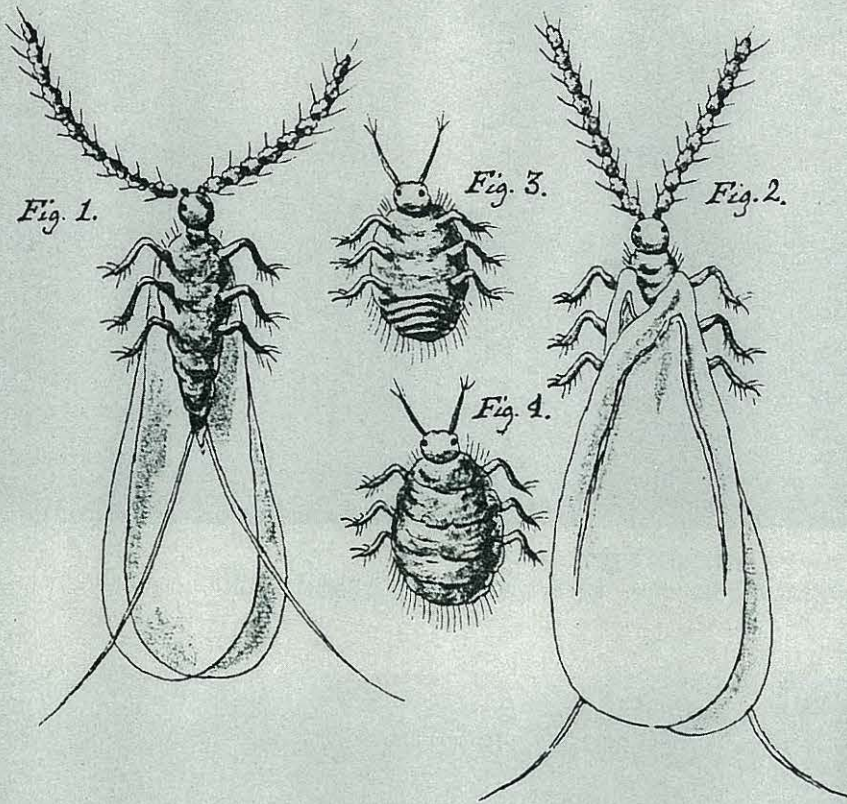


Fig. 1. El Macho de la grana visto por la parte inferior con Microscopio de mucho aumento.

Fig. 2. el mismo visto por la parte superior.

Fig. 3. Fig. 4. las Cochinillas vistas con el mismo Microscopio, la Fig 3. le representa vista por la inferior, y la 4., por la superior, quando se ven en esta figura no caminan por las Pencas; tan solamente se les observan dos Ojos, y no se distinguen los Machos de las Hembras.

図3. 『自然界の記録—コチニールの栽培と恩恵』[メキシコ, 1777]
「コチニール」



*Fig. 1. Indio que recoje la Cochinilla con una colita de Venado.
Fig. 2. dicha. Fig. 3. Xicalpeste en que aparan la Cochinilla.*



*Indio arrojando la Cochinilla, en una olla llena de agua, y
puesta sobre brazas para matarla.*

図5. 『自然界の記録—コチニールの栽培と恩恵』[メキシコ, 1777]
「コチニールの煮沸」

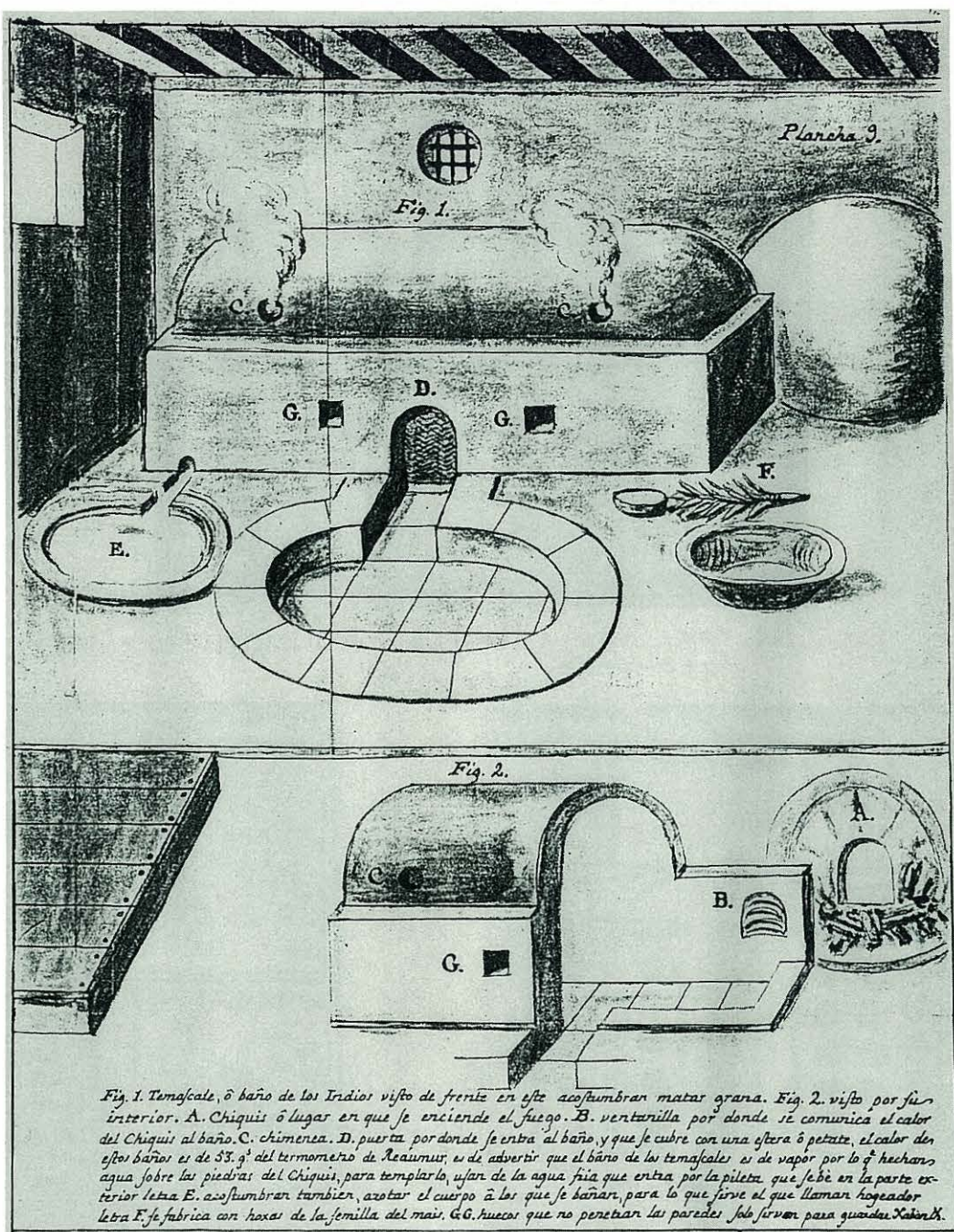


図6. 『自然界の記録—コチニールの栽培と恩恵』〔メキシコ, 1777〕
「コチニールの工房」



図7. 『グラナ, コチニールの(製造)手順, 方法, および法令』[メキシコ, 1773]
「コチニールの採集」

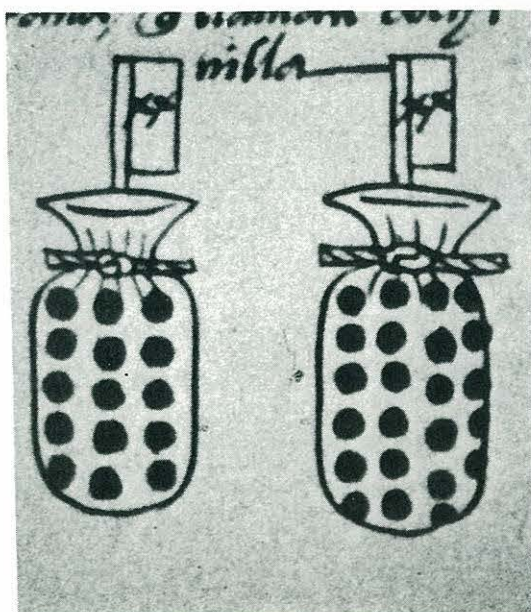


図8. 『メンドーサ絵文書』にみる
「コチニールの収納袋」

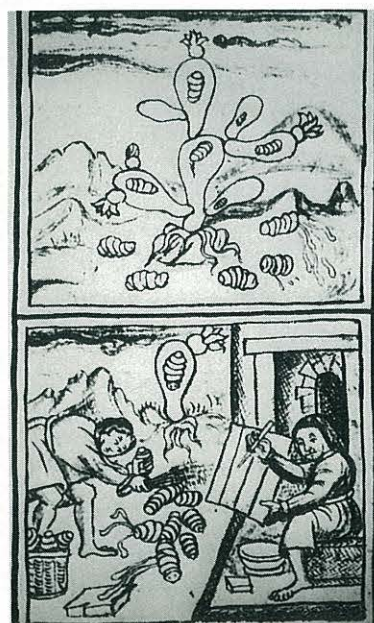


図9. 『フローレンス絵文書』にみる
「コチニールの採集」「コチニールの塗装」

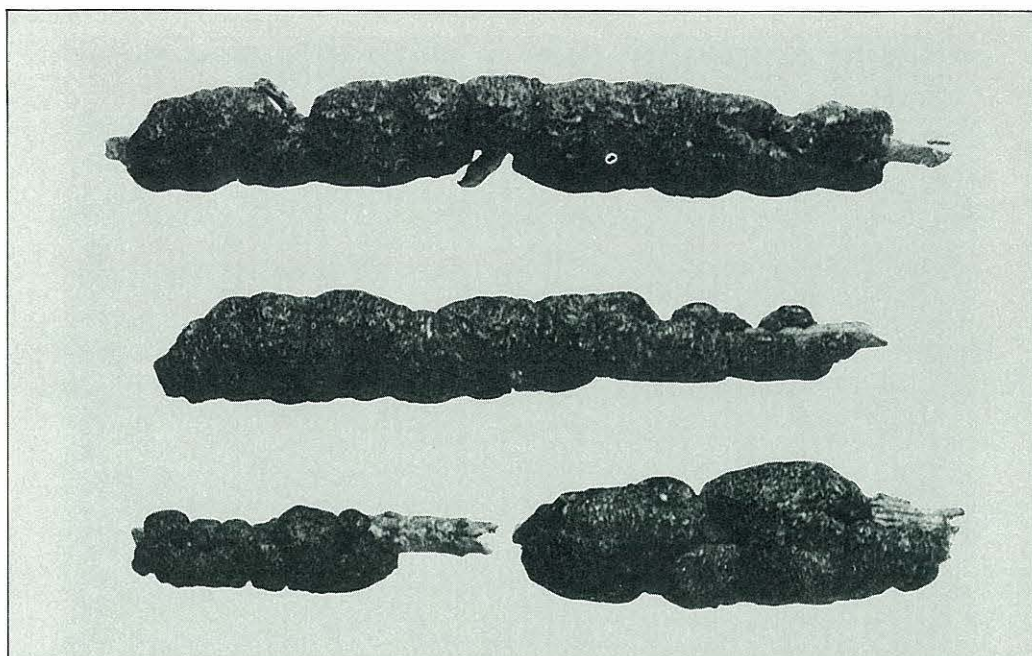


図11. 紫鏝(『正倉院宝物』北倉 第69図による)

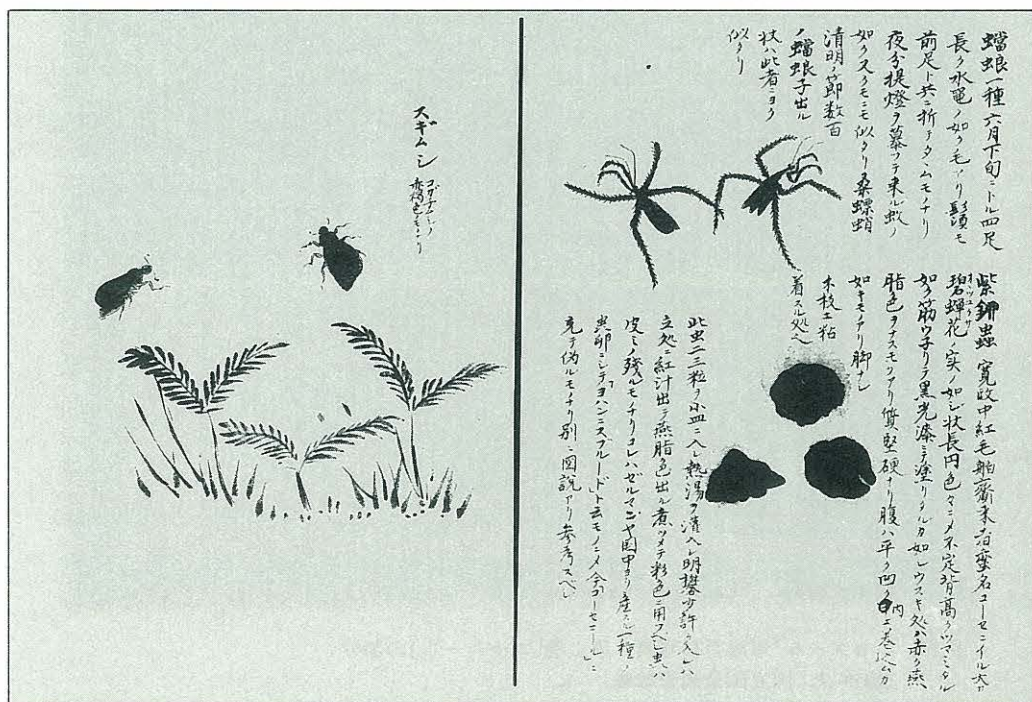


図12. 栗本丹州(昌藏)『栗氏千虫譜』10巻〔文化8(1811)年成立〕(曲直頼輔写)
〔国立国会図書館蔵〕巻四「紫鏝虫」(1)



図15. 栗本丹州(昌蔵)『千虫譜』上中下3巻〔文化8(1811)年成立〕(服部雪斎写)
〔国立国会図書館蔵〕下巻「紫鉚」(1)

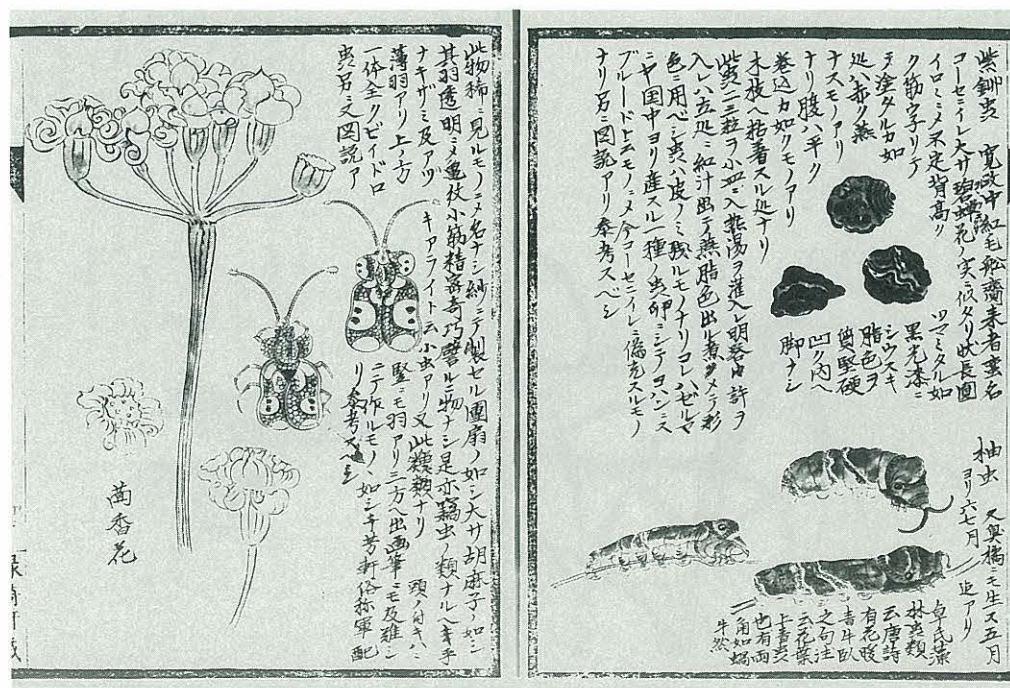


図16. 栗本丹州(昌蔵)『千虫譜』上中下3巻〔文化8(1811)年成立〕(服部雪斎写)
〔国立国会図書館蔵〕下巻 コムラッカ (2)

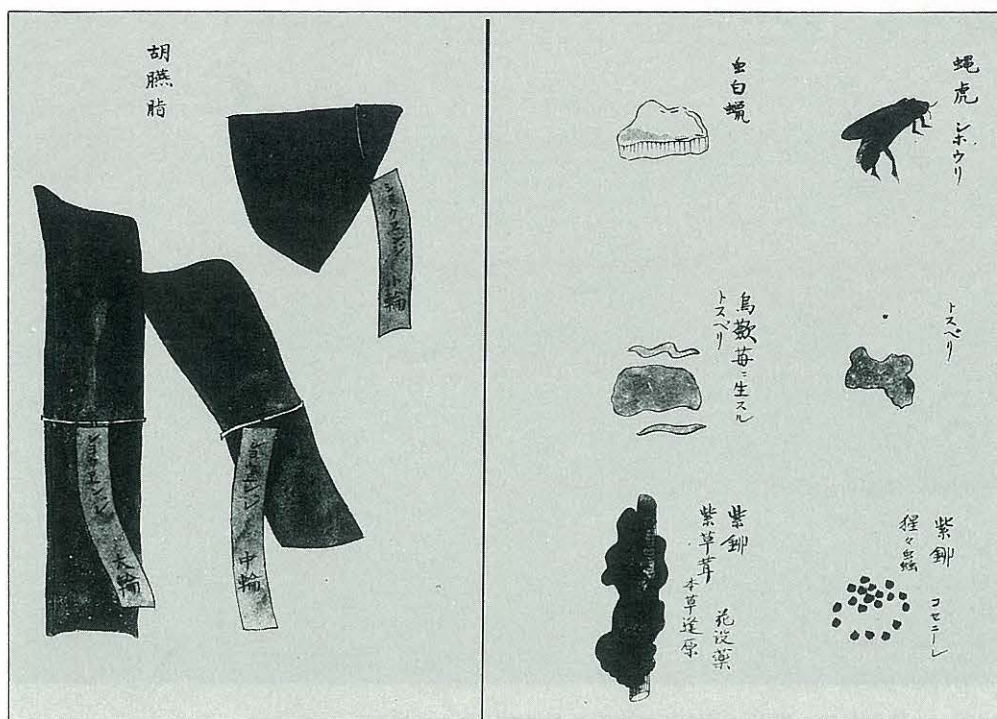


図17. 前田利保『啓蒙虫譜図解 (別名, 啓蒙虫譜)』2巻〔天保12(1841)年序〕
〔国立国会図書館蔵〕上巻「紫鉚 (コセニール, 猩々虫)」紫鉚 (花没薬, 紫草茸, 本草逢原)」「胡騰脂」

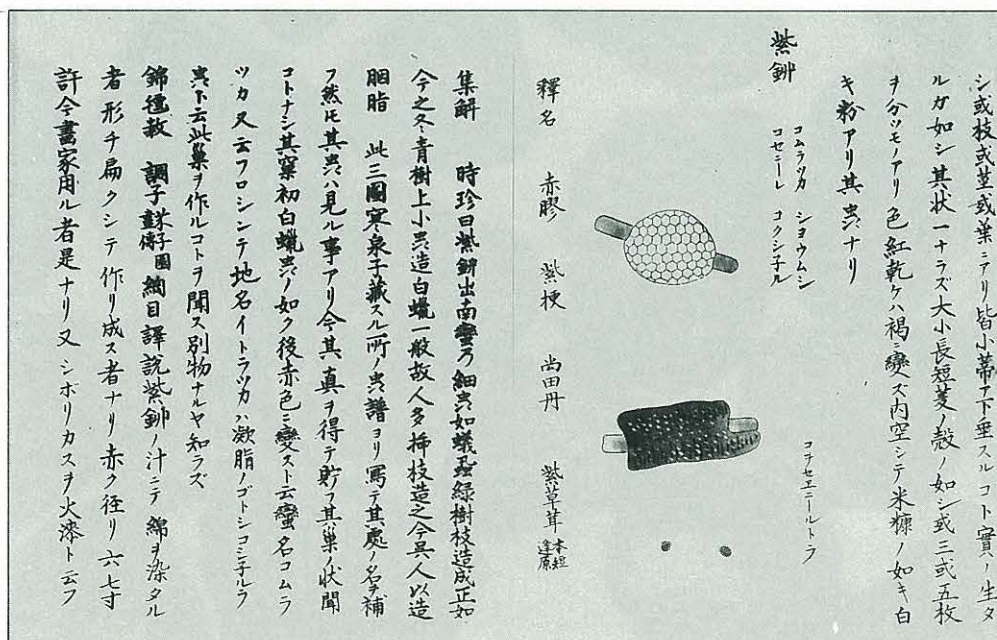


図18. 飯室庄左衛門『虫譜図説』12巻〔安政3(1856)年序〕
〔国立国会図書館蔵〕巻2, 卵生類2, 凡そ百四十五品「紫鉚」

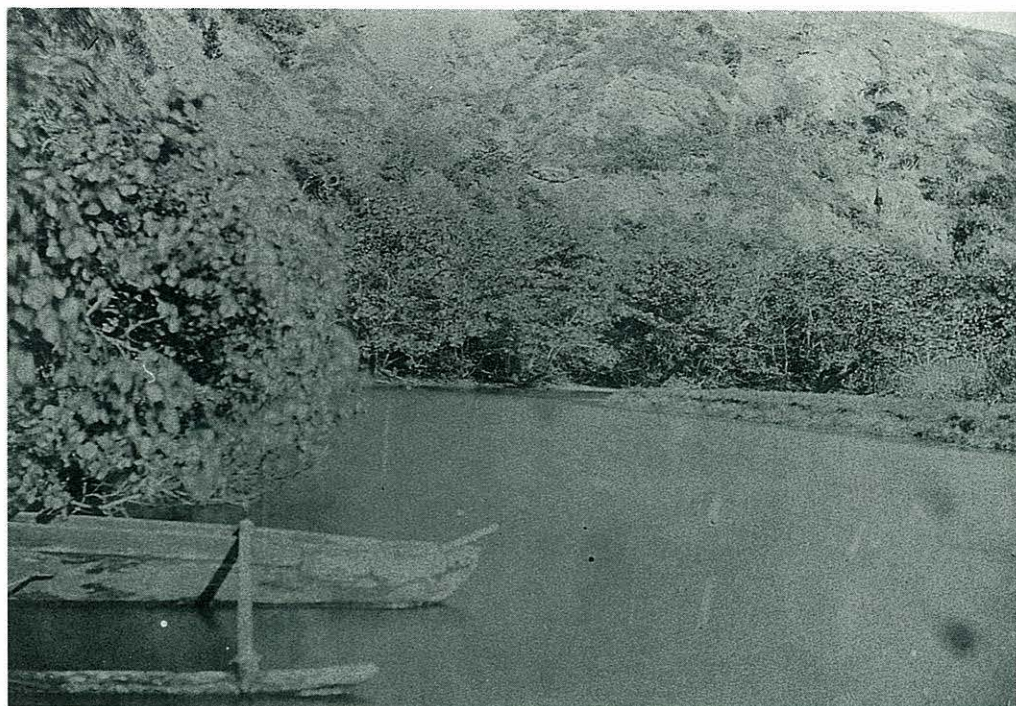


図19. 小笠原父島・袋沢（明治9年政府派遣視察団による撮影）
〔国立公文書館蔵〕

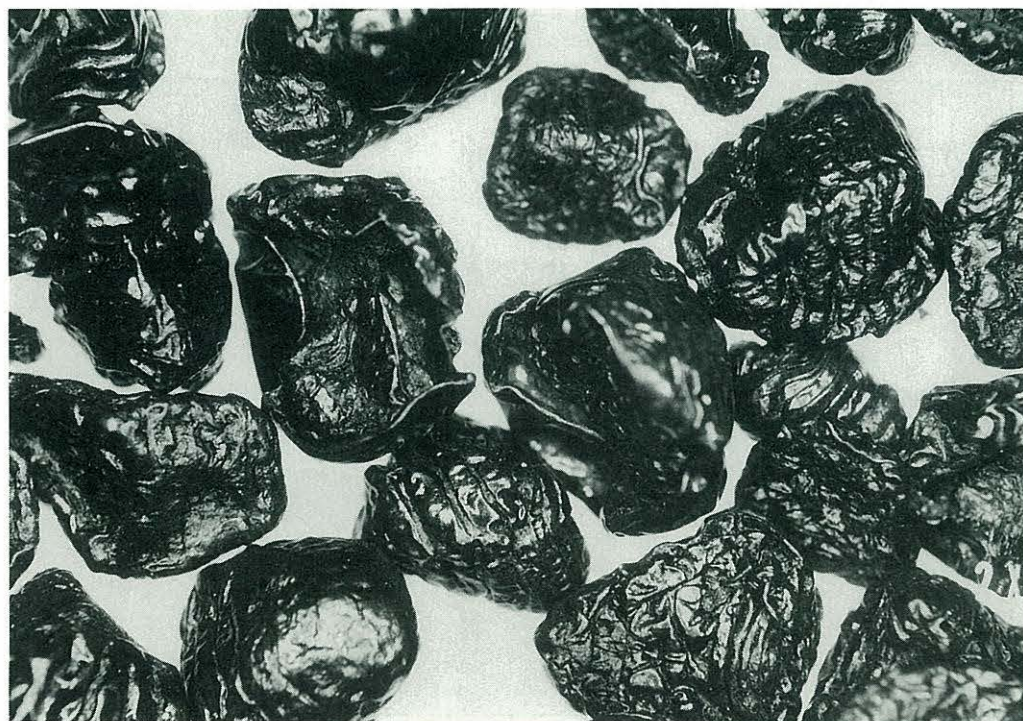


図20. 商品としてのブラック・コチニール（約6倍）
〔現在、市販されているもの〕



図21. 商品としてのシルバー・コチニール (約6倍)
〔現在、市販されているもの〕

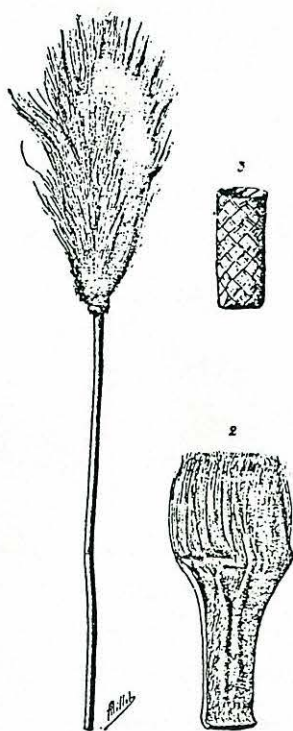


図22. コチニールの採集具
〔『メキシコのコチニールの歴史』〕
1. 箒, 2. 採集袋, 3. 培養箱

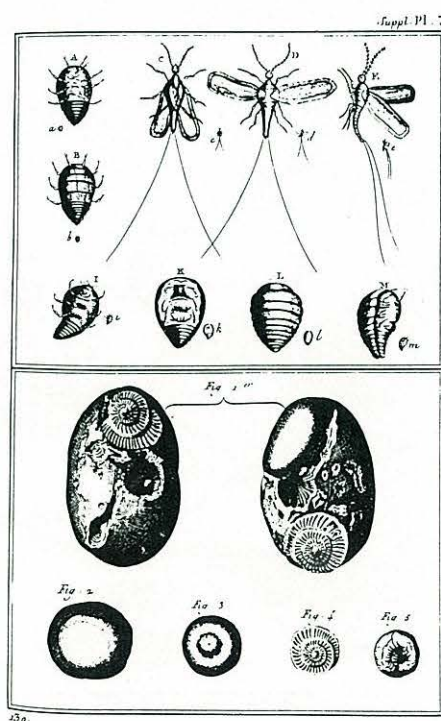


図23. コチニール虫 (雄・雌)
〔『フランス百科全書絵引』1985年9
月2日 平凡社〕



図24. コチニールの採集
〔『メキシコの歴史』第Ⅳ巻 第90分冊 1974〕